

浅川扇状地遺跡群

^{きり}桐 ^{はら}原 ^{みや}宮 ^{にし}西 遺 跡

^{ごん}権 ^{げん}現 ^{どう}堂 遺 跡 (2)

^{よし}吉 ^だ田 ^{ふる}古 ^や屋 ^{しき}敷 遺 跡 (2)

^{そり}返 ^め目 遺 跡

2005 年 3 月

長野市教育委員会

序

長野市において、平成10年2月7日から16日間の熱戦がくりひろげられた第18回オリンピック冬季競技大会と、3月5日から10日間にわたり感動のドラマを魅せてくれた第7回パラリンピック冬季競技大会も、数多くの人々のご協力により大成功のうちに閉幕することができました。

思い起こせば平成3年6月15日の開催都市決定以来、高速道路や新幹線の開通、会場周辺の道路整備など、オリンピックに向けて空前絶後の開発ラッシュとなり、当市をとりまく環境も急激に変化いたしました。しかしながらこうした激変の片隅で、地中に埋もれている貴重な歴史である埋蔵文化財が、これら開発行為によって犠牲となっていることも忘れてはならないでしょう。私たちはその開発行為により失われてしまう埋蔵文化財の保護・保存・公開という大きな責務を担っております。

ここに長野市の埋蔵文化財第108集として刊行いたします本書は、平成16年度に実施した浅川扇状地遺跡群内4遺跡の発掘調査報告書であります。各調査の規模は比較的小さなものでありましたが、貴重な遺構・遺物が出土しています。その成果は、連綿と綴られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役にいただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩 睦秀

例 言

- 1 本書は、平成16年度に長野市内で計画された宅地開発事業等に伴って浅川扇状地遺跡群内の各遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書を、長野市の埋蔵文化財第108集として合冊にしたものである。
- 2 各遺跡の発掘調査は、各事業主体者からの委託を受けて埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づいて長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。事業主体及び「起因事業」は次のとおりである。
 - 桐原宮西遺跡：株式会社大建「ガーデンパーク桐原宅地造成」
 - 権現堂遺跡：株式会社ブラット「ぶらっと稲田店建設」
 - 吉田古屋敷遺跡：株式会社マリモ「ポレスターステーション北長野建設」
 - 返目遺跡：マツダ株式会社「三輪2丁目団地宅地造成」
- 3 本書の編集及び執筆は各遺跡の調査員が担当し、各報告書の例言に分担を記した。
- 4 遺構図中に示した座標・標高は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 5 遺構の名称として、竪穴住居＝S B、溝＝S D、土坑＝S K、小穴＝S Pという略号を用いた。
- 6 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。

浅川扇状地遺跡群

桐原宮西遺跡

ガーデンパーク桐原宅地造成地点

2005年3月

長野市教育委員会

例言

- 1 本書は、株式会社大建「ガーデンパーク桐原」宅地造成事業に伴い実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告である。
- 2 発掘調査地は、長野県長野市桐原1丁目793字宮西に所在する。遺跡名は字名を付して「桐原宮西遺跡」とした。
- 3 発掘調査は青木、遠藤、小出、森田が実施した。整理作業は小出、森田が担当し、本書の編集・執筆は小出が担当した。
- 4 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺跡の略記号は「AKMN」としてある。
- 5 遺構図は発掘調査現地において1：20の縮尺で作成したものを原図とし、本書では基本的に1：80の縮尺で掲載しているが、微細図についてはこの限りではない。なお、図中の網掛けは焼土、炭化物の範囲を示す。
- 6 遺物は原寸大で実測し、本書では基本的に1：4の縮尺で掲載したが、それ以外のものについては表記した縮尺を参照されたい。なお、図中の網掛けは黒色処理が施されていることを示す。
- 7 遺物写真の縮尺は、土器が約1：3、石製品が約1：2である。なお、破片資料については任意である。

目次

例言・目次

第I章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査日誌	
第3節 調査体制	
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 調査区の立地と環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 周辺の考古学的環境	
第III章 調査成果	7
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第IV章 結語	21
遺構一覧表・遺物観察表	
遺物写真	

挿 図 目 次

図 1	宅地造成行事範囲	1
図 2	調査地位置図	4
図 3	調査地周辺の宇境図	5
図 4	調査地周辺地形図	5
図 5	周辺の遺跡分布図	6
図 6	調査区位置図	7
図 7	調査区遺構分布図	8
図 8	調査区全体図	9
図 9	S B 1 実測図	10
図 10	S B 1 カマド実測図	11
図 11	S B 1 出土遺物実測図	11
図 12	S B 2 実測図	12
図 13	S B 2 カマド実測図	13
図 14	S B 2 出土遺物実測図	13
図 15	S B 3 実測図	14
図 16	S B 4 実測図	14
図 17	S B 5 実測図	15
図 18	S B 5 出土遺物実測図	15
図 19	S B 6 実測図	16
図 20	S B 6 出土遺物実測図	16
図 21	S B 7 実測図	17
図 22	S B 7 カマド実測図	17
図 23	S B 7 出土遺物実測図	17
図 24	S B 8 実測図	18
図 25	S B 8 出土遺物実測図	18
図 26	S B 9 実測図	18
図 27	S B 9 出土遺物実測図	19
図 28	S B 10 実測図	19
図 29	S T 1 実測図	20
図 30	検出面出土遺物実測図	20

写 真 目 次

写真 1	A 区遺構検出	2
写真 2	A 区遺構の調査	2
写真 3	B 区遺構の調査	2
写真 4	B 区遺構測量	2
写真 5	B 区西側の遺構	8
写真 6	A 区全景	8
写真 7	S B 1	10
写真 8	S B 1 カマド	11
写真 9	S B 2 掘下途中	12
写真 10	S B 2 完掘	12
写真 11	S B 2 カマド	13
写真 12	S B 3	14
写真 13	S B 4・5・6	14
写真 14	S B 5	15
写真 15	S B 6 カマド	16
写真 16	S B 7	17
写真 17	S B 7 カマド	17
写真 18	S B 8	18
写真 19	S B 9	19
写真 20	S T 1	20

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経過

長野市桐原地区は、長野市中心市街地から北東に約 2 km のところに位置する。地形的には北西から南東方向に緩やかに傾斜する浅川扇状地扇央下位に所在する。

平成 15 年 4 月、株式会社大建は長野市桐原地区 1 丁目 793 に総面積 4,863㎡、14 区画に及ぶ「ガーデンパーク桐原」宅地造成工事を計画した。事業予定地は、周知の通り、「浅川扇状地遺跡群」の範囲内にあたるため、埋蔵文化財包蔵地である可能性が高いと考えられた。このため、長野市埋蔵文化財センターは事業主体者と埋蔵文化財保護に関する協議を行い、平成 16 年 2 月に埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施することになった。

試掘調査は事業予定地内の 3 箇所で行われ、遺物包含層は大半が削平されているものの、現地表より 37cm 下という浅い層位で埋蔵文化財の包蔵を確認した。また、事業予定地内の西側は谷地形となっており、埋蔵文化財が存在しないとの所見を得た。

この結果、事業面積 4,863㎡中、掘削等の工事過程により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性がある道路造成部分約 840㎡について記録保存を目的とした発掘調査の実施が必要になった。なお、表土除去の段階で埋蔵文化財の包蔵がはっきりと確認されたのは一部分であったため、実質的な調査面積は約 400㎡である。

本調査は、平成 16 年 4 月 5 日に調査機材の搬入を行い、4 月 6 日から 28 日までの実質 15 日間にわたり実施した。調査後、継続的に整理作業を行い、本報告書の刊行に至った。

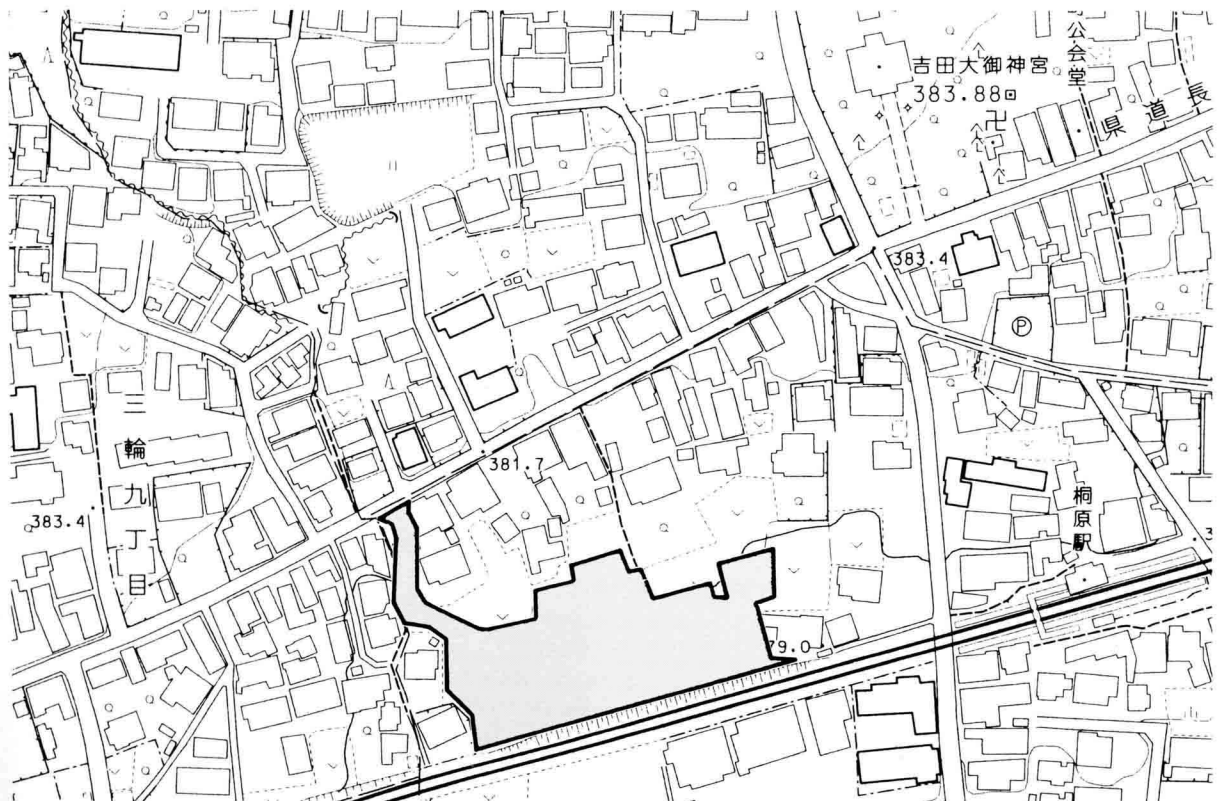


図 1 宅地造成事業範囲 (1 : 2,500)

第2節 調査日誌

発掘調査は平成16年4月5日に調査機材の搬入を行い、4月6日に開始し、28日に終了した。

4月5日 発掘調査機材の搬入を行う。

4月6日 A区西側部分の遺構検出作業を行う。SB1～4、土坑、小穴を検出し、調査を開始する。

4月7日 SB1～4の調査を継続する。調査途中の状況を写真撮影する。

4月8日 A区東側部分の遺構検出作業を行う。SB5～7、土坑、小穴を検出する。SB1～4の調査を終了し、清掃後、写真撮影を行う。

4月9日 SB5～7、土坑、小穴の調査を開始する。SB2の遺構測量を実施する。

4月12日 引き続きSB5～7の調査を行う。SB1・2の重複部分を調査し、SB1の東壁を確認する。

4月13日 SB1の調査を終了し、清掃後、SB1・2の写真撮影を行う。引き続きSB5～7の調査を行う。

4月14日 SB5～7の調査を継続する。B区東側の表土除去を行う。SB8、土坑、小穴を検出し、調査を開始する。

4月15日 A区の遺構調査がすべて終了し、写真撮影を行う。B区SB8の調査が終了し、写真撮影を行う。

4月16日 SB1～8の掘方を確認する。

4月19～22日 調査が終了した遺構の測量を実施する。

4月23日 B区西側の表土除去および遺構検出作業を行う。SB9・10、ST1、土坑、小穴を検出する。

4月26日 SB9・10、ST1、土坑、小穴の掘削を開始する。

4月27日 B区西側の遺構測量を行う。

4月28日 SB9・10の掘り残り部分を調査し、清掃後、B区西側の写真撮影を行う。B区のすべての遺構調査を終了する。



写真1 A区遺構検出



写真2 A区遺構の調査



写真3 B区遺構の調査



写真4 B区遺構測量

第3節 調査体制

埋蔵文化財の保護調査については、史跡等整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会文化財課が担当し、各種開発行為にともなう緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩陸秀
総括管理者	文化財課長	塩澤一郎
統括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口忠良
庶務担当	係長	山岸恒雄
	職員	吉村久江
	事務員	塚田容子
調査担当	係長	青木和明（調査員）
	主査	飯島哲也 風間栄一
	主事	小林和子
	専門員	堀内健次 清水竜太 遠藤恵実子（調査員） 長瀬 出 山野井智子 石丸敦史 小出泰弘（調査員） 森田利枝（調 査員） 宮沢浩司 山岸千晃

発掘作業員

伊藤八重子 上原律江 後藤一雄 塩入洋子 清水昭光 田中純子 田村秀之 角田恵子 寺島直利 宮沢周子
宮下美代子 山口勝己

整理調査員

青木善子 池田寛子 多羅沢恵美子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理作業員

倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

遺構測量委託

株式会社写真測図研究所

発掘調査の実施にあたり、株式会社大建の皆様には多大なご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 調査地の立地と環境

調査地は長野市桐原1丁目793字宮西に所在する。地形的には、浅川の開析によって形成された扇状地扇央下位に位置しており、北西方向から南東方向に緩やかに傾斜している。また、西側は谷地形となっており、調査地の西端では西方向に傾斜する様子が窺える。標高は現況で379～380mである。調査区南側は長野電鉄長野線に面しており、東に約150mの所には最寄り駅として桐原駅があり、交通の便は良好である。北側は県道長野豊野線（相ノ木通り）が東西方向に貫通し、沿線に住宅が建ち並ぶ。調査地はその裏手にあたり、畑地として利用されていた場所である。

第2節 歴史的環境

桐原地区ではこれまでに考古学的な発掘調査が実施された例が少ない。ここでは、文献史料から窺える桐原地区の歴史的環境を述べることにする。

今回の発掘調査地が所在する長野市桐原地区は、古代の桐原牧が存在した地と言われている。『角川日本地名大辞典20長野県』によれば、その根拠として、中世期になると隣接する吉田地区に吉田牧が造られること、付近に宇木・駒沢といった字名があること、桐原地区内に牧野という字名が残っていることが挙げられている。しかし、実際には桐原牧の所在地を現在の長野県松本市入山辺桐原とする説もあり、桐原牧の所在については不明な部分が多い。ただし、桐原地区は、浅川扇状地上に位置しており、放牧に適した地形であると考えられている。また、桐原地区牧野に桐原牧神社が鎮座しており、牧の存在を考える上で興味深い事実である。なお、『北山抄』の記述によれば、桐原牧が後院領として馬を貢上していたことが窺える。

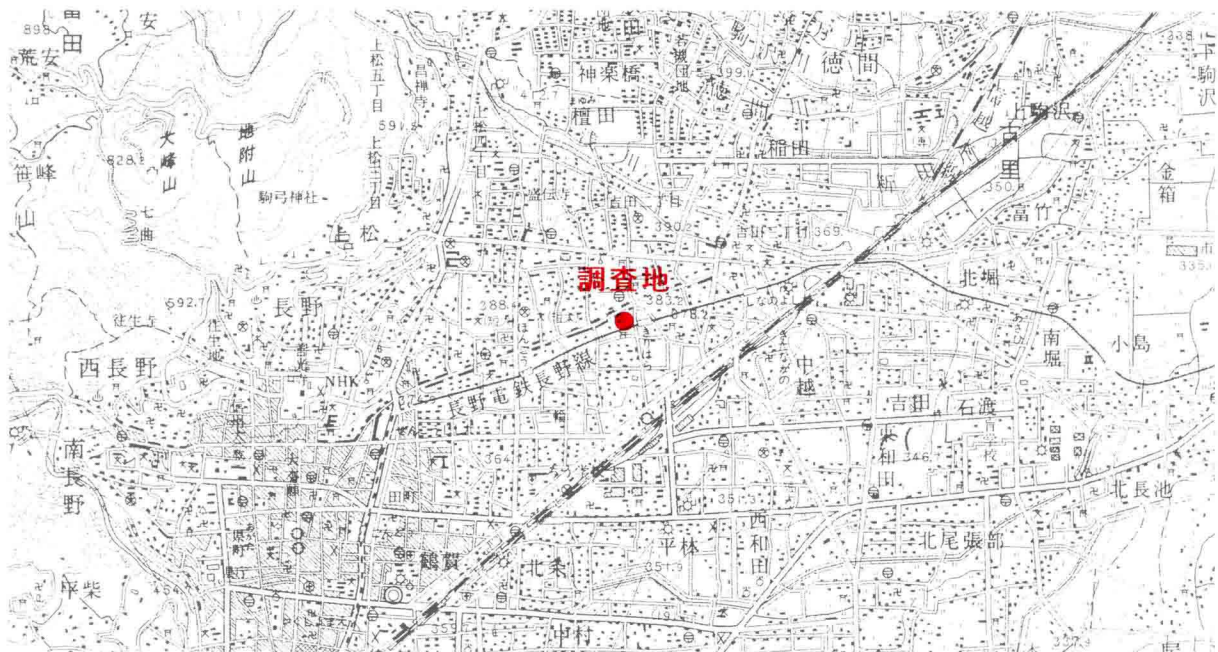


図2 調査地位置図 (1 : 50,000)

中世期には、宇木や押鐘といった周辺の村と同様に居館が築かれていたようである。『長野縣町村誌』によれば高野氏城館とされているが、その築城や廃棄の時期については不明である。桐原牧社の東方に位置していたと考えられており、内郭の堀跡を示す「堀田」の地名と外郭を示す方形の道路がその名残とされている。

近世期には、桐原村として松代藩に属することとなる。村の北方を北国街道が貫通しており、沿道に人家が密集し、人々の往来も盛んであったと推定される。現在の県道長野豊野線（相ノ木通り）がそれであり、三輪地区から桐原地区を抜けて吉田地区に至る約2kmはほぼ一直線の道路となっている。



図3 調査地周辺の字境図 (1 : 5,000)

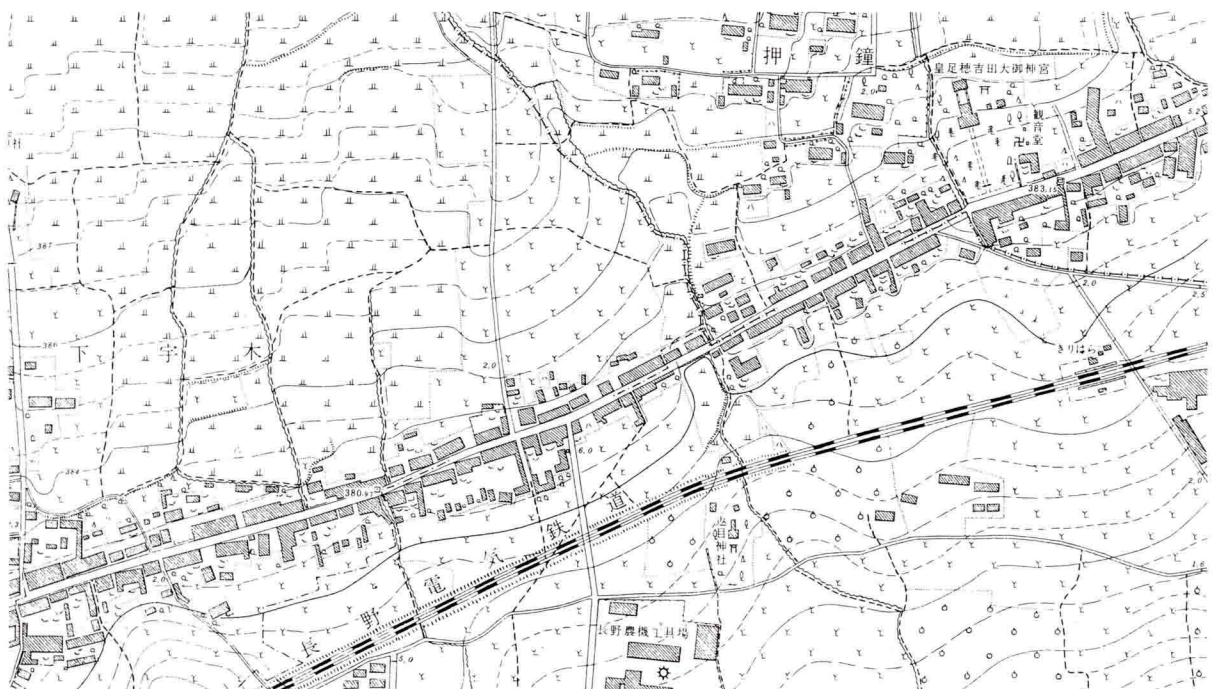


図4 調査地周辺地形図 (1 : 5,000 大正 15 年測量・昭和 27 年修正)

第3節 周辺の考古学的環境

ここでは桐原宮西遺跡周辺の発掘調査歴のある遺跡について概要を記述する。

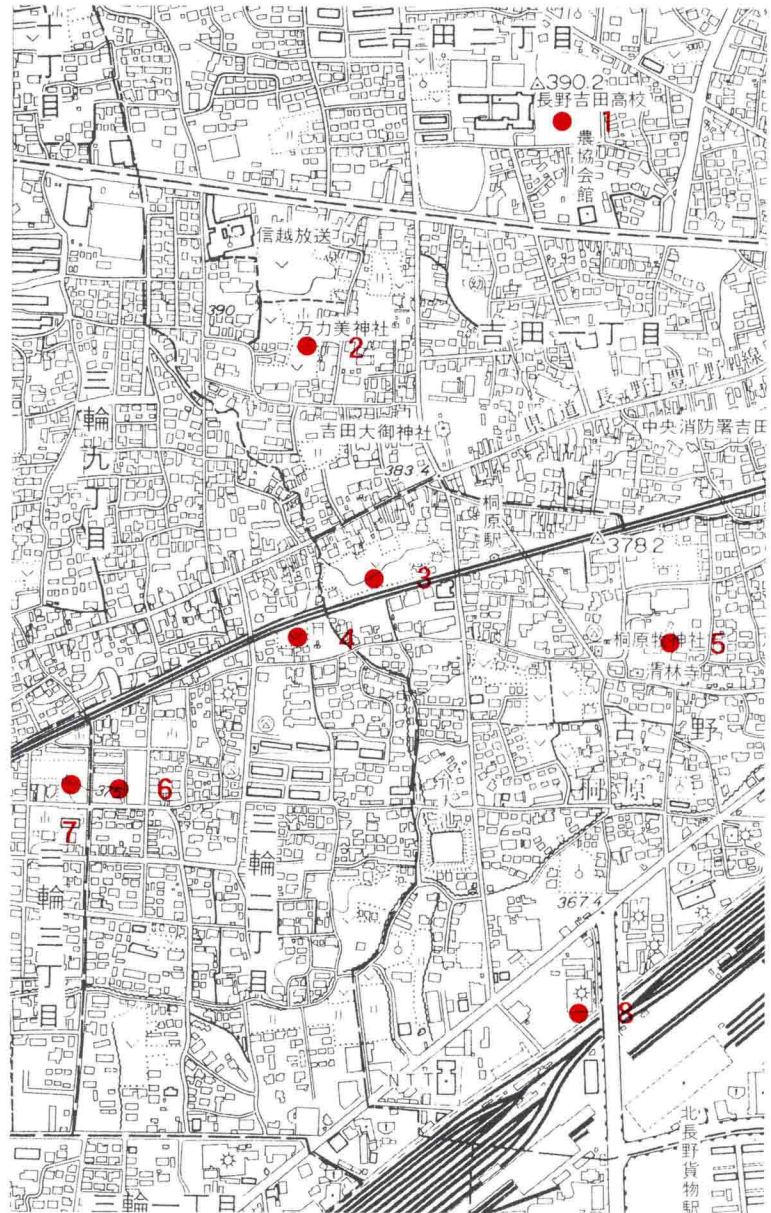
1 長野吉田高校グランド遺跡 弥生時代後期初頭「吉田式土器」の標識遺跡である。昭和50～51年の第1・2次調査、昭和60年の第3次調査、平成11年の第4次調査により弥生時代後期初頭の竪穴住居跡が総計33軒確認されており、該期集落の良好な調査事例である。(長野市教育委員会2001『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』)

4 返目遺跡 平成16年に宅地造成に伴う発掘調査が実施され、土坑2基、溝状遺構4条が確認されている。溝状遺構1条は古墳時代前期に比定される。(長野市教育委員会2005『桐原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古屋敷遺跡(2)・返目遺跡』)

6 三輪遺跡(3) 平成2年に日本国有鉄道清算事業団の本郷団地宅地造成事業に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、後期の土坑1基、平安時代の竪穴住居跡3軒、土坑6基、溝2条、中世期の土坑5基が確認された。(長野市教育委員会1991『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』)

7 三輪遺跡(4) 平成4年に長野県職員宿舍建設に伴う発掘調査が実施された。平安時代の竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、柱穴群、土坑1基、溝6条、中世以降の溝3条、五輪塔埋納遺構、時期不明の柱穴列、土坑が検出された。(長野市教育委員会1993『三輪遺跡(4)』)

8 新幹線調査地点 平成5～7年に北陸新幹線建設に伴う発掘調査が(財)長野県埋蔵文化財センターにより実施された。調査範囲は長野市鶴賀から吉田までと、稲田から上駒沢までの約5kmにわたる。図示した長野市古野地点の調査では、弥生時代後期から平安時代までの竪穴住居跡30軒、奈良時代の掘立柱建物跡6棟の他、水田跡、溝、土坑等が検出されている。(財)長野県埋蔵文化財センター1998『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』)



- | | |
|----------------|-----------|
| 1 長野吉田高校グランド遺跡 | 2 押鐘城館跡 |
| 3 桐原宮西遺跡 | 4 返目遺跡 |
| 5 桐原居館(高野氏城館)跡 | 6 三輪遺跡(3) |
| 7 三輪遺跡(4) | 8 新幹線調査地点 |

図5 周辺の遺跡分布図(1:10,000)

第三章 調査成果

第1節 調査の概要

調査区は宅地造成地内の道路造成部分約840㎡である。試掘調査および表土除去の段階で、南側・西側の道路では遺構の存在が明確に認められなかった。この結果、実質的な調査区はL字を2つ組み合わせたような形状を呈する約400㎡となった。調査区内は遺構の分布状況からA区とB区に分けられる。また、北西方向から南東方向に向かって緩やかに傾斜しているため、A区とB区の間には約1.1mの標高差がある。A区の検出面は黄褐色土の地山面で、遺構覆土は黒褐色土である。A区西端からB区にかけては土層堆積状況が異なり、浅川の氾濫によって流入したと考えられる円礫層が堆積している。そのためB区では礫層の直上を検出面とした。また、遺構覆土は小石混じりの黒褐色土である。なお、遺物包含層は黒褐色の砂利層であるが、大半が削平を受けていた。

A区では、古墳時代後期から奈良時代初頭の竪穴住居跡4軒（SB1・3・5・7）、平安時代の竪穴住居跡2軒（SB2・6）、時期不明の竪穴住居跡1軒（SB4）を検出した。SB1・2・6・7ではカマドが確認でき、特にSB2ではカマドの天井石が崩落した状況で良好に残存していた。B区では、平安時代の竪穴住居跡3軒（SB8・9・10）、掘立柱建物跡1棟（ST1）を検出した。

土坑と小穴は、A、B両地区で確認したが、出土遺物が少なく時期を特定できなかった。また、検出面および遺構覆土から弥生土器の破片が出土した。大半が弥生時代中期（栗林式期）のものと思われるが、いずれも小破片である。また、調査時に該期の遺構が確認できなかったため、近隣からの混入遺物と考えられる。

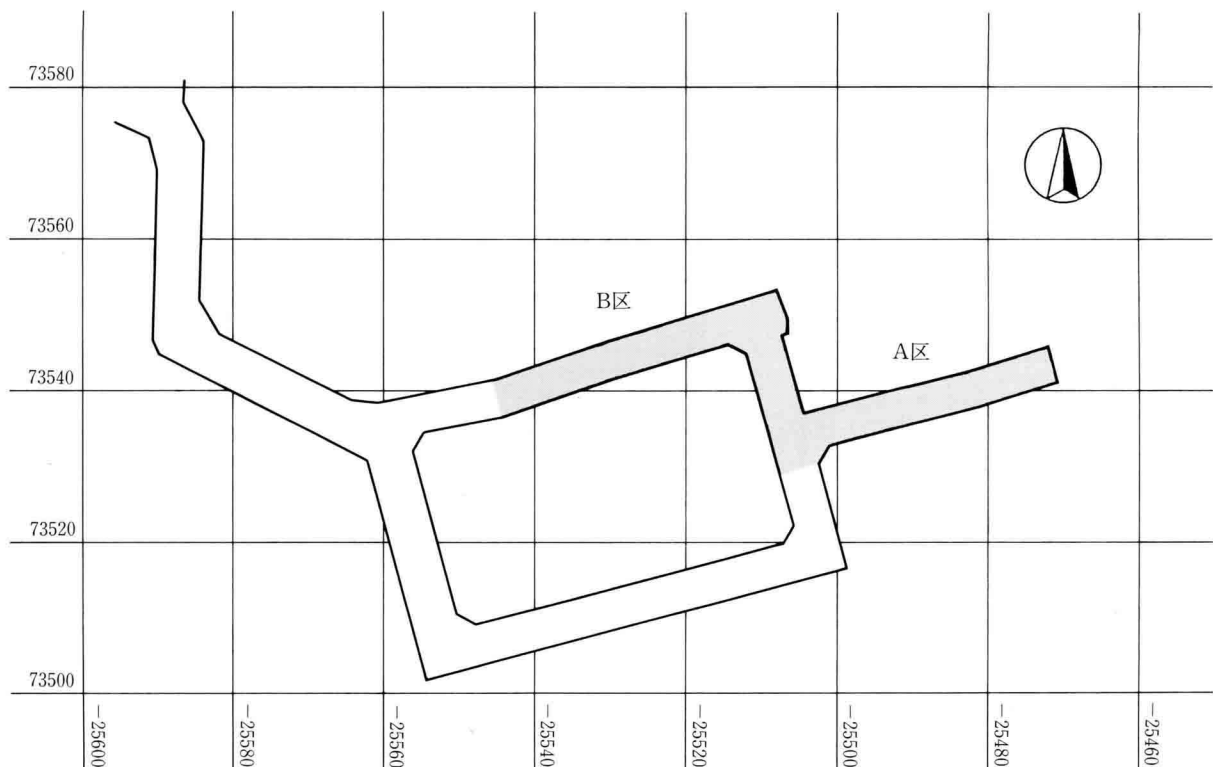


図6 調査区位置図 (1:1,000)



写真5 B区西側の遺構

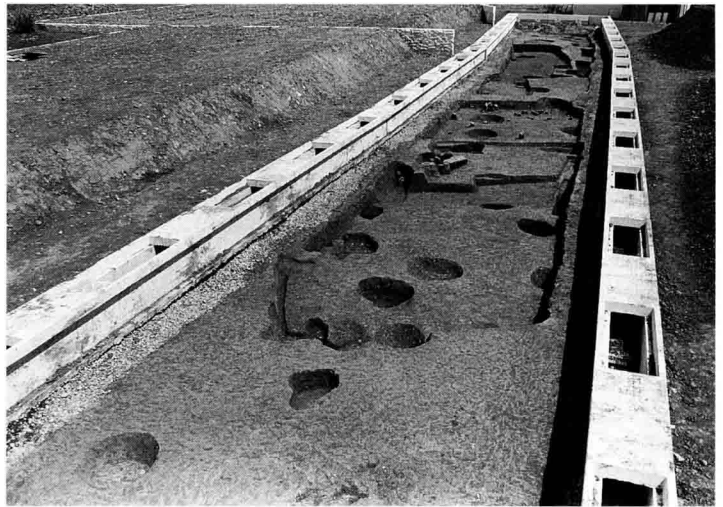
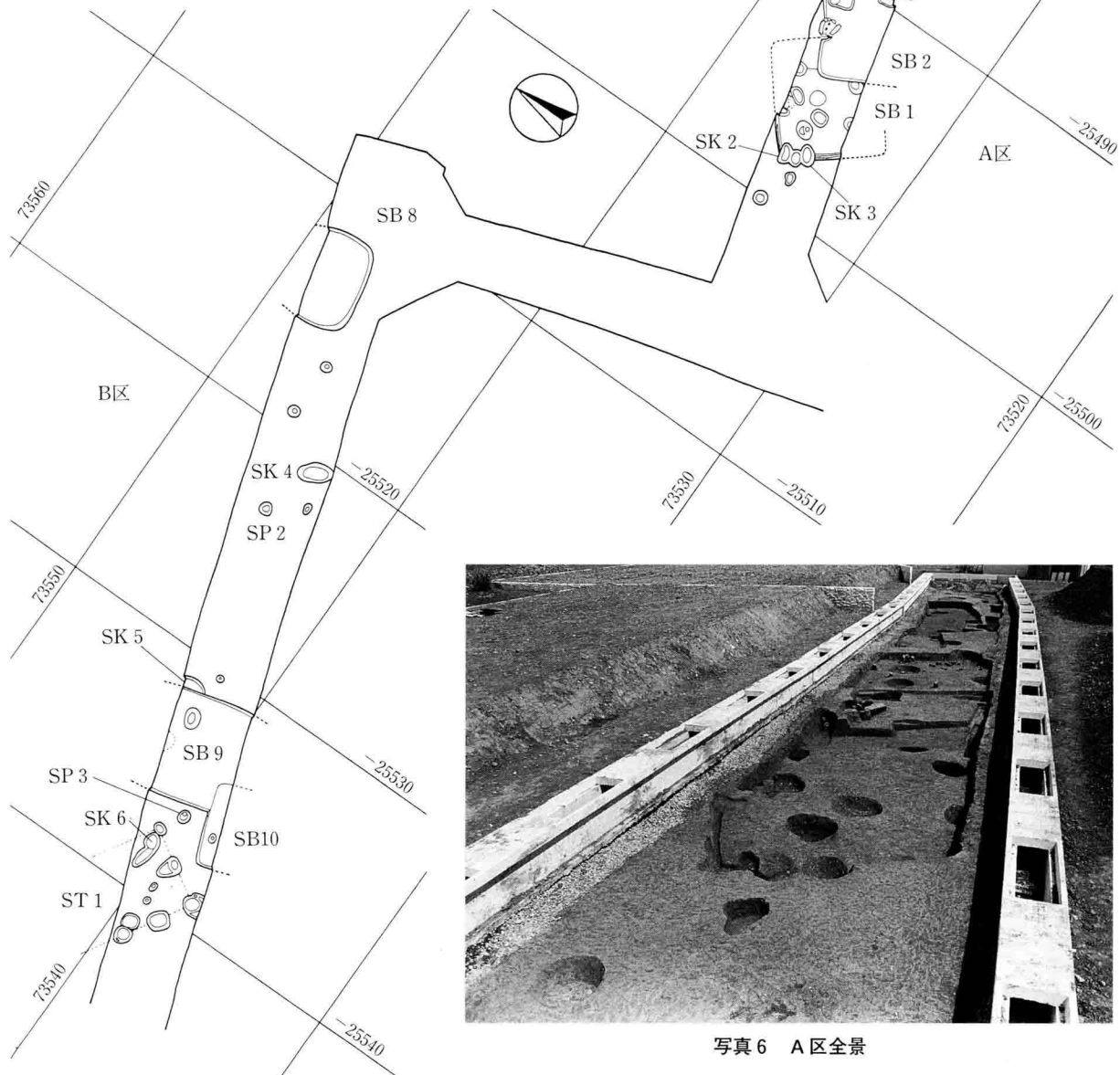
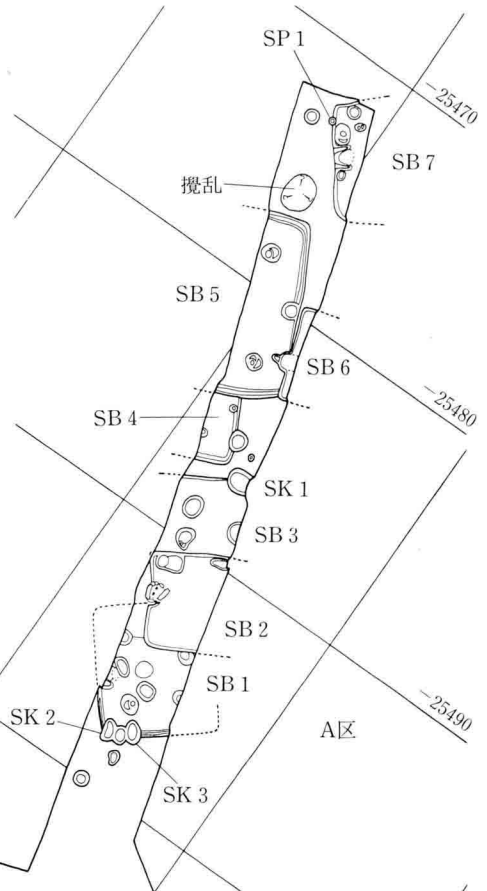


写真6 A区全景

図7 調査区遺構分布図 (1:300)

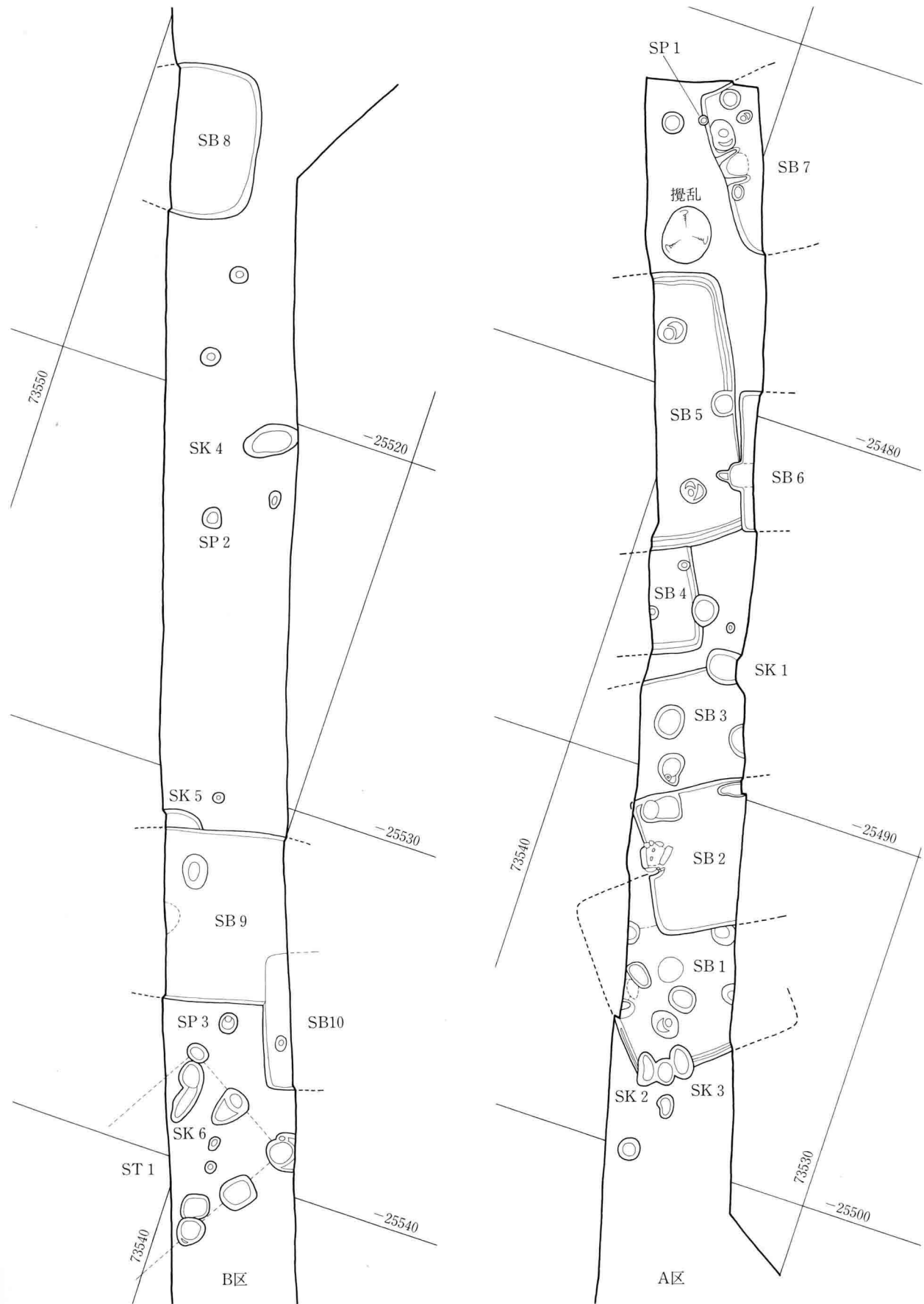


図8 調査区全体図 (1 : 150)

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

SB 1

A区西端で検出された。南側と北側は調査区外に延びる。東側はSB 2に切られており、東壁の一部を確認したのみである。西隅も土坑に切られているが、平面形は一辺5.2mの方形プランと推定される。住居主軸は北西方向で、真北より西に40°傾く。

床面の深さは検出面から約30cmを測り、広範囲に黄橙色の貼床が残存し、堅緻であった。また、床面は平坦ではなく中央部分に径70cm、高さ5cm程の高まりを確認した。カマドは大半が調査区外に延びるが、北壁中央に造られており、黄褐色土で構築された左袖を確認した。カマド



写真7 SB 1

奥側の燃焼部では焼土、焚き口部分では炭化物の堆積が認められた。壁際には壁溝が巡り、おそらく全周するものと推定される。P 1～4は柱穴と考えられ、床面からの掘り込みは42～56cmを測る。

遺物は出土量が多く、覆土、カマド、P 3から出土した。1～3は土師器の杯である。1・2は須恵器の杯を模倣した形態で、外面はヘラケズリされる。3は内外面にミガキ調整が認められ、内面に黒色処理が施されている。4～6は土師器の甕である。4・5は甕の底部、6は球形

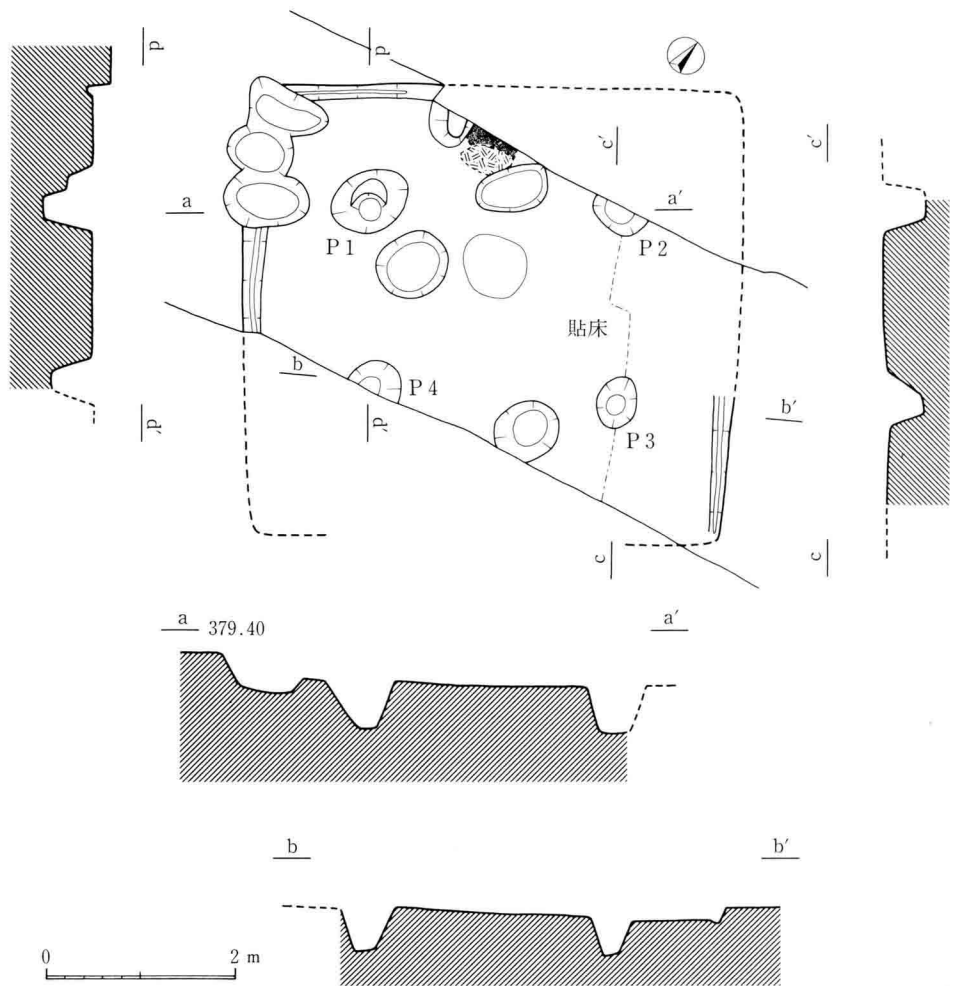


図9 SB 1実測図 (1:80)

の胴部を呈すると考えられる。いずれも古墳時代後期後半の様相を呈する。この他に平安時代の土器（図11-7～10）が出土した。出土量は2894.06gを測る。器種は須恵器の杯蓋、黒色土器の杯、土師器の甕等があり、基本的にSB2からの混入遺物と考えられる。



写真8 SB1カマド

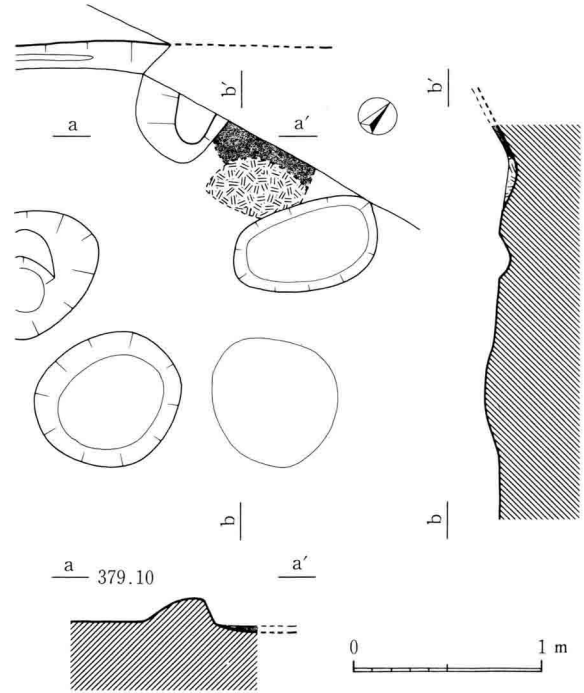


図10 SB1カマド実測図(1:40)

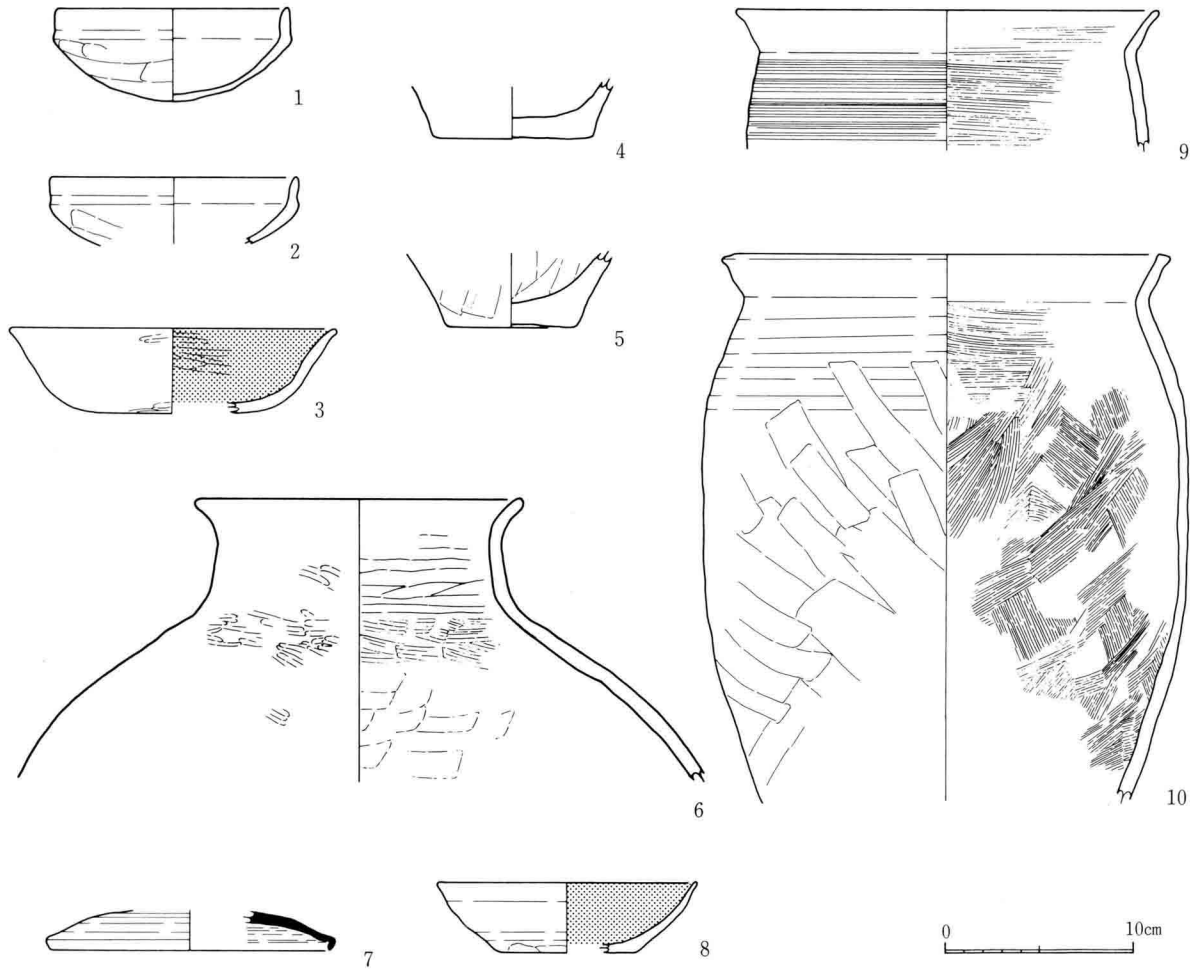


図11 SB1出土遺物実測図(1:4)

SB 2

南側は調査区外にあたるが、平面形が一辺3.9mの方形プランと推定される。住居主軸は真北より西に30°傾く。遺構覆土は黒褐色土で、握りこぶし2つ分程の大きさの石が数多く認められた。いずれも河原石であるが、この中には砥石（図14-8）が含まれていた。おそらく住居廃棄時に投棄されたものと考えられる。

床面の深さは検出面から20cmを測り、平坦であるが、堅緻ではない。カマドは北壁中央に造られている。残存状況が良好で、袖の部分には握りこぶし2つ分程の大きさの石材が左袖に4個、右袖に3個配列されていた。これらの石は袖の補強材として用いられたと考えられる。また、左袖では袖の構築材である粘土を確認した。カマド内部には円柱形の支脚石がほぼ直立した状態で検出され、全体に焼土が広がっていた。焚き口に遺存していた方柱状の石材は、焚き口天井部の補強材と考えられ、住居の廃棄に伴って崩落したと推定される。P 1はSB 2完掘後、再精査時に確認した遺構で、床面からの掘り込みは約16cmを測る。カマド右側の東壁際に位置しており、カマドに伴う何らかの施設と考えられる。

遺物は覆土、カマド、P 1から出土した。器種は須恵器の杯（1）、黒色土器の杯（2・3・4）、土師器の甕（5）・小型甕（6・7）である。いずれも平安時代（9世紀中頃～後半）の様相を呈する。なお、図11の7～10をはじめとするSB 1出土の平安時代の遺物は、基本的にSB 2の混入遺物と考えられる。ただし、土師器甕の口縁部が面取りされている（図11-10）点など、時期的にやや古い様相（9世紀前半）を示す土器が含まれていることから、SB 2が同じ場所に建て替えられている可能性も想定される。

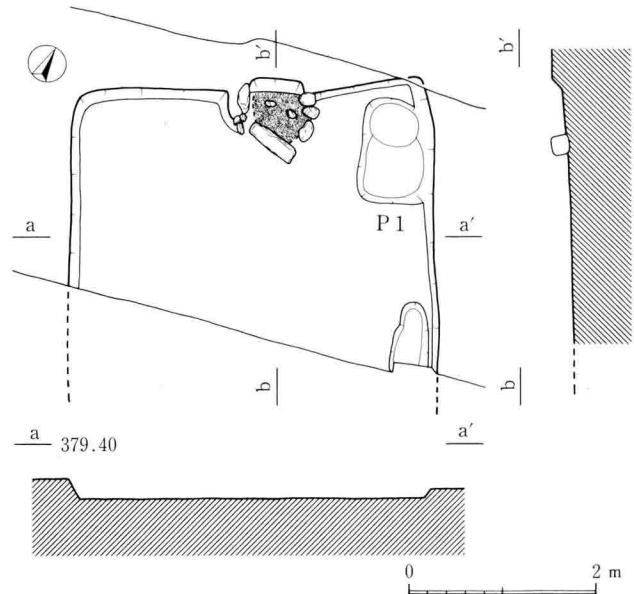


図12 SB 2実測図（1：80）



写真9 SB 2掘下途中

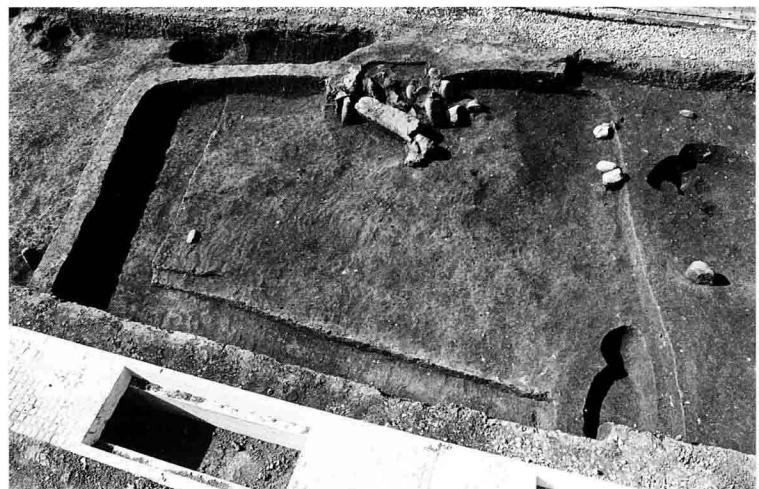


写真10 SB 2完掘

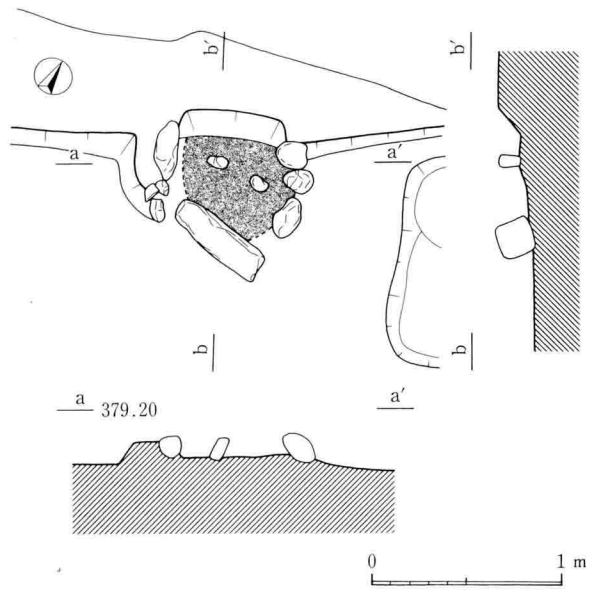


図13 SB2カマド実測図(1:40)



写真11 SB2カマド

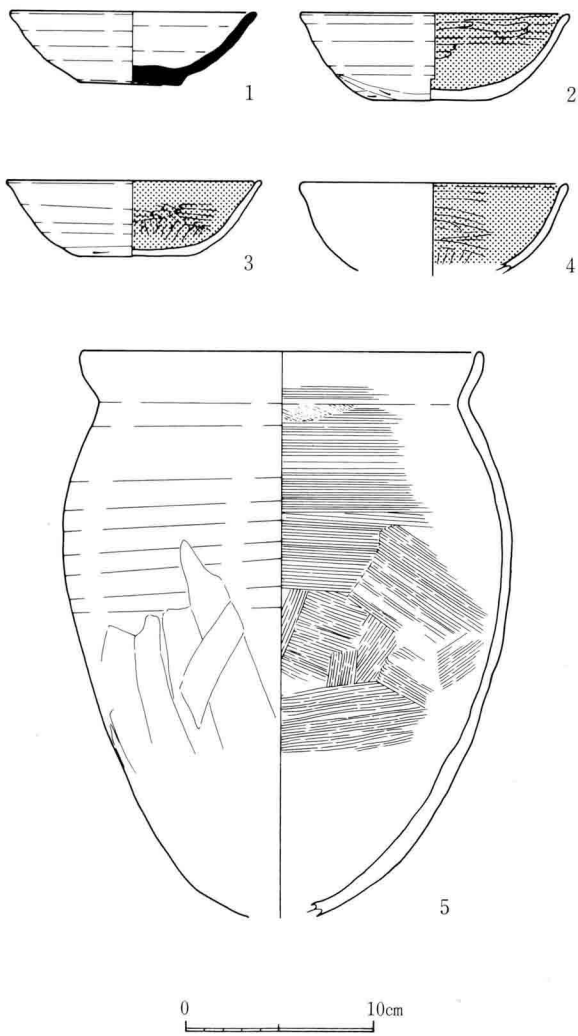


図14 SB2出土遺物実測図(1:4)

SB 3

南側と北側が調査区外にあたり、西側をSB 2に切られているため、遺構の平面形および規模は不明である。住居主軸は真北より西に30° 傾く。

床面は検出面からの深さ20cmを測るが、軟弱である。床面直上からは握りこぶし大の円礫が数多く認められた。住居内に散在しており、住居廃棄時に投棄されたものと考えられる。住居内のピットは、いずれも床面からの掘り込みが浅く、その配置からも柱穴とは考え難い。

遺物は少なく、破片ばかりで図示できなかったが、古墳時代後期に比定できる土師器杯の口縁部・甕の胴部・高杯の脚部が出土している。



写真12 SB 3

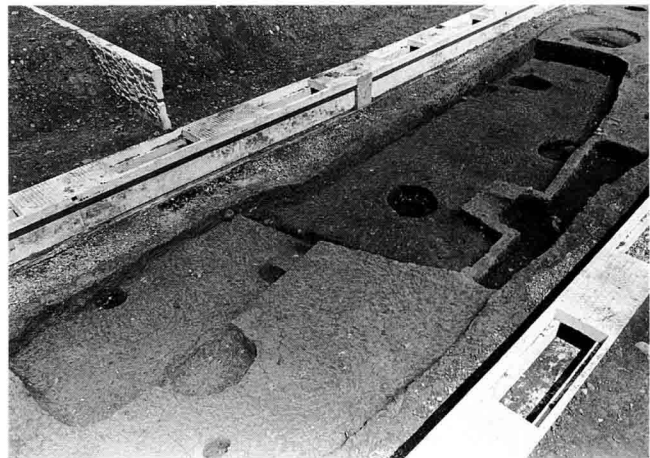


写真13 SB 4・5・6

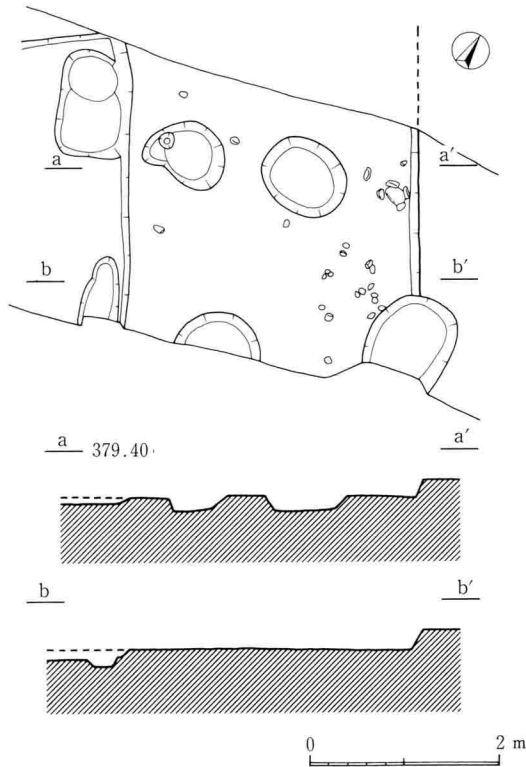


図15 SB 3実測図 (1 : 80)

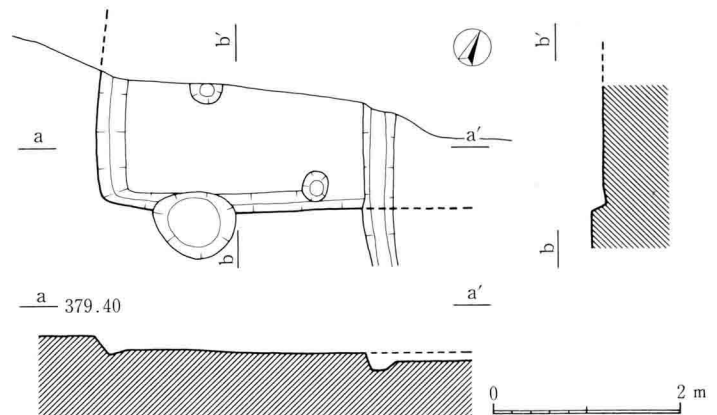


図16 SB 4実測図 (1 : 80)

SB 4

A区中央で検出された。東側はSB 5と重複関係にあるが、遺構覆土による分別が困難であり、調査時に新旧関係を把握することができなかった。また、北側の大半が調査区外のため、規模は不明である。平面形は南西隅の形状から方形プランと推定され、住居主軸は真北より西に25° 傾く。

床面は検出面からの深さ約20cmを測るが、軟弱で不明瞭である。壁際の一部がやや落ち窪んでおり、浅い壁溝が巡る可能性がある。

出土遺物は少なく、破片ばかりで時期を特定できるようなものはない。

SB 5

西側の一部がSB 4 と重複関係にあり、南側はSB 6 に切られている。北側の大半が調査区外であるが、平面形は一辺7.5mの隅丸方形プランと推定される。住居主軸は真北より西に23° 傾く。

床面は検出面からの深さ28cmを測る。貼床ではないが、平坦で堅緻であった。壁際には壁溝が巡り、おそらく全周していたと想定される。P 1・2 は床面から

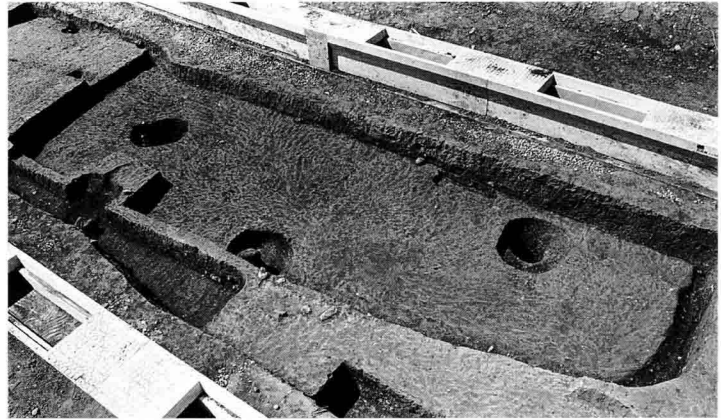


写真14 SB 5

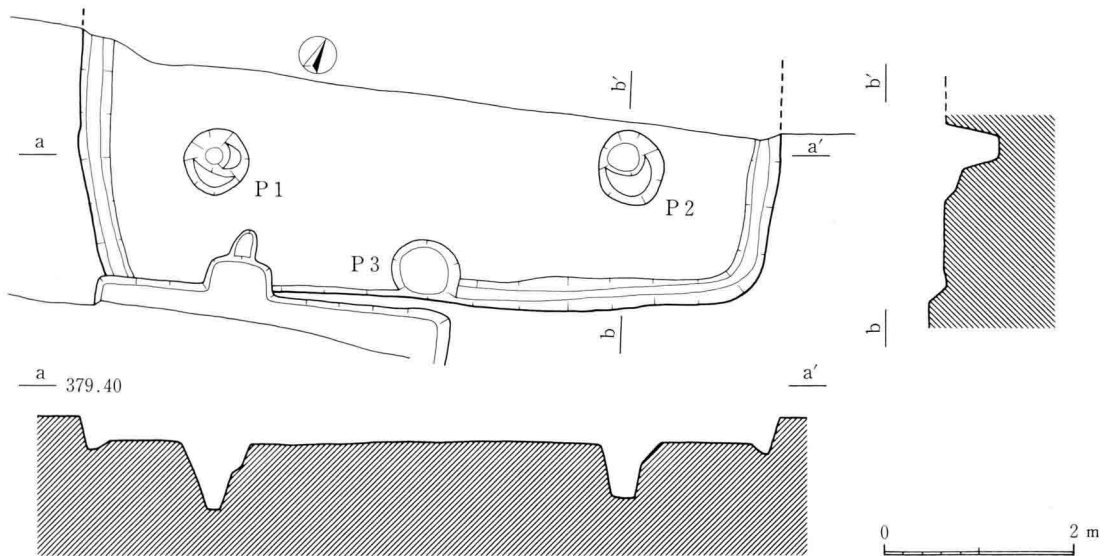


図17 SB 5実測図 (1:80)

の掘り込みが深く、その配置から柱穴と考えられる。P 3 は南壁際に掘り込まれており、住居の出入り口に伴う遺構となる可能性がある。

遺物は覆土、P 1・2 から出土したが、出土量が少ない。1～4 は土師器の杯である。器面は橙色で、体部が丸みを帯び、口縁部がほぼ垂直、あるいはやや内屈して立ち上がる形態を呈する。2・4 は外面底部から体部にかけてヘラケズリが施されている。時期は古墳時代後期末～奈良時代初頭と考えられる。この他、図示していないが土師器甕の口縁部、須恵器杯の口縁部が出土している。5 は粘板岩製の石製品で、表面に研磨された痕跡があるが、用途不明である。覆土上層から出土しており、本遺構に伴うものか判然としない。

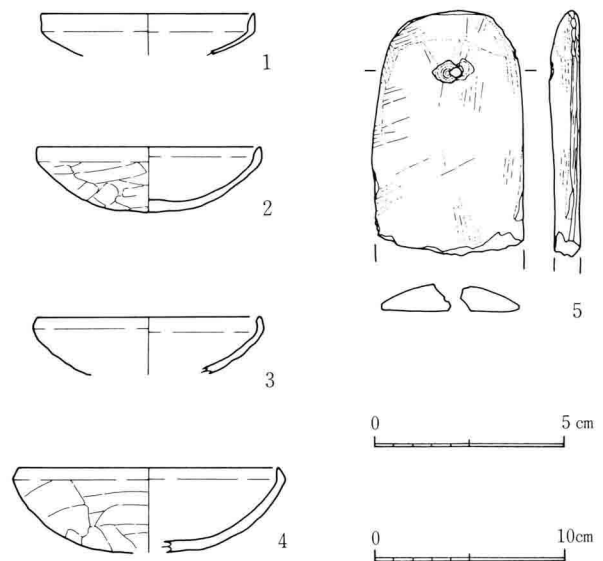


図18 SB 5出土遺物実測図 (1:4 (1~4) 1:2 (5))

SB 6

北側がSB 5と重複関係にあり、SB 5を切り込んで造られている。南側の大半が調査区外に延びるが、平面形は一辺3.8mの方形プランと推定される。住居主軸は真北より西に20°傾く。

床面は検出面からの深さ30cmを測る。平坦で黄褐色を呈するが、貼り床ではなく、不明瞭である。カマドは北壁中央部やや西寄りで見出された。住居の壁面を方形に掘り込んで構築されている。袖の構築材は確認できなかった。カマドの燃焼部奥壁は急角度に立ち上がり、煙道に至る。煙道は16cm程残存していたが、排煙孔は確認できなかった。また、カマド内部には全体に焼土が広がっていた。

遺物は出土量が多く、覆土、床面直上、カマドから出土している。1は須恵器の杯蓋で、床面直上から摘み部を上にした状態で出土した。2は須恵器の杯で底部切り離しは回転糸切りである。3は土師器の小型甕である。外面の体部下半にケズリが施される。4・5は土師器の甕で、器形は砲弾形を呈すると推定される。平安時代（8世紀末～9世紀前半）の様相を呈する。この他に、図示できなかったが用途不明の鉄片1点が出土している。

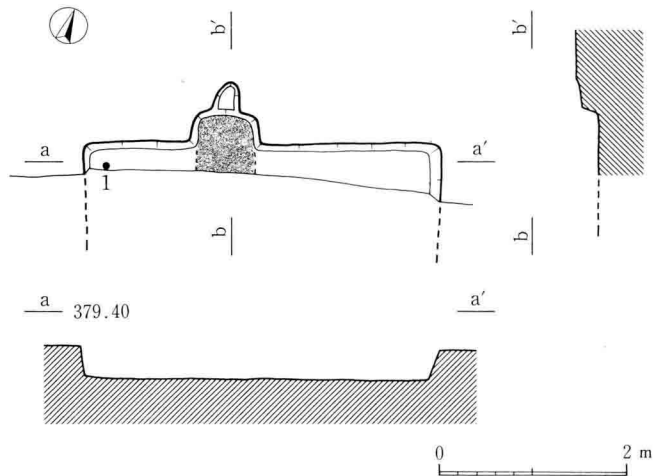


図19 SB 6実測図 (1 : 80)



写真15 SB 6カマド

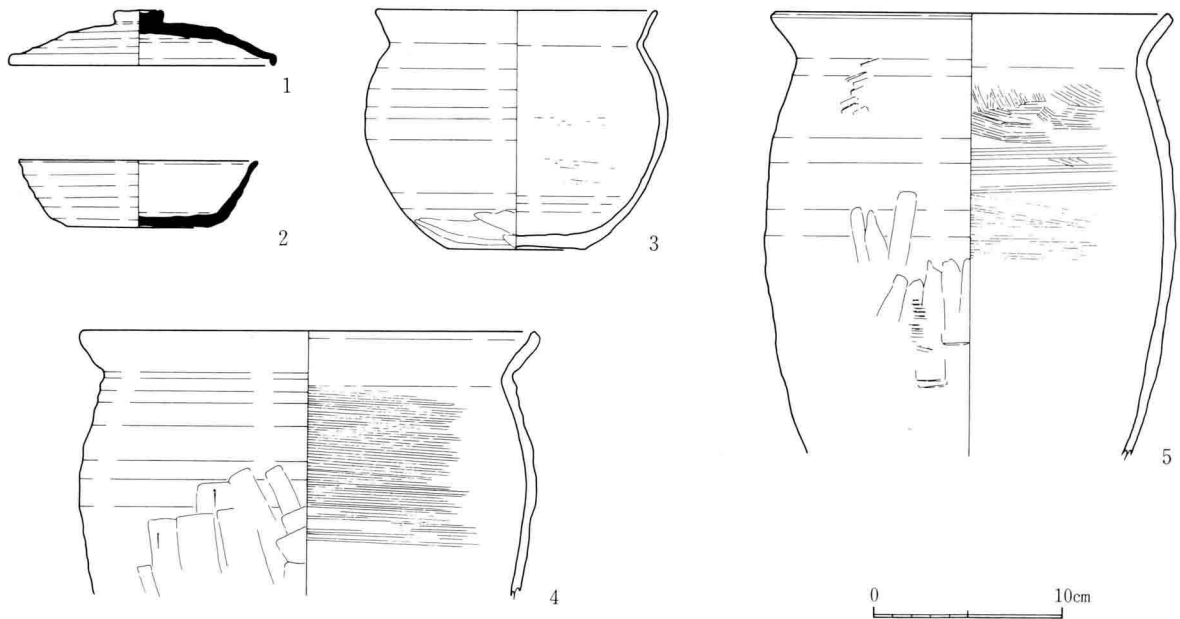


図20 SB 6出土遺物実測図 (1 : 4)

SB 7

A区東端で検出した。南側の大半が調査区外に延びるが、平面形は一辺4.6mの方形プランと推定される。なお、北東隅の輪郭が調査時に不明瞭であり、若干掘り過ぎた可能性がある。このため北西隅に比べて角張った形状を呈しているが、おそらく本来は、北西隅と同様に丸みを帯びるものと考えられる。住居主軸は北西方向で真北より西に36°傾く。

床面は検出面からの深さ約16cmを測り、平坦で、軟弱である。カマドは北壁中央に造られている。残存状況は良好で、黄色土で構築された袖が確認できた。カマド内部には焼土が広がっており、断面では焼土と炭化物が混じり合った土層の堆積が認められた。P 1は床面からの深さ32cmを測る掘り込みで、位置的にみて柱穴となる可能性がある。P 2は床面からの深さ52cmを測る楕円形の掘り込みである。カマド右脇に位置しており、貯蔵穴と推定される。

遺物は覆土およびP 2から出土したが、出土量が少なく、破片が多い。1はP 2から出土した土師器高杯の脚部である。この他に土師器甕の口縁部の破片が出土した。古墳時代後期の様相を呈すると考えられる。

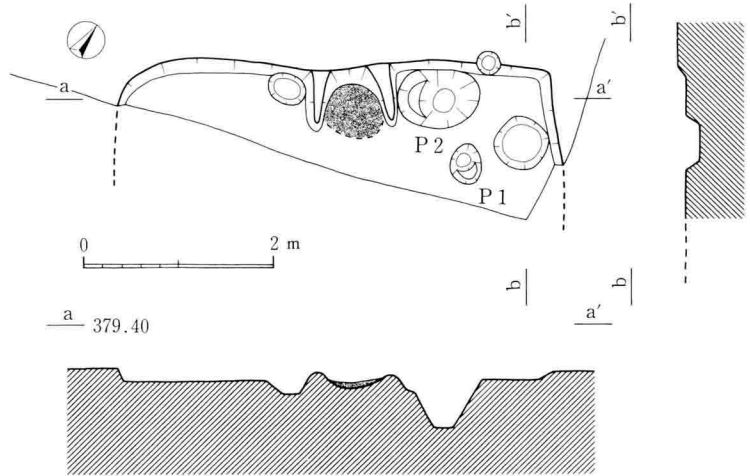


図 21 SB 7 実測図 (1 : 80)

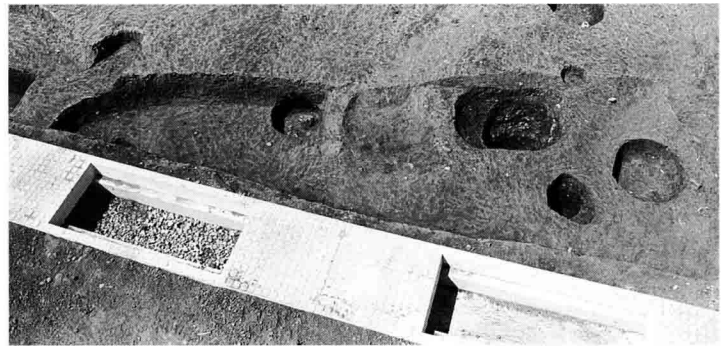


写真 16 SB 7

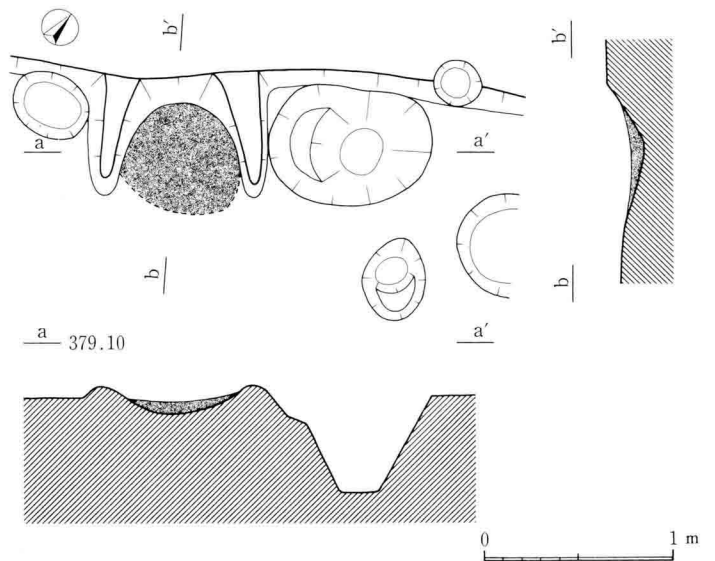


図 22 SB 7 カマド実測図 (1 : 40)



写真 17 SB 7 カマド

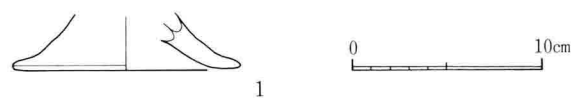


図 23 SB 7 出土遺物実測図 (1 : 4)

SB 8

B区東端で検出した。北側は調査区外に延びるが、平面形は一辺4.2mの隅丸方形プランと推定される。住居主軸は北西方向で真北より西に12°傾く。

床面は軟弱で不明瞭である。検出面から20cm程掘り下げたところ、地山の礫層が認められたため、礫層の直上を床面とした。

遺物は覆土および床面直上から出土したが、出土量は少ない。1・2は須恵器の杯で、底部切り離しは回転糸切りである。1は西壁際の床面直上から底部を上にした状態で出土した。器面は灰白色で、外面底部から体部にかけて黒斑が認められる。2は明褐色を呈し、内外面に黒斑がみられる。3は土師器の甕である。この他に図示できなかったが、黒色土器、灰釉陶器と推定される破片が出土した。いずれも平安時代（9世紀中頃～後半）の様相を呈している。

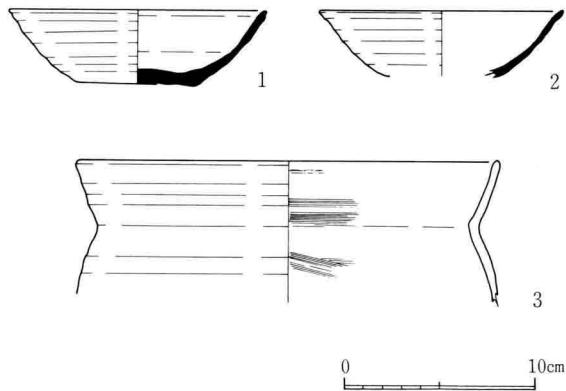


図 25 SB 8 出土遺物実測図 (1 : 4)

SB 9

南側の一部がSB10と重複関係にある。当初はSB10との新旧関係が不明瞭であったが、SB10の床面がSB9の床面の上で確認できたため、SB9がSB10よりも古い竪穴住居跡であると判断した。北側と南側が調査区外に延びるが、平面形は一辺4.7mの方形プランと推定され、住居主軸は真北より西に16°傾く。

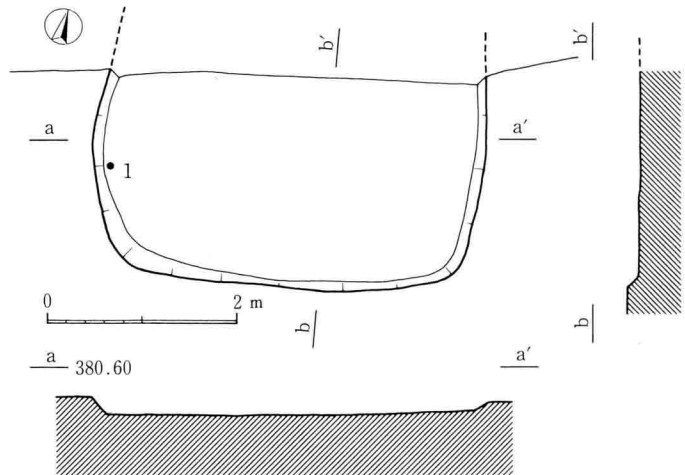


図 24 SB 8 実測図 (1 : 80)



写真 18 SB 8

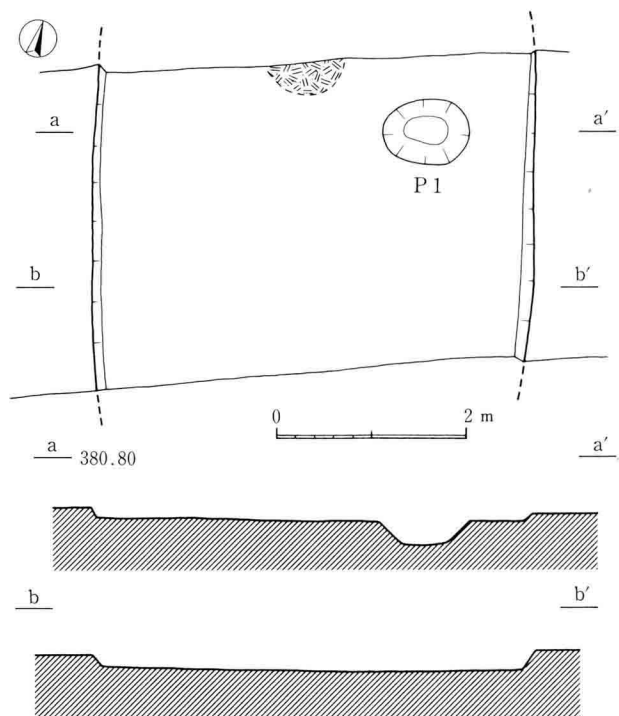


図 26 SB 9 実測図 (1 : 80)

床面は軟弱で不明瞭である。検出面から20cm程掘り下げたところ、地山の礫層が認められた。また、住居内部で掘り込みが検出されたことから、礫層の直上を床面とした。P 1は床面からの深さ25cm程で、中から土師器甕の破片が出土しており、カマドに伴う遺構の可能性がある。また、住居内の北側では炭化物の広がり確認されており、調査区外に連続しているものと考えられる。なお、北壁の土層断面では、黒褐色の遺構覆土に崩落したカマドの構築材と思われる黄褐色土が塊状に混入する状況が認められた。カマド本体が調査区外に残存しているものと推定される。



写真 19 SB 9

遺物は覆土およびP 1から出土した。出土量が多いが、破片ばかりである。1・2は須恵器の杯で、1は底部に高台が付くと推定される。3は須恵器の突帯付壺である。時期は平安時代（9世紀中頃～後半）と考えられる。

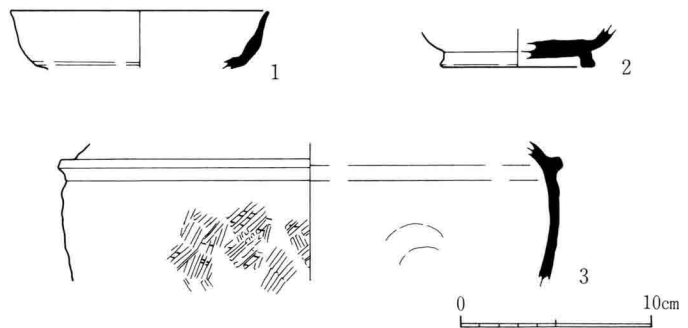


図 27 SB 9 出土遺物実測図（1：4）

SB10

SB 9を切り込んで構築された竪穴住居跡である。南側の大半が調査区外に延びるが、平面形は一辺3.8mの方形プランと推定される。当初はSB 9との切り合い関係が不明瞭で、両者を同時に掘り下げたため、SB10の北壁の一部と東壁が失われている。住居主軸は北西方向で、真北より西に20°傾く。

床面は軟弱で不明瞭である。検出面から約10cm掘り下げたところ、地山の礫層が検出されたため、礫層直上を床面とした。

遺物はSB 9と併せて取り上げてしまったため、SB10としての出土遺物はない。ただし、両者の遺物に明瞭な時期差はないようである。

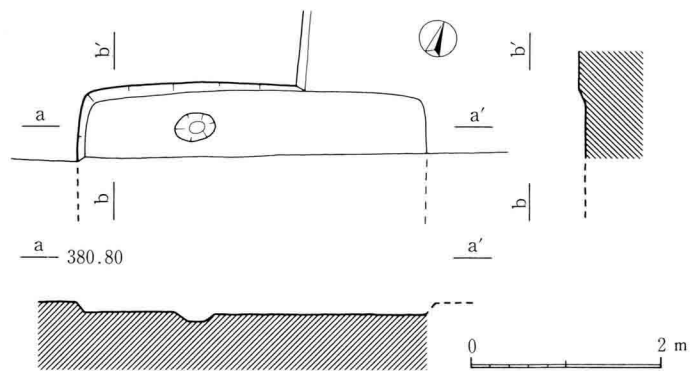


図 28 SB 10 実測図（1：80）

2 掘立柱建物跡

ST 1

B区西端で検出した土坑6基の配列から掘立柱建物跡と推定した。北側が調査区外に延びているため、棟方向が東西方向または南北方向のどちらになるか判断できない。今回は東西方向を棟方向と仮定し、2間×2間以上の建物跡と想定した。規模は東西芯々間全長約3.4m、1間約1.7m、南北芯々間全長3.6m、1間1.8m前後を測る。土坑はいずれも掘方が残存するのみで、柱穴の痕跡は確認できなかった。掘方は、それぞれ隅丸方形、円形、

不整形を呈し、検出面からの深さは12~32cmと一様ではない。

遺物は出土量が少なく、破片ばかりで時期が特定できるようなものはない。ただし、土坑の掘方に隅丸方形を呈するものがあることから、本遺構の時期を平安時代と考えておきたい。

3 土坑・小穴

竪穴住居跡、掘立柱建物跡の他に調査区内では土坑および小穴が数多く検出された。遺物が出土した遺構については遺構番号を付したが、出土遺物は少なく、いずれも破片であり、時期が特定できるような遺構は確認できなかった。

4 その他

図30は遺構外出土遺物で、いずれも検出面から出土した遺物である。

1・2は須恵器の杯で、底部の切り離しは回転糸切りである。1は底部外面に墨書があるが 墨が薄く判読できない。器面は橙色を呈し、焼成不良である。また、火襷が外面に2条、内面に1条認められ、重ね焼きされていることが窺える。3は須恵器の鉢である。器面は灰色を呈し、焼成は良好である。時期は8世紀後半から9世紀前半に相当すると考えられる。なお、この他に須恵器杯の口縁部、土師器杯の口縁部、土師器甕の破片が出土している。

ところで、今回の調査では、検出面および遺構覆土から弥生土器の破片が数多く出土した。総出土量は529.15gを測る。弥生時代中期（栗林式期）のものが大半を占めているが、いずれも破片であり、調査時にも弥生時代中期の遺構は確認できなかった。したがって、該期の遺物は近隣遺跡からの混入遺物と考えられる。

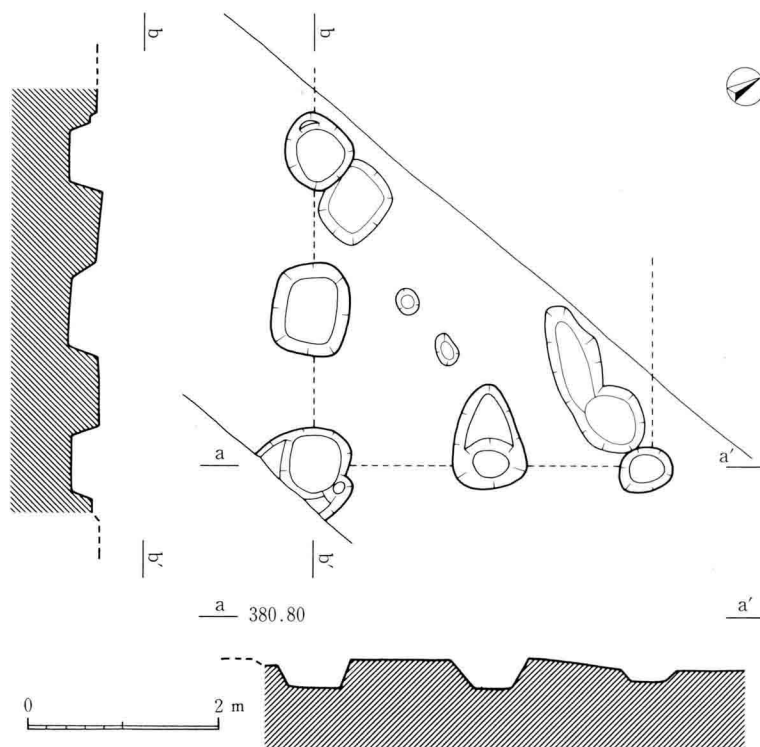


図 29 ST1 実測図 (1 : 80)



写真 20 ST1

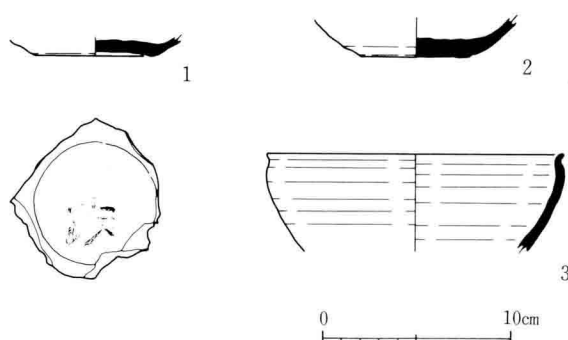


図 30 検出面出土遺物実測図 (1 : 4)

第Ⅳ章 結語

今回の発掘調査では堅穴住居跡10軒、掘立柱建物跡1棟、土坑、小穴が検出された。時期は古墳時代と平安時代のもので、この地が該期の居住域であったことが明らかになった。しかし、掘削等の工事内容の制約により、調査範囲が宅地造成事業地内の一部に限定されたため、全体を把握できた遺構はない。また、居住域の広がりを平面的に把握するといった状況にも至っていない。ただし、調査地の西側が谷地形であること、表土除去の段階で調査区の西側や南側では遺構が確認できなかったことから、この方面に居住域が広がっていた可能性は低い。むしろ調査地の北側や東側に居住域が展開しているものと思われる。では次に、時期別に遺構の状況を述べていくこととする。

古墳時代の堅穴住居跡は4軒（SB1・3・5・7）検出された。A区にのみ分布しており、古墳時代後期後半から奈良時代初頭にかけて営まれたと考えられる。住居は基本的に方形プランを呈するが、規模はSB1が一辺5.2m、SB5が一辺7.5m、SB7が一辺4.6mでばらつきがあるように感じられる。残存状況が良好なSB1について住居内部の様子をみると、床面は堅い貼床が施され、壁際には壁溝が巡り、4本柱を持つ。カマドは住居北壁中央に粘土で構築されている。出土土器には、須恵器模倣杯、土師器の杯・甕等がある。また、SB5は遺構の半分以上が調査区外に延びているが、壁溝が巡り、柱穴が確認されている点で共通点がみられる。ただし、出土した土師器杯は、体部が丸みを帯び、口縁部がほぼ垂直、あるいはやや内屈して立ち上がる形態を呈する。器面は橙色で、外面は底部から体部にかけてヘラケズリが施されている。このような杯は、群馬県や埼玉県における7世紀中頃から後半の遺構から数多く出土するようであり、県内では佐久地方に類例が認められる。

平安時代の遺構は堅穴住居跡5軒（SB2・6・8・9・10）、掘立柱建物跡1棟（ST1）が検出された。A・B両地区に分布しており、古墳時代と比較すると居住域が北西側に広がっていたようである。遺構の時期は9世紀中頃～後半のものが主体である。ただし、SB6では8世紀末～9世紀前半に比定できる土器が出土しており、他の住居に先行すると考えられる。また、SB2は古墳時代の堅穴住居跡（SB1）を切り込んで構築されており、SB1の調査時に平安時代の遺物が数多く出土した。その中には、SB2出土の遺物にやや先行する9世紀前半の所産と考えられる遺物が含まれており、SB2が建て替えられた住居である可能性も想定できる。したがって、該期の集落は8世紀末から形成が始まり、9世紀後半にかけて営まれたと考えられる。なお、SB2では覆土中に、投棄されたと考えられる石が混入しており、人為的な廃棄の様子が窺える。堅穴住居跡は方形プランを基調としており、規模は一辺が4m前後とまとまりが見出せる。住居内部の様子は、床面に堅い貼床がなく、壁溝、柱穴が認められないといった共通点が認められる。カマドは、石材を補強材に用い、粘土で構築されたもの、住居壁面を方形に掘り込んで造られたものが確認できた。主な出土遺物には、須恵器杯、土師器杯・甕、黒色土器がある。掘立柱建物跡については、遺構全体を把握することができず、規模や棟方向については推定の域を出ない。

以上のように、桐原宮西遺跡では古墳時代後期後半から奈良時代初頭に居住域が形成され、その後、空白期間をおいて平安時代に再び集落が形成されるようである。

参考文献

田中広明1995『関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向－群馬・埼玉県を中心として－』『東国土器研究第4号』東国土器研究会

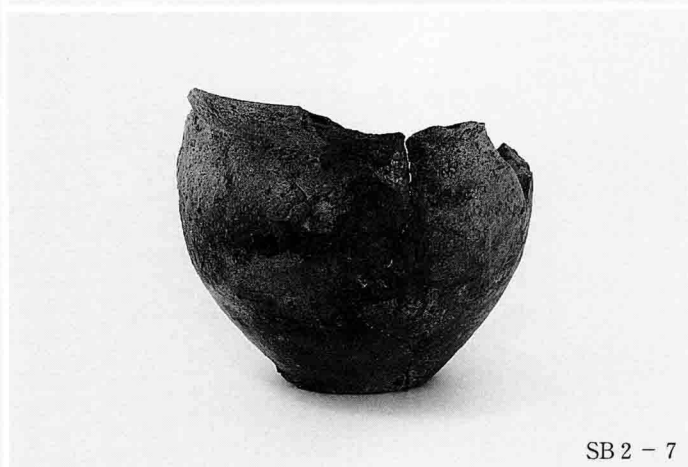
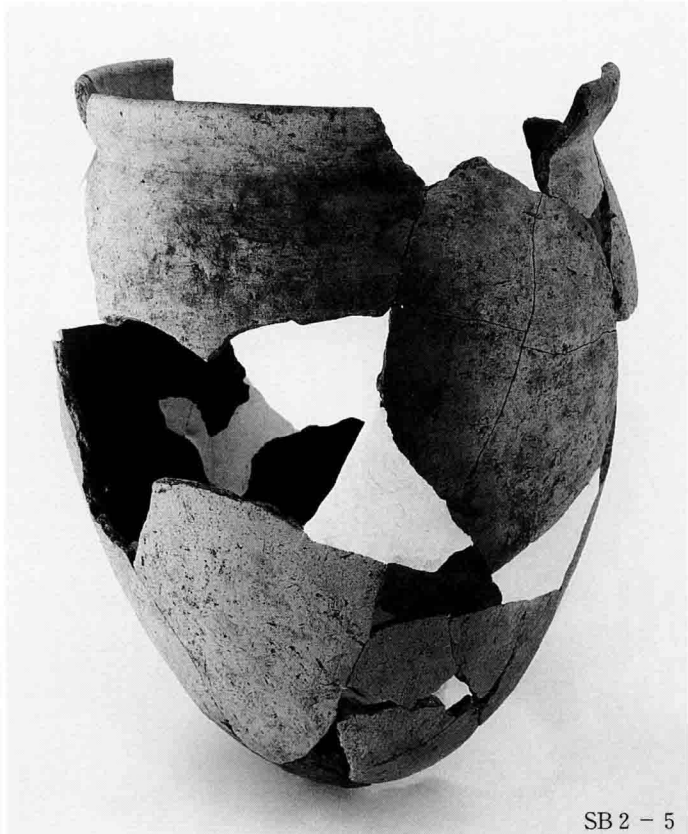
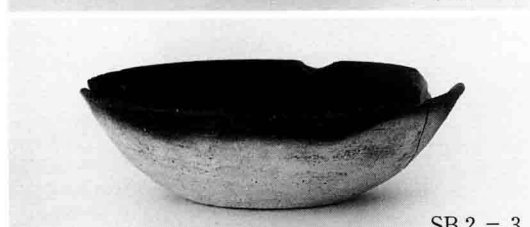
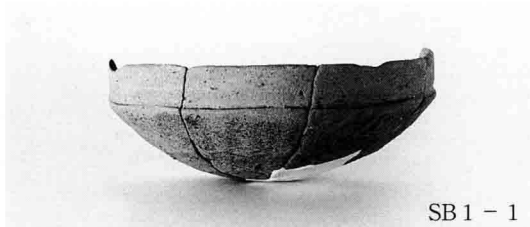
佐久市教育委員会2001『佐久市埋蔵文化財調査報告書第89集 大和田遺跡群 川原端遺跡』

遺構一覽表

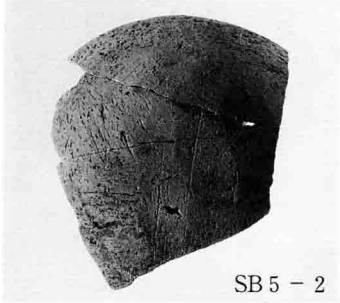
遺構名	時期	地区	遺構の概要		遺物の概要	出土総重量	備考
			平面形・規模	施設			
SB 1	古墳時代後期後半	A	方形 一辺5.2m	貼床・壁溝 柱穴 (P 1 ~ 4) ・カマド	土師器杯・甕	6396.57 g	平安時代遺物2894.06 g 混入 弥生時代遺物121.36 g 混入
SB 2	平安時代 (9 c 中頃~後半)	A	方形 一辺3.9m	カマド・貯蔵穴 (P 1) ?	須恵器杯・瓶、土師器甕 黒色土器、砥石	6035.8 g	
SB 3	古墳時代後期?	A			須恵器杯、土師器高杯・甕	835.13 g	弥生時代遺物67.25 g 混入
SB 4	時期不明	A	方形?	壁溝	土師器杯・甕	179.48 g	弥生時代遺物30.25 g 混入
SB 5	古墳時代後期末~奈良時代初頭	A	隅丸方形 一辺7.5m	壁溝・柱穴 (P 1・2)	須恵器杯・瓶・甕 土師器杯・甕	2753.18 g	弥生時代遺物152.55 g 混入
SB 6	平安時代 (8 c 末~9 c 前半)	A	方形 一辺3.8m	カマド	須恵器蓋・杯・瓶 土師器甕	1835.35 g	
SB 7	古墳時代後期	A	方形 一辺4.6m	カマド・貯蔵穴 (P 2) 柱穴 (P 1) ?	土師器高杯・甕	157.15 g	弥生時代遺物15.81 g 混入
SB 8	平安時代 (9 c 中頃~後半)	B	隅丸方形 一辺4.2m		須恵器杯・瓶、土師器杯・甕 灰釉陶器?	1696.8 g	弥生時代遺物74.05 g 混入
SB 9	平安時代 (9 c 中頃~後半)	B	方形? 一辺4.7m		須恵器杯・突帯付壺 土師器杯・甕、黒色土器	3312.15 g	弥生時代遺物59.50 g 混入
SB10	平安時代	B	方形 一辺3.8m				
ST 1	平安時代	B	2間×2間以上		土師器破片	212.82 g	弥生時代遺物8.38 g 混入

遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			遺存	色調	成形・調整等
				口径	底径	器高			
SB 1 (図11)									
1	覆土	土師	杯	12.2		4.9	1/2	にぶい黄橙	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ
2	覆土	土師	杯	13.0			1/4	にぶい黄橙	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ヘラミガキ
3	覆土	土師	杯	17.2		4.45	1/6	にぶい黄橙	外：ヘラケズリ、ヘラミガキ 内：ヘラミガキ、黒色処理
4	覆土	土師	甕		8.4		底部のみ	にぶい黄褐	
5	P 3	土師	甕		7.0		底部のみ	赤褐	外：ヘラナデ? 内：ヘラナデ?
6	覆土	土師	甕	17.0			1/6	にぶい黄橙	外：ヘラミガキ、ヨコナデ 内：イタナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ
7	覆土	須恵	蓋	15.0			1/6	赤褐	ロクロ、外：回転ヘラケズリ、ナデ 内：ナデ *ゆがみが著しい
8	覆土	黒色	杯	13.6	7.2	3.75	1/5	橙	ロクロ、外：ヘラケズリ?、ナデ 内：黒色処理
9	覆土	土師	甕	22.3			1/10	赤褐	ロクロ、外：カキメ、ナデ 内：カキメ、ナデ
10	覆土	土師	甕	22.4			1/5	にぶい黄橙	ロクロ、外：ヘラケズリ、ナデ 内：ハケメ、ナデ
SB 2 (図14)									
1	覆土	須恵	杯	13.0	5.3	3.8	1/3	灰色	ロクロ、回転糸切り、外：ナデ 内：ナデ
2	覆土	黒色	杯	14.2	6.2	4.6	1/2	にぶい橙	ロクロ、回転糸切り後ケズリ、外：ケズリ、ナデ 内：ヘラミガキ、黒色処理
3	P 1	黒色	杯	13.5	6.0	4.0	ほぼ完形	にぶい黄橙	ロクロ、回転糸切り後ケズリ、外：ケズリ、ナデ 内：ヘラミガキ、黒色処理
4	P 1	黒色	杯	14.2			1/12	にぶい橙	ロクロ、外：ナデ 内：ヘラミガキ、黒色処理
5	覆土	土師	甕	21.0			3/4	にぶい橙	ロクロ、外：ヘラケズリ、ナデ 内：ハケメ、カキメ、ナデ *ゆがみがある
6	P 1	土師	甕	12.4	6.0	11.5	2/3	にぶい橙	ロクロ、外：ナデ 内：ナデ
7	覆土	土師	甕	14.8	5.7	11.2	2/3	褐灰	ロクロ、外：ナデ 内：ナデ *体部上半表面剥離
8	覆土	砥石							砂岩
SB 5 (図18)									
1	覆土	土師	杯	11.2			1/6	橙	外：ケズリ? 内：ナデ
2	覆土	土師	杯	11.8		3.45	1/4	橙	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ
3	覆土	土師	杯	11.8			1/5	橙	
4	覆土	土師	杯	13.8			1/2	橙	外：ヘラケズリ、ヨコナデ 内：ヨコナデ
5	覆土	石製品							粘板岩、穿孔 *途中で破損、用途不明
SB 6 (図20)									
1	床直	須恵	蓋	14.0		2.9	完形	青灰	ロクロ、外：ナデ、回転ヘラケズリ 内：ナデ
2	覆土	須恵	杯	12.5	7.4	3.6	9/10	明赤褐	ロクロ、回転糸切り、外：ナデ 内：ナデ
3	カマド	土師	甕	14.6	7.2	12.75	1/8	にぶい橙	ロクロ、回転糸切り、外：ケズリ、ナデ 内：カキメ、ナデ
4	覆土	土師	甕	24.0			1/4	にぶい橙	ロクロ、外：ケズリ、ナデ 内：カキメ、ナデ
5	カマド	土師	甕	21.0			1/4	にぶい橙	ロクロ、外：ケズリ、ナデ 内：カキメ、ナデ
SB 7 (図23)									
1	P 2	土師	高杯		12.2		1/8	にぶい赤褐	
SB 8 (図25)									
1	床直	須恵	杯	13.5	6.3	3.9	9/10	灰白	ロクロ、回転糸切り、外：ナデ 内：ナデ
2	覆土	須恵	杯	12.8			1/6	明褐灰	ロクロ、外：ナデ 内：ナデ
3	覆土	土師	甕	22.2			1/12	にぶい黄橙	ロクロ、外：ナデ 内：カキメ
SB 9 (図27)									
1	覆土	須恵	杯	13.6			小破片	青灰	ロクロ、高台が付くか?、外：ナデ 内：ナデ
2	覆土	須恵	杯		8.2		1/6	青灰	ロクロ、外：ナデ 内：ナデ
3	覆土	須恵	突帯付壺				破片	灰褐	ロクロ、外：ナデ、タタキ 内：ナデ
検出面 (図30)									
1		須恵	杯		6.6		底部のみ	橙	ロクロ、回転糸切り、底部外面に墨書、外：ナデ 内：ナデ
2		須恵	杯		5.8		底部のみ	赤灰	ロクロ、回転糸切り、外：ナデ 内：ナデ
3		須恵	鉢	15.8			1/8	暗赤灰	ロクロ、外：ナデ 内：ナデ



遺物写真



SB 5 - 2

SB 5 - 5



SB 6 - 4



SB 6 - 1



SB 6 - 5



SB 6 - 2



SB 8 - 1



SB 9 - 3

浅川扇状地遺跡群

権^{ごん} 現^{げん} 堂^{どう} 遺跡 (2)

ぶらっと稲田店建設地点

2005年3月

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、株式会社ブラットを事業主体とする「ぶらっと稲田店」建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の実施は、株式会社ブラット代表取締役松橋達生氏と長野市長鷺沢正一との契約に基づき、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地は、長野市大字稲田 稲田南土地地区画整理事業施行地内34街区である。なお、当調査地は平成10年度から12年度に「長野市稲田南土地地区画整理事業」に伴う発掘調査で確認された「浅川扇状地遺跡群 権現堂遺跡」範囲内である。
- 4 本書は、発掘調査によって検出された遺構と図化した遺物を掲載した。
- 5 遺構図は1：100、遺物図は1：4の縮尺で提示した。調査区壁面図の数値は標高（m）を表す。遺物実測図中のうち須恵器は断面黒塗りで示した。
- 6 図面整理・遺物実測は小出・森田が担当した。編集・執筆は森田が担当した。

目 次

例言・目次

第Ⅰ章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	
第2節 調査日誌	
第3節 調査の体制	
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5
第1節 調査区の立地と環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 周辺の調査歴	
第Ⅲ章 調査成果	9
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第Ⅳ章 結語	17

挿 図 目 次

図 1	調査位置図	1
図 2	調査地および周辺地図	4
図 3	地形図	5
図 4	宇境図	6
図 5	周辺の調査歴	8
図 6	遺構分布図	9
図 7	調査区壁面図	10
図 8	SD 3・4・5 遺構図	13
図 9	水田復元図	15
図 10	SD 1・2 遺構図	16
図 11	SD 1 出土土器	16

写 真 目 次

写真 1	表土除去	2
写真 2	作業風景	2
写真 3	遺構測量	2
写真 4	発掘調査従事者	2
写真 5	平成 2 年 稲田地区空撮写真	4
写真 6	調査区上空より飯縄山を望む	7
写真 7	調査区全景	11
写真 8	検出状況(南から)	11
写真 9	検出状況(西から)	11
写真 10	北壁	11
写真 11	南壁	11
写真 12	畦畔	12
写真 13	畦畔	12
写真 14	畦畔	12
写真 15	畦畔	12
写真 16	検出	13
写真 17	水田土壌除去後	13
写真 18	SD 1・2	16

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経過

権現堂遺跡が所在する長野市稲田地区では、北陸新幹線の建設や土地区画整理事業など近年多くの開発事業が行われている。このような情勢の中、長野市稲田南土地区画整理事業施行区域内において、株式会社ブラットによって「ぶらっと稲田店」建設事業が計画された。建設予定地は埋蔵文化財包蔵地「浅川扇状地遺跡群 権現堂遺跡」の範囲内に位置するため、長野市教育委員会は事業主体者と埋蔵文化財保護に関する協議を行い、事前の確認調査を実施することとした。

確認調査は平成12年9月27日に実施した。開発事業予定地内の任意の地点に試掘坑を8ヶ所設定しバックホーにより掘削した結果、遺物包含層が確認された。また、周辺区域の発掘調査成果から推測しても遺構の存在が見込まれるため、埋蔵文化財の保護措置として記録保存を目的とする発掘調査が必要と判断した。平成15年度、建設事業計画が具体化したことに伴い、再度埋蔵文化財保護措置について協議し、平成16年5月17日付で事業主体者と長野市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、発掘調査の着手に至った。

なお調査においては事業面積1500㎡中、地下ピット等の掘削により埋蔵文化財が破壊される可能性の高い約400㎡の範囲を記録保存の対象とした。

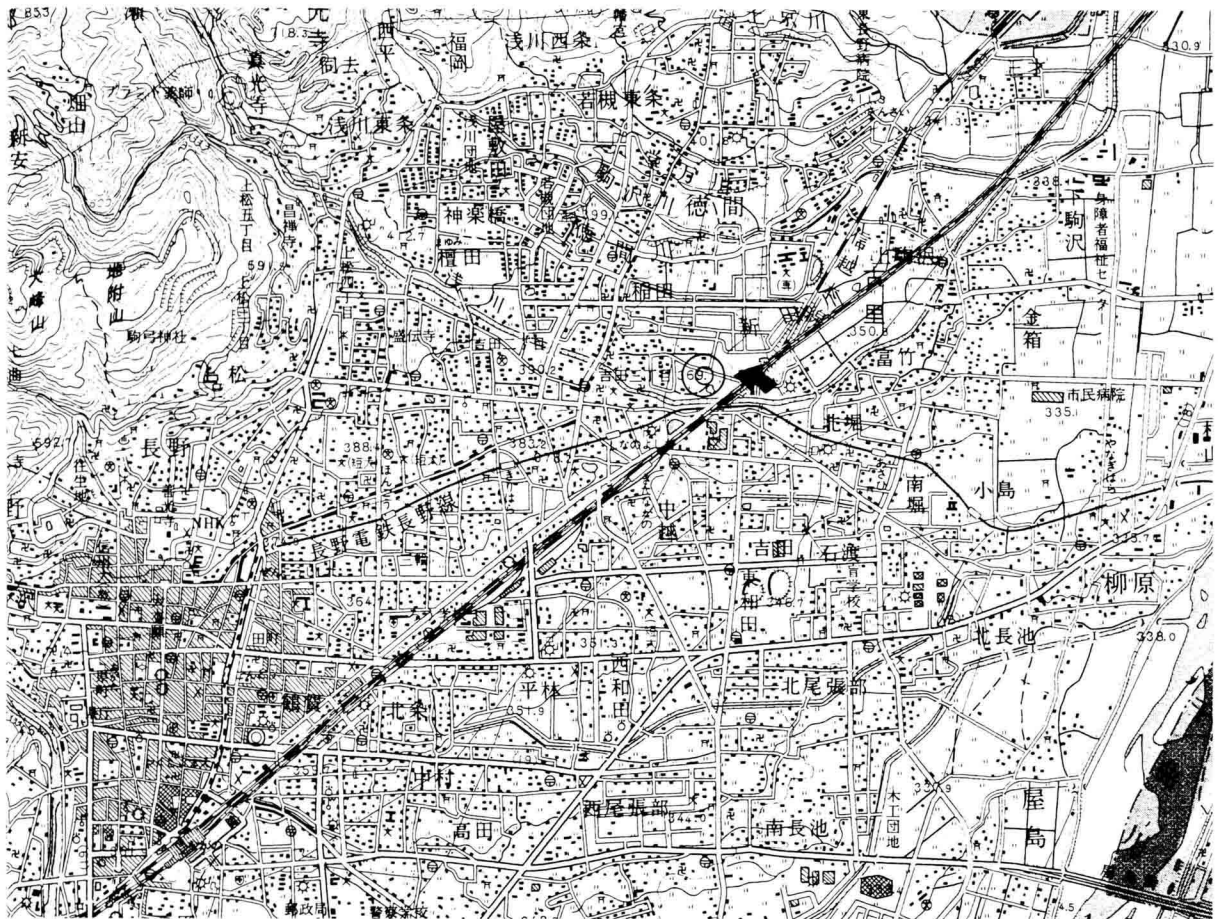


図 1 調査位置図 (1 : 50000)

第2節 調査日誌

[ぶらっと稲田店新築工事に伴う発掘調査]

- 5月18日 表土除去。
- 5月19日 表土除去。調査区壁に沿って排水をかねた試掘溝を掘る。土層確認のため壁面精査。
- 5月24日 表土除去終了。雨水汲み出し後遺構検出。溝状遺構 (SD1・2)・土坑等を確認。
- 5月25日 検出状況の写真撮影。土層堆積の検討の結果、浅川氾濫砂の直下で畦畔を持つ水田層を確認
- 5月26日 試掘溝拡張。
- 5月27日 遺構発掘調査開始。
- 5月28日 調査区東側の水田跡の調査。
- 5月31日 SD1・2発掘。
- 6月2日 水田跡完掘後、溝状遺構2条 (SD4・5)を確認。発掘調査開始。全景写真撮影。
- 6月3日 SD1・2が遺構確認面より下に潜り込むため部分的に掘り下げ、延長を確認。写真撮影。
本日をもって作業員による作業終了。
- 6月4日 ラジコンヘリによる空中写真撮影。遺構測量実施。
- 6月7日 遺構図面作成後、SD2の延長確認の為にトレンチ掘削。機材撤収。現地作業完了。



写真1 表土除去



写真2 作業風景



写真3 遺構測量



写真4 発掘調査従事者

第3節 調査体制

調査主体者 長野市教育委員会教育長 立岩睦秀
総括管理者 文化財課長 塩澤一郎
統括責任者 局主幹兼埋蔵文化財センター所長 矢口忠良

庶務担当 係長 山岸恒雄
職員 吉村久江
事務員 塚田容子

調査担当 係長 青木和明（調査員）
主査 飯島哲也
風間栄一
主事 小林和子（保護協議）
専門員 堀内健次 清水竜太 遠藤恵実子 長瀬 出 山野井智子
石丸敦史 小出泰弘（調査員） 森田利枝（調査員）
宮沢浩司 山岸千晃

発掘作業員

伊藤八重子 上原律江 塩入洋子 後藤一雄 清水昭光 田中純子 田村秀之 角田恵子 寺島直利 宮澤周子
宮下美代子 山口勝己

整理調査員

青木善子 池田寛子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理作業員

倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

遺構測量委託

株式会社写真測図研究所

発掘作業の実施にあたって、株式会社トライアンの佐藤・森口・山本・富沢・山下の各氏に御協力頂いた。記して感謝申し上げます。



写真5 平成2年 稲田地区空撮写真（平成2年6月 ㈱ジャステック撮影）

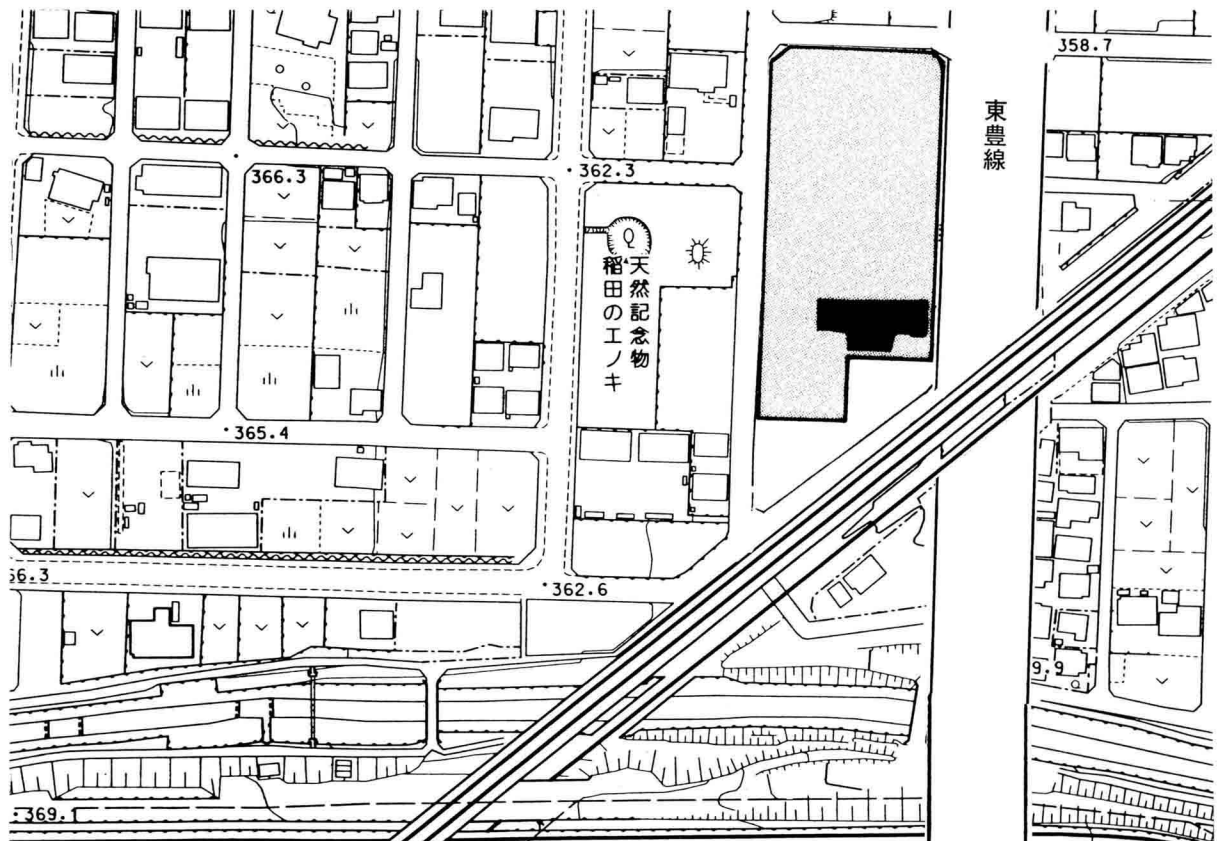


図2 調査地および周辺地図（1：2500）

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 調査区の立地と環境

調査地は長野市大字稲田に所在する。飯綱高原を水源地とする浅川によって形成された扇状地上、浅川の左岸に位置する。浅川扇状地は、浅川東条を扇頂に南は城東町・西和田で裾花川扇状地と接し、扇端は東側に伸びて千曲川氾濫原の後背湿地に接している。この扇頂側と扇端側の境は三輪本郷－北長野駅－長野高等工業専門学校を結ぶラインで、調査地はこの境付近に位置している。標高は現況で約360mである。(文献1)

現在調査地に立つと、南には北陸新幹線の橋梁と JR 信越線・長野電鉄長野線が交差し、周辺は長野市稲田南土地区画整理事業によって整然と区画された街区になっている。稲田地区は稲積村・山田村が合併した稲田村が前身で、その名称が示すように、近年までは水田が広がり、畑地・桑畑等は浅川流域の微高地上を利用していった。また、周辺には灌漑用溜池が点在し、灌漑用水が不足していたことが観取される。『長野縣町村誌』(文献2)には旧稲田村内3つの溜池の他、村外6つの池を水田用水としていた記載がある。また「往古より本村は浅川の流末なるを以って、年々早損を免れず」や「(浅川は) 平水微々たりと雖も、霪雨の時は、激水漲溢して、堤防を崩し、大に耕地の暴害を為す」とあるのを見ると、浅川から受ける影響の大きさが分かる。

以上のように、扇状地上の河道近くに位置することが当遺跡の地理的特徴といえる。

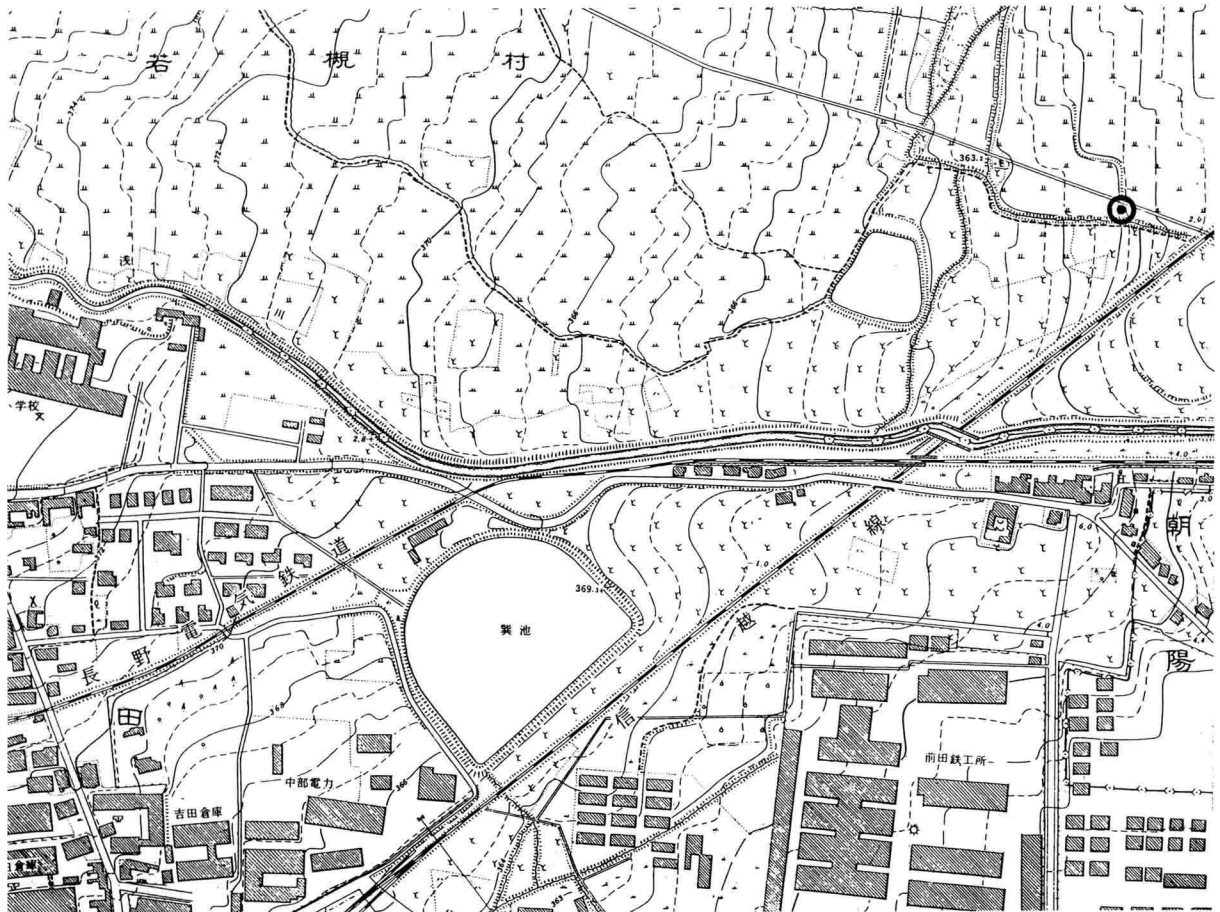


図3 地形図(大正15年測量・昭和27年修正)(1:5000)

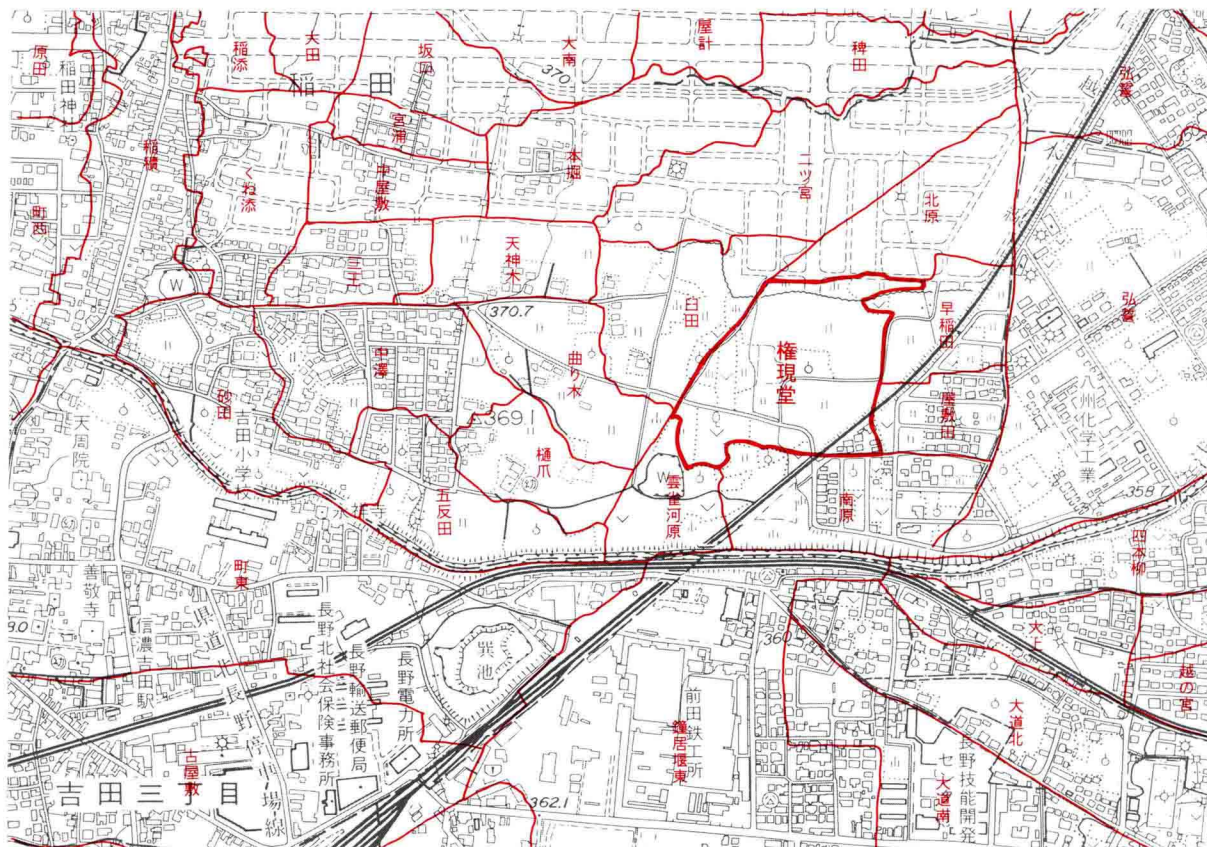


図4 字境図 (1 : 10000)

第2節 歴史的環境

史料 古代の行政単位では『倭名類聚抄』に記載された信濃国水内郡芋井郷に属する。中世になると、『吾妻鏡』1186年の記録に若槻庄が登場する。證菩提院という寺院を領主とする寄進地系荘園である。荘園の成立時期は、一般に寄進地系荘園が本格的に成立する平安時代末11世紀後半以降の時期が考えられている。若槻の名は在地領主であった若槻氏に由来する。その後、室町時代には『高梨文書』(1392年)によると、高井郡の豪族高梨氏一門となった若槻氏の知行地として若槻本庄が記載される。若槻庄の庄域について『諏訪下社造宮帳』(1579年)には、東条郷、西条郷、押田郷、真弓田郷、山田郷、上徳間郷、下徳間郷、稲積郷上下、河原田郷、田子郷が記載されている。(文献3)

道 稲田地区に残る史跡に稲積の一里塚がある。これは近世の北国街道沿いに造られたもので、当時の北国街道は吉田方面からここを通過して若槻吉に続いていた。また、古代の幹線道路である東山道支道は安茂里と田子を結ぶ直線の道で三輪-吉田-稲田を通るルートが想定されている。

条里 高度経済成長期以前、稲田地区を含む若槻地区には条里的遺構が表面条里として残っていた。条里制とは耕地を方形(1町×1町 1町は約109m)に地割する制度で初現は奈良時代の初めに求められる。表面条里がそのまま古代の条里制施行を伝えているとは言い切れないが、当地の開発が計画的になされたことを示している。

地名 権現堂遺跡の所在する小字権現堂の名の由来は、地内にあった熊野社に求められ、明治初頭に描かれた当地の古絵図には熊野社が描かれている。(文献4)

第3節 調査歴（図5）

調査地は、平成10年から12年度にかけて長野市埋蔵文化財センターが行った、長野市稲田南土地区画整理事業地点発掘調査区に隣接する。また、(財)長野県埋蔵文化財センターが平成5年から7年度にかけて調査した北陸新幹線建設に伴う発掘調査区の北に位置する。

長野市稲田南土地区画整理事業地点

権現堂遺跡で確認された遺構は、竪穴住居・小穴群・土坑・溝・井戸・性格不明遺構等で、遺構の時期は古墳時代前期・後期、奈良・平安時代・中世である。住居は古墳時代後期：⑥地区3軒・⑭地区1軒、奈良時代：⑭地区1軒、中世：25・28・30地区の小穴群が住居の柱穴である可能性が指摘されている。平安時代の遺構については、遺物の出土量が少なく存在しない可能性が高い。(文献5)

北陸新幹線発掘調査地点

第1検出面で中世の埋没水田面、第2検出面で掘立柱建物8棟・竪穴状遺構2基・土坑・溝・井戸が検出された。中世の水田は浅川と近接する調査区西側から東側へ、南側から北側に階段状に下がっている。浅川近接地点の水田面は黄褐色砂層で埋没し、水田面には畦畔で折り返して田面全域を歩いた足跡が確認されている。また、調査区中央部では、幅1.0～1.5mの南北畦と考えられるものも確認されており鎌倉時代以後の水田と想定されている。第2検出面では時期が不明な遺構が多いが、遺物は弥生時代から中世のものが出土している。(文献6)



写真6 調査区上空より飯縄山を望む

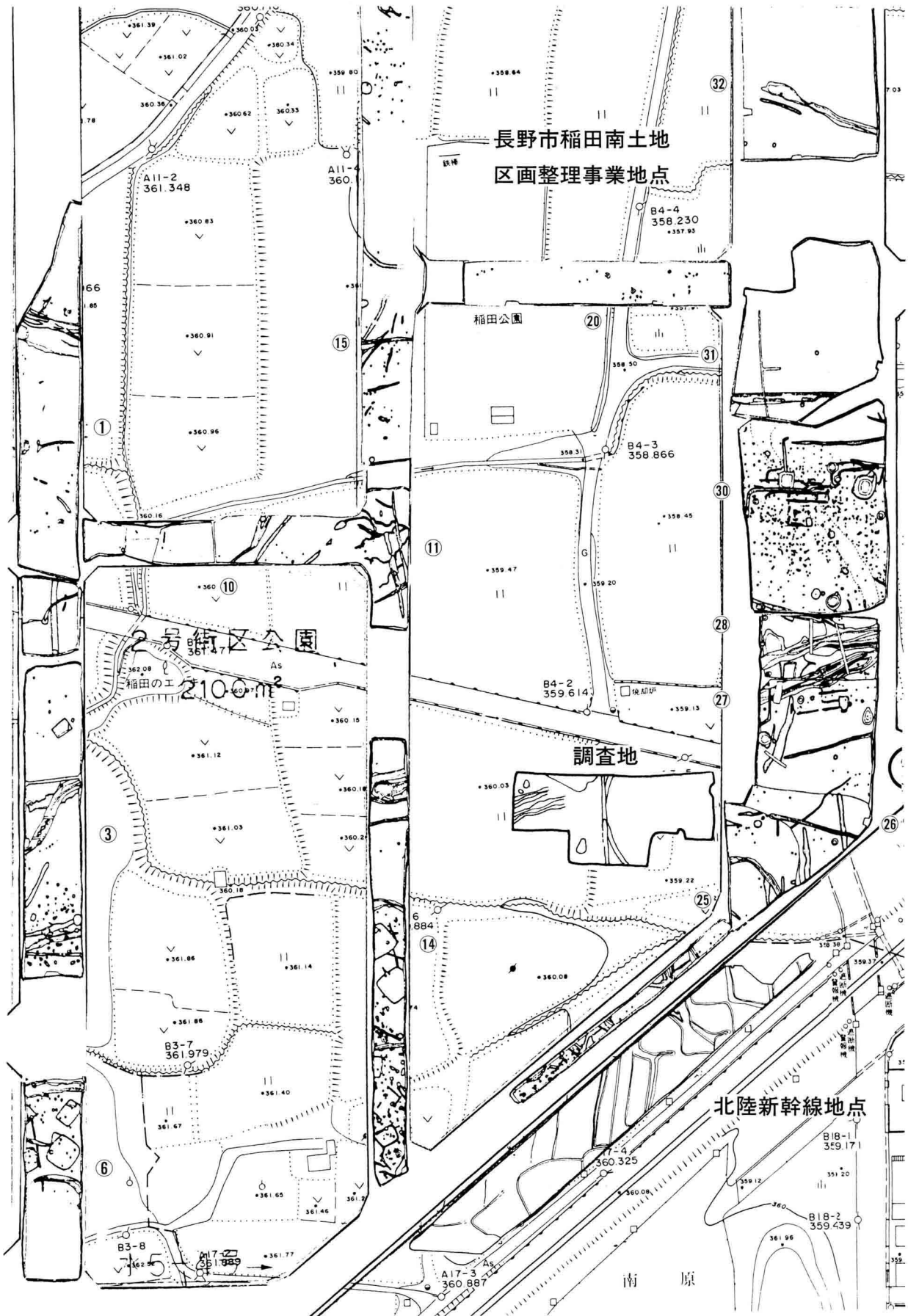


図5 周辺の調査歴 (1:1000)

第Ⅲ章 調査成果

第1節 調査の概要

調査面積は約400㎡、工事の影響深度である地表面下180cmの深さで重機による掘削を終え、遺構を検出し試掘結果と周囲の調査で検出面とされているⅨ層上面を確認したのは調査区西側のみで、未検出の東側部分事による影響を受けないと判断し現状で保護した。調査地は扇状地特有の傾斜地形を為し、南西から北東方向に傾斜する。

調査の結果、Ⅸ層より上層に中世の浅川氾濫で埋没した水田が存在することが判明した。確認した遺構は中世の水田、水田に伴う畦畔、畦畔に伴う溝状遺構（SD 3・4・5）、性格不明遺構（SX 1・2・3・4）、水田層下の自然流路（SD 1・2）である。このうち畦畔4カ所と水田3面は壁面土層で確認した。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・内耳土器・石製品（滑石製紡錘車）が出土した。水田に伴う遺物は内耳土器・須恵器・土師器等が少量出土しているが、自然流路からは、弥生時代から平安時代の遺物が出土している。検出された遺構の性格から考えると、これらの遺物が直接関与するのは周辺の調査で確認された北側に展開する居住域のものであり、当調査地には自然流路を介してそこからの流れ込み等による移動が考えられる。水田の開始、廃絶（埋没）を理解する上で土層序や周辺の調査成果と共に当時の状況を補完する資料であると考えられる。

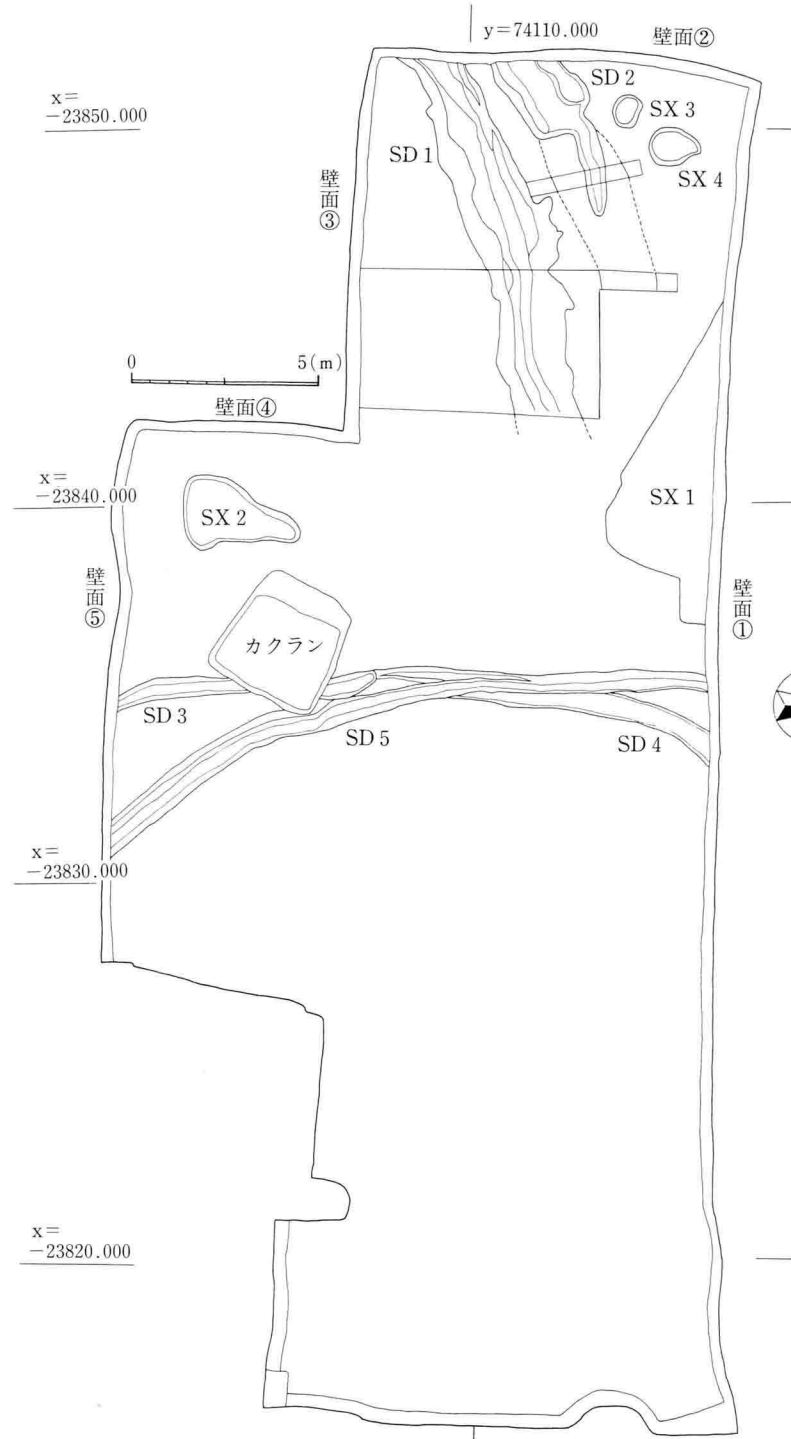


図6 遺構分布図 (1:200)

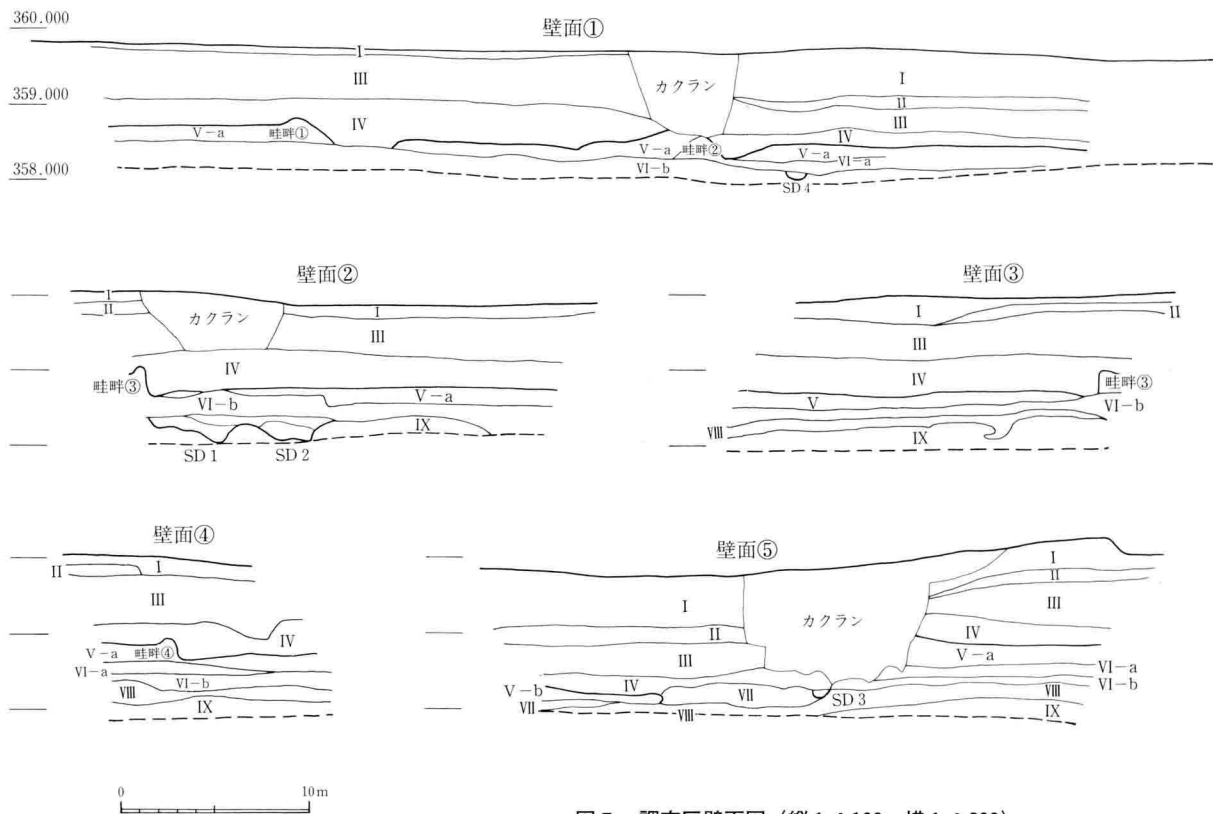


図7 調査区壁面図 (縦1:100 横1:200)

土層解説

I層：表土

II層：近現代耕作土

III層：ク

IV層：褐灰色砂、拳大の円礫混

V-a層：黄灰色粘土 鉄分沈着

b層：黄灰色粘土に砂が混じる

VI-a層：灰色粘質シルト

b層：灰色粘質シルト、a層より粒子粗い III層：近現代耕作土

VII層：褐灰色粘土

VIII層：暗灰色粘質シルト

IX層：黄灰色シルト

I～III層は近現代の水田耕作に伴う層と考えられる。IV層は浅川の氾濫で堆積した砂礫層で、調査区西側に比べて東側の方が砂の粒子が細かい。内耳土器破片1点が出土した。V層は中世水田の作土。粘土が厚さ20～30cmではほぼ水平に堆積し灰色を呈すること、所々に隆起(畦畔)を持つことから判断した。水田土壌であるか否かの判断は、プラントオパール分析などの化学分析による所見を根拠とするのが一般的だが今回は行っていない。また土壌の色について遺構埋没後も地下水位や天水による影響を受ける可能性はあるが、ここでは幾度かの耕作によって土中の養分が溶脱し灰色を呈するようになったと考え、判断の一助とした。V-b層は壁面⑤のみで確認した。VI層は水田の作土に伴う層。作土を代掻きなどで攪拌することによって、粗い粒子が沈殿し層を形成したものと考えられる。この層はシルト質で堅くしまり、鋤床の役割を果たす。VII層は壁面⑤のみで確認した。平面図ではSD3とSD5に挟まれた三角形の部分である。VIII層直上の層で、水田耕作による作用を受けたV・VI層と異なり、開発以前の土質を残していると考えられる。VIII層は包含層、IX層は検出面で共に北東方向に傾斜する。

最初にIX層が堆積する。VIII層は古代以前から平安時代の土器破片(土師器・須恵器・灰釉陶器)を包含し、粘土質のVII層が堆積すると水田に利用され、V・VI層を形成した。その後、浅川の氾濫によって水田は埋没し、氾濫砂礫層上に現代まで続くIII～I層の水田が営まれた。

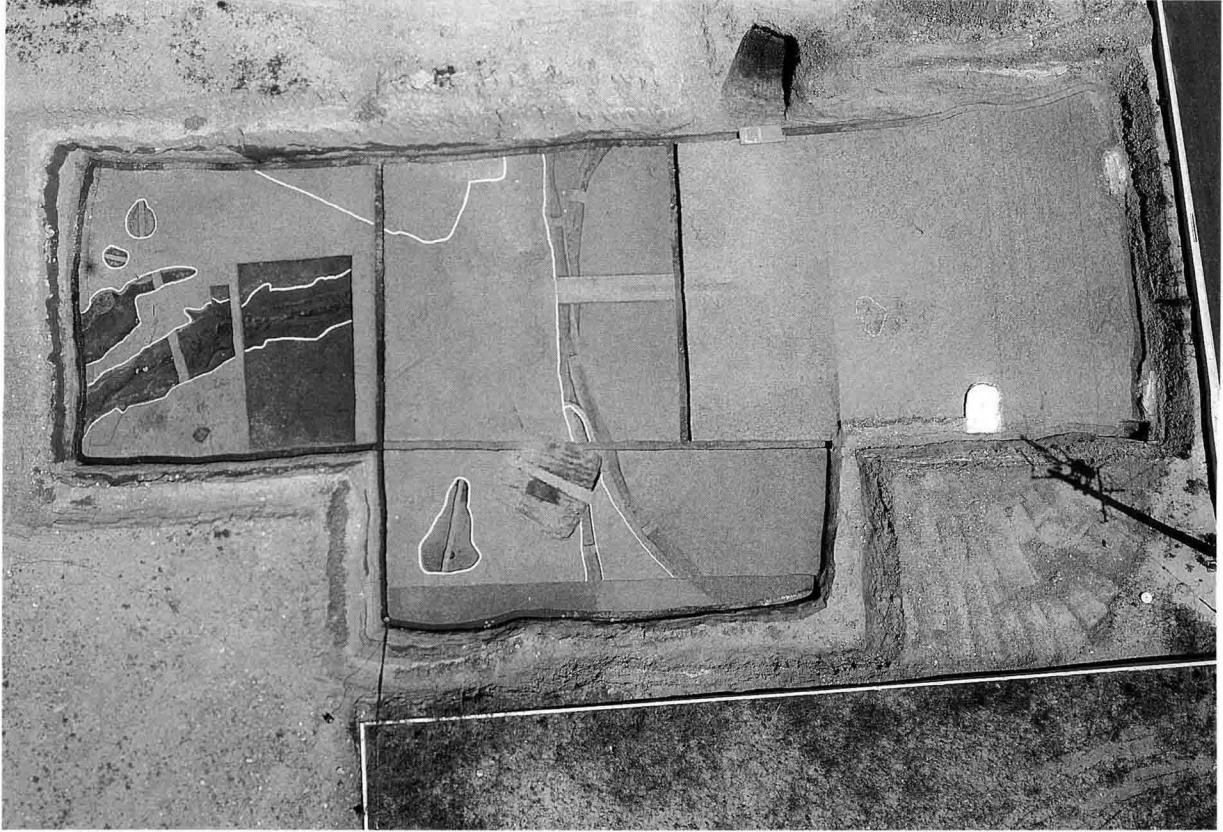


写真7 調査区全景

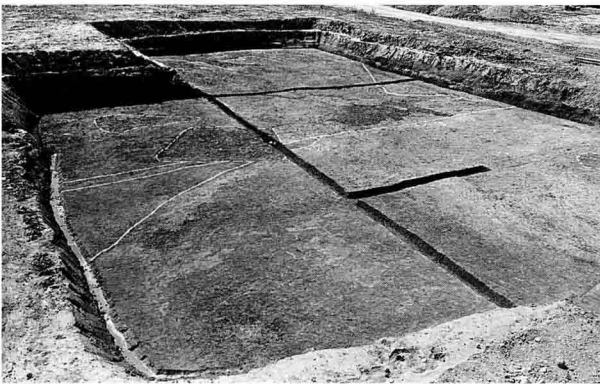


写真8 検出状況(南から)



写真9 検出状況(西から)



写真10 北壁



写真11 南壁

第2節 遺構と遺物

(1) 水田に伴う遺構

畦畔

畦畔は水田を構成する重要な施設である。主に水田を区画し、通路として利用されたりもする。また、水田の水や耕作土の流出を防いだり水路の堤を兼ねるものもある。

畦畔①は北壁で確認した。高さ10cmの小規模な畦畔である。水田作土を盛り上げて構築されている。

畦畔②は北壁で確認した。Ⅵ層で構築された畦畔の上にⅤ層を盛り上げた状況が観察できた。これは古い畦に土盛りして利用した状況を示すと考えられる。高さは攪乱により削平されるが40cmを測り、確認した畦畔の中では大規模なものである。

畦畔③は西壁（壁面②）と南壁（壁面③）の屈折部分で確認した。高さ30cmで水田作土を盛り上げて構築されている。

畦畔④は西壁（壁面④）で確認した。高さ10cmで、水田作土を盛り上げて構築されている。

畦畔の規模・形態・形成過程は、その機能に関連している。今回の調査では断面での観察となったため、正確な規模・形態を露呈することが出来なかったが、形成過程をみると、畦畔②は古い畦に土盛りして利用した状況が想定される。畦畔①③④は作土を盛って造られた、より小型の畦畔である。畦畔②のように古い畦の上に重ねて構築した跡は見られず、耕作年ごとに造り替えたとも想定できる。しかし、これらの畦畔によって区画される水田面はそれぞれ20cm程の高低差があり、耕作年ごとに畦を完全に壊して造り替えたとは考え難い。



写真12 畦畔①

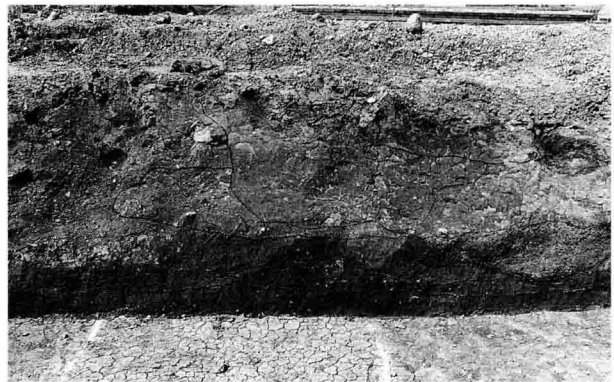


写真13 畦畔②



写真14 畦畔③



写真15 畦畔④

調査区中央では水田と SD 3 を検出、発掘した。その後水田土壌を除去し、SD 4・5 を検出した。

水田

調査区中央から東側は、水田土壌の堆積を確認した。土質は南壁でV層、北壁では直上のV層に伴うVI層となっている。南北で水田面にレベル差があり、少なくとも2面の水田面が想定される。内耳土器破片・土師器破片が出土した。

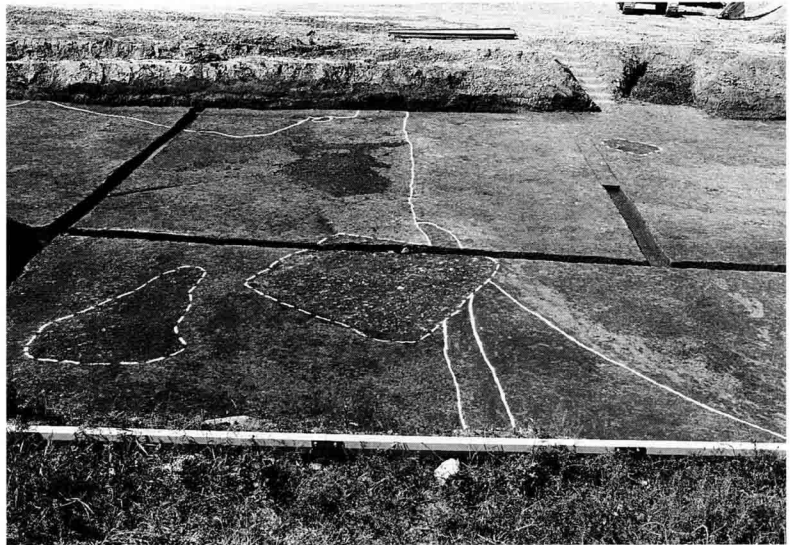


写真 16 検出

溝状遺構

SD 3 VII層を掘り込み、壁面⑤で幅40cm深さ10cmを測る。埋土は暗黄灰色砂質シルトで浅川氾濫砂であると考えられる。須恵器破片、中世土師器皿破片が出土している。

SD 4 VI-b層を掘り込み、北壁で幅40cm深さ5cmを測る。覆土は灰黄色砂質シルトである。SD 5に切られる。土師器破片が出土している。

SD 5 調査区を北から南東に走り水田土壌の堆積のラインにほぼ沿って確認した。覆土は南壁ではV-b層、北壁ではVI-a層となっている。壁面で観察すると明瞭な掘り込みではなく、畦畔②の下に浅い窪み状を呈する。

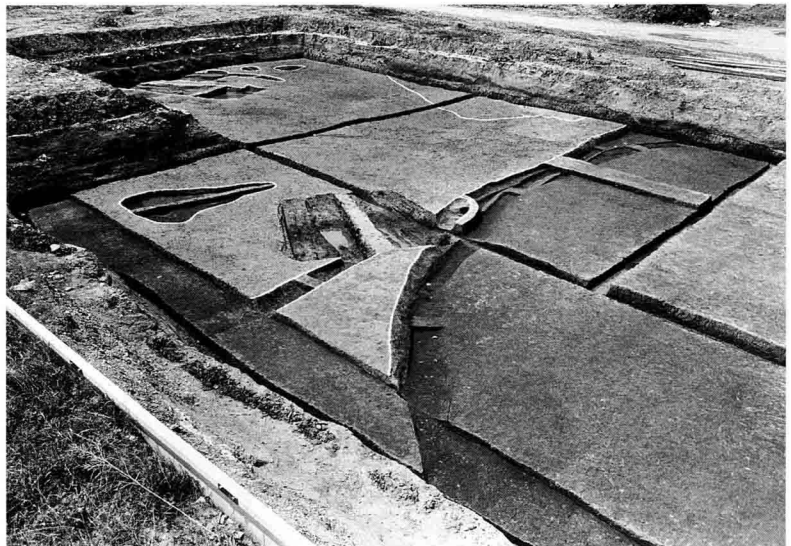


写真 17 水田土壌除去後

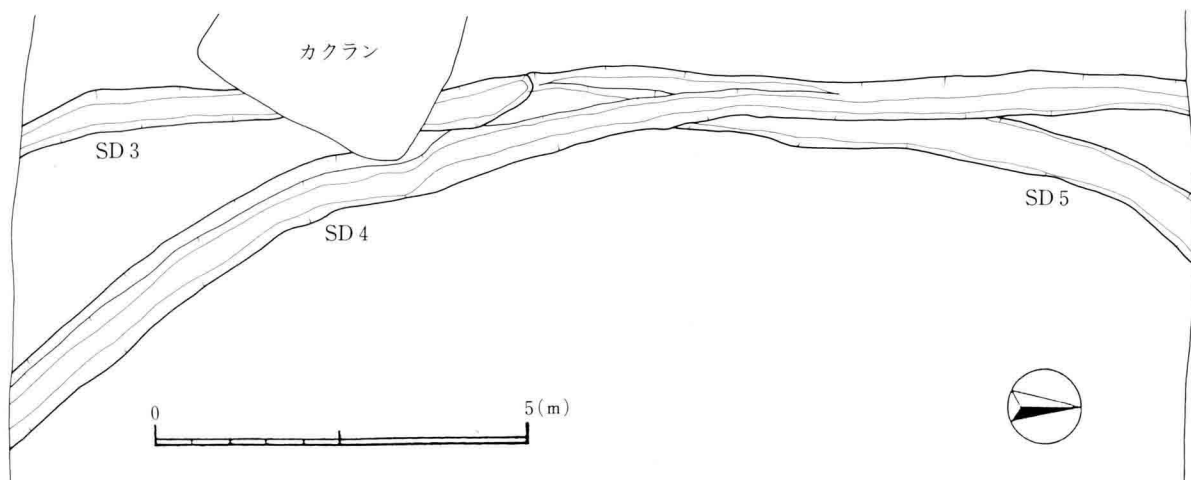


図 8 SD 3・4・5 遺構図 (1:100)

SX1・2・3・4

不整形の土坑として検出したが明確な立ち上がりを持たず、覆土は灰色粘質シルトであったため、VI層が染み出したものと判断した。

水田面の復元（図9）

水田施設として抽出される溝は、給排水のための水路、水はけのための溝などが考えられる。近年、水田の発掘調査で類例が増えている擬似畦畔のなかにも、溝状の遺構として検出されるものがある。畦畔を造ったり修復したりする際、畦畔下の土を使って行った結果土を掘削したところが畦畔に沿って溝を形成したものと、田起しなどで耕作が下層にまで及ぶことにより畦畔下が耕作されずに下層の堆積土層が畦畔に沿って溝状に残った場合のものがある。

- ・SD5は水田土壌に被覆され、畦畔②の下部に形成されることから畦畔②に伴う擬似畦畔であると考えられる。
- ・SD3について、壁面⑤を観察すると攪乱を境に浅川の氾濫砂礫IV層の堆積に段差があり、攪乱で削平された部分に畦畔があったと推測される。区画整理前の地図（図5）を見ると、SD3とSD5の直線ラインは現代の南北畦に重なる。SD3は壁面⑤の削平された畦畔に伴う擬似畦畔であると仮定すれば、中世にも現代とほぼ同じ位置に南北畦が存在したと考えられる。
- ・SD4は、SD5と切り合い関係にある擬似畦畔の可能性もある。覆土は水田土壌にはない砂質シルトであり、IV層以前の洪水による氾濫砂である場合も考えられる。

壁面、検出面においてそれぞれ確認した水田に伴う遺構の相関関係によって、水田面を復元すると図9が想定される。ただし、水田作土が洪水によって流出せず、そのまま洪水砂に覆われた場合を前提とする。

- I：SX1によって区画が確認できる。壁面①で標高358.500mを測り、畦畔①と②に区画される。
- II：壁面①・②・③・④で確認できる。標高358.700mを測り、畦畔①と畦畔③④に区画される。
- III：壁面④・⑤で確認できる。標高358.900mを測り、畦畔③④と復元畦畔（擬似畦畔SD3）に区画される。
- IV：壁面①で標高358.500mを測る。畦畔②（擬似畦畔SD5）に区画される。
- V：壁面⑤で標高358.300mを測る。擬似畦畔SD5に区画される。堆積土は作り土であるV層だが、砂が混じる、下層にVI（鋤床）層を形成しないなど他の水田面と異なった様相を持つ。

水田面は、III→II→I・IV→Vの順に低くなっている。これは旧地形の傾斜方向と同じで、これらの水田面が自然地形にそって開かれたことを示している。

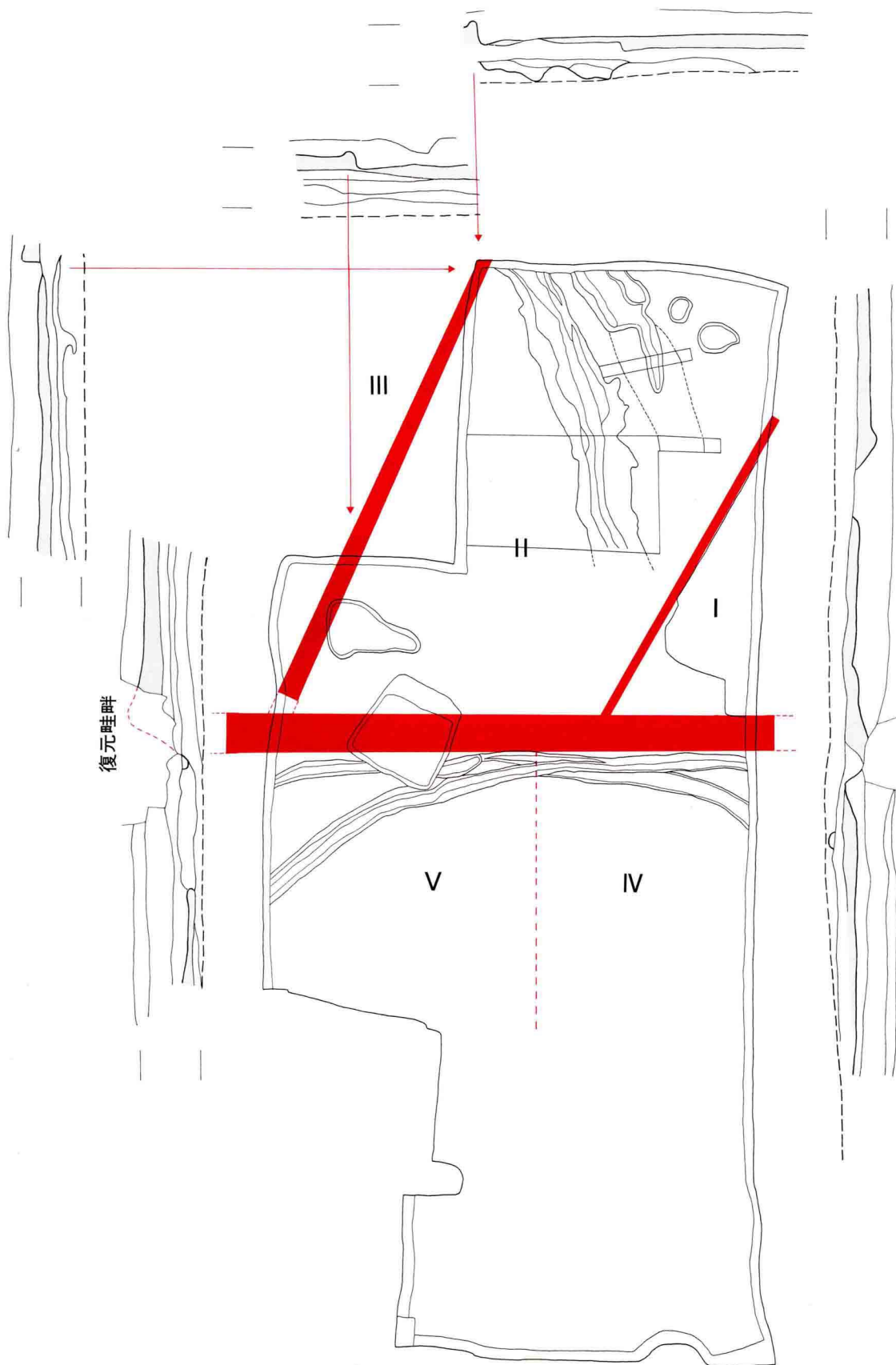


图9 水田復元図 (1 : 200)

(2) 検出面Ⅸ層上面で確認した遺構

SD1・2

Ⅸ層を確認した調査区西側で検出した。当初、落ち込み状のものとして検出したが、覆土上層の黄灰色粘質シルトを除去すると2条の溝になることが判明した。覆土下層は灰色粘質シルトに粗砂が混じり底面に砂利が堆積する。SD1・2ともにⅨ層の傾斜に沿ってⅧ層の下に潜り込んでいるのをトレンチで確認した。北東方向に続く自然流路である。

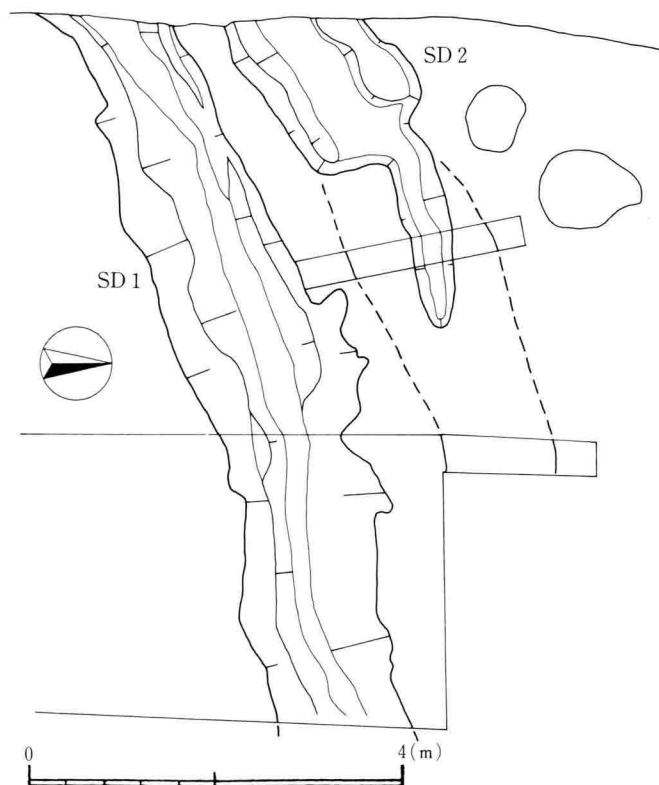


図10 SD1・2遺構図(1:100)



写真18 SD1・2

SD1は幅1.2~2.0m、壁面②で最深30cmを測る。SD2は幅1.5~2.0m、壁面で最深30cmを測る。

遺物

出土遺物はほとんど小破片であり、詳細な時期は不明である。1~4は古墳時代、5~7は奈良・平安時代の所産であると考えられる。3・4は古墳時代中期の高坏脚部で、3は屈曲した裾部になるものと考えられる。6は形態的に底部径が大きい奈良時代の様相を持つ。この他、弥生土器破片3点、古墳時代の壺・甕破片8点、古代の土師器破片3点、須恵器破片11点と時期不明の土師器小破片が少数出土している。

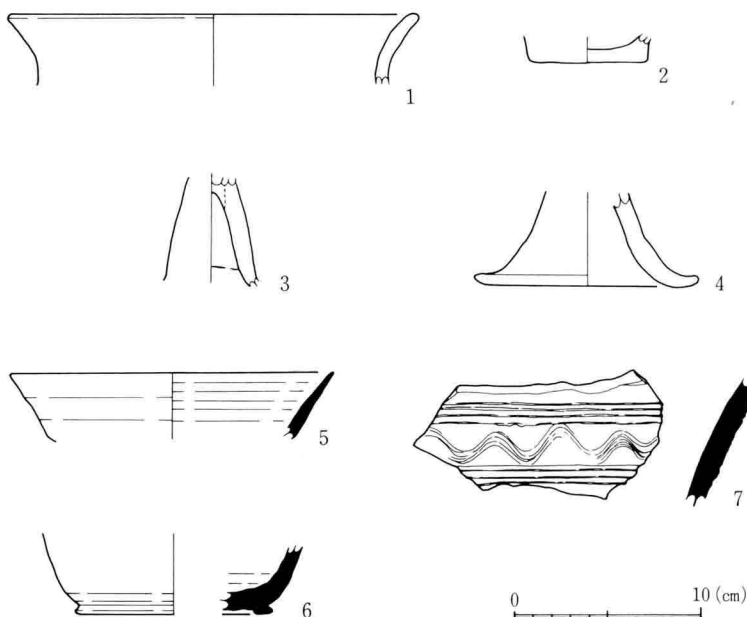


図11 SD1出土土器(1:4)

第Ⅳ章 結語

今回の調査で確認した中世の水田は、浅川の洪水砂によって埋没した状態であった。このような状態において遺構は埋没直後の姿を留めていると考えられる。しかし、古代・中世から近現代に至るまで連綿と稲作が続けられてきた場所では、ある特定時期の水田の姿を検出することは難しい。ここに今回の調査成果をまとめる。

水田のようす

図9に復元したように、比較的大きい規模の南北畦によって一定の面積が区画され、さらにその中を小規模な畦によって区画していた様子がうかがえる。区画される水田面には高低差があり自然地形に合わせて構築された結果であると推測する。また、水田土壌の観察では作土直下に鋤床層が形成されることから乾田であったと考えられる。水田面Vとして復元した水田面は他の水田の土層堆積とは異なる状態であった。この異なる状態が何に起因するものなのか問題として提起される。

中世水田の開始と埋没

水田の開始時期は、Ⅸ層で検出した遺構の時期以降であると考えられる。今回の調査では、遺物包含層（Ⅷ層）からは土師器（ロクロ調整の甕破片1点含む）・須恵器・灰釉陶器（破片1点）が出土し、Ⅸ層において確認したSD1・2は、遺物から少なくとも平安時代まで存在したと思われる。水田の開始時期は平安時代以降が想定できる周辺の調査歴では、隣接する土地区画整理事業地点27・28・30地区検出面において中世の遺構が検出されている文献5に図示された遺物は、珠洲焼播鉢・青磁・白磁・木器椀・中世土師皿で概ね12～13世紀の所産であると考えられる。北陸新幹線地点の水田は、文献6の中で、鎌倉時代以後の水田と指摘されている。以上から、開田の時期として鎌倉時代以降が考えられる。

水田の埋没時期は、水田土壌中と浅川氾濫砂層中から出土した内耳土器破片から、15世紀以降が考えられる。

参考文献

- 1 長野市誌編纂委員会『長野市誌 自然編』1997
- 2 長野県町村誌刊行会『長野県町村誌 北信編』昭和11年
- 3 長野市誌編纂委員会『長野市誌 資料編 原始・古代・中世』2000
- 4 若槻史刊行会『若槻史』昭和57年
- 5 長野市教育委員会『天神木遺跡・樋爪遺跡・権現堂遺跡発掘調査報告書』2004
- 6 (財)長野県埋蔵文化財センター『北陸新幹線埋蔵文化財調査報告書 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』1998

浅川扇状地遺跡群

よし だ ふる や しき
吉田古屋敷遺跡(2)

ポレスターステーションシティ北長野建設地点

2005年3月

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、株式会社マリモによる共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市吉田3丁目849-1他に所在する。
- 3 遺跡から出土した遺物は、遺跡名の略式記号「AYHP」を用いて注記を行い、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。
- 4 遺構図は1:80、遺物図は土器1:4、石器・土製品1:3の縮尺で掲載した。尚、土器実測図の内、縄文土器・弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器は断面を黒塗り、灰釉陶器は断面をスクリーントーンで示した。
- 5 遺構図断面の標高は、記載のあるもの(図12)以外は369.000mである。
- 6 発掘調査は青木・小林・遠藤が行い、本書の編集・執筆(第Ⅲ章第4節以外)は遠藤が行った。

目 次

例言・目次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査体制	3
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	4
第1節 立地と周辺遺跡の環境	4
第Ⅲ章 調査の成果	6
第1節 基本土層と調査の概要	6
第2節 遺構	8
第3節 遺物	17
第4節 吉田古屋敷遺跡の自然科学分析	24
第Ⅳ章 結語	31
遺構・遺物一覧表	32
遺物写真	

挿 図 目 次

図 1	調査地周辺地形図	2
図 2	調査遺跡分布	4
図 3	基本土層柱状図	6
図 4	調査区位置図	6
図 5	調査区全体図	7
図 6	S B 1 実測図	8
図 7	S B 1 覆土下層遺物位置図	9
図 8	S B 2 実測図	10
図 9	S B 3 実測図	10
図 1 0	S K 1・2 土器出土状態図	11
図 1 1	S K 2 土器埋納状態復元図	11
図 1 2	S K 3 土器出土状態図	13
図 1 3	S K 3 土器埋納状態復元図	13
図 1 4	S K 4 実測図	13
図 1 5	S K 6 実測図	13
図 1 6	S K 5 実測図	14
図 1 7	S K 7 実測図	14
図 1 8	S X 1 実測図	15
図 1 9	S X 2 実測図	16
図 2 0	縄文土器	17
図 2 1	弥生土器	19
図 2 2	弥生土器	20
図 2 3	弥生土器	21
図 2 4	土師器須恵器	22
図 2 5	石器	23
図 2 6	土製品	23

写 真 目 次

写真 1	表土除去	1
写真 2	作業風景	1
写真 3	調査地周辺航空写真	2
写真 4	調査区全景(西から)	7
写真 5	調査区全景(南東から)	7
写真 6	S B 1 (覆土下層)	8
写真 7	S B 1	8
写真 8	S B 1 覆土下層遺物出土状況	9
写真 9	S B 1 下面検出状況	9
写真 1 0	S B 2	10
写真 1 1	S B 3	10
写真 1 2	S K 1・2 土器出土状況	11
写真 1 3	S K 2 土器取り上げ状況	12
写真 1 4	S K 3 土器出土状況	13
写真 1 5	同上(南西から)	13
写真 1 6	S X 2 と周辺土壌	13
写真 1 7	S K 5	14
写真 1 8	S K 7	14
写真 1 9	S K 7 内土器	14
写真 2 0	S X 1 (北西から)	15
写真 2 1	S X 1 (南から)	15
写真 2 2	S X 2 (南から)	16
写真 2 3	S X 2 (北西から)	16

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

調査地の所在する吉田地区は長野市北部に位置する。この地区には JR 北長野駅・長野電鉄信濃吉田駅があり、交通の便の良い地域である。その上、近年行われている市街地再開発事業により商業又は公共施設の充実もなされつつある場所でもある。

平成15年9月10日付で株式会社マリモより、共同住宅建設の計画に伴い開発行為に関する協議の照会がなされた。当該地は北長野駅の北側に所在、埋蔵文化財包含地である「浅川扇状地遺跡群」の範囲内であることから保護措置が必要である旨を回答した。これを受けて事業者より「埋蔵文化財試掘調査依頼書」の提出があり、1月19日に試掘調査を実施した。

確認調査は開発予定地内の任意の位置に2ヶ所の試掘坑を設定しバックホーを援用して行った。その土層断面の観察により、地表面から約40cm下のところに遺物包含層が存在することが認められた。この為、記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨の保護協議を行った。7月9日付で株式会社マリモとの間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結、発掘調査を行うに至った。

発掘調査は7月14日から8月3日までの実質12日間、作業員の延べ人数81名で行った。

第 2 節 調査日誌

- 7月14日（水）晴れ 重機による表土除去。
- 7月15日（木）晴れ 表土除去作業継続。
- 7月21日（水）晴れ 作業員参加。遺構検出。
- 7月22日（木）晴れ トレンチ設定・調査。
午前、吉田小6年3組体験学習。
- 7月23日（金）晴れ SB1、トレンチ調査。検出。
- 7月26日（月）曇り SB1、東側グリッド設定・調査。
- 7月27日（火）晴れ SB1掘下げ、完掘写真撮影。
SX1、西側グリッド調査。
- 7月28日（水）晴れ SB、SX1・2掘り下げ。
- 7月29日（木）曇り SB2・3完掘、SX掘り下げ。
SK1,2測量、土器取上げ。
- 7月30日（金）晴れ 全景・個別写真撮影、CS測量。
- 8月2日（月）晴れ CS測量結線。SK3掘り下げ。
- 8月3日（火）晴れ SK3測量、土器取り上げ。
現場作業終了。



写真1 表土除去



写真2 作業風景

現場作業終了後、整理・報告書作成作業に入り本書の刊行に至る。



写真3 調査地周辺航空写真（平成2年6月撮影 ㈱ジャステック）

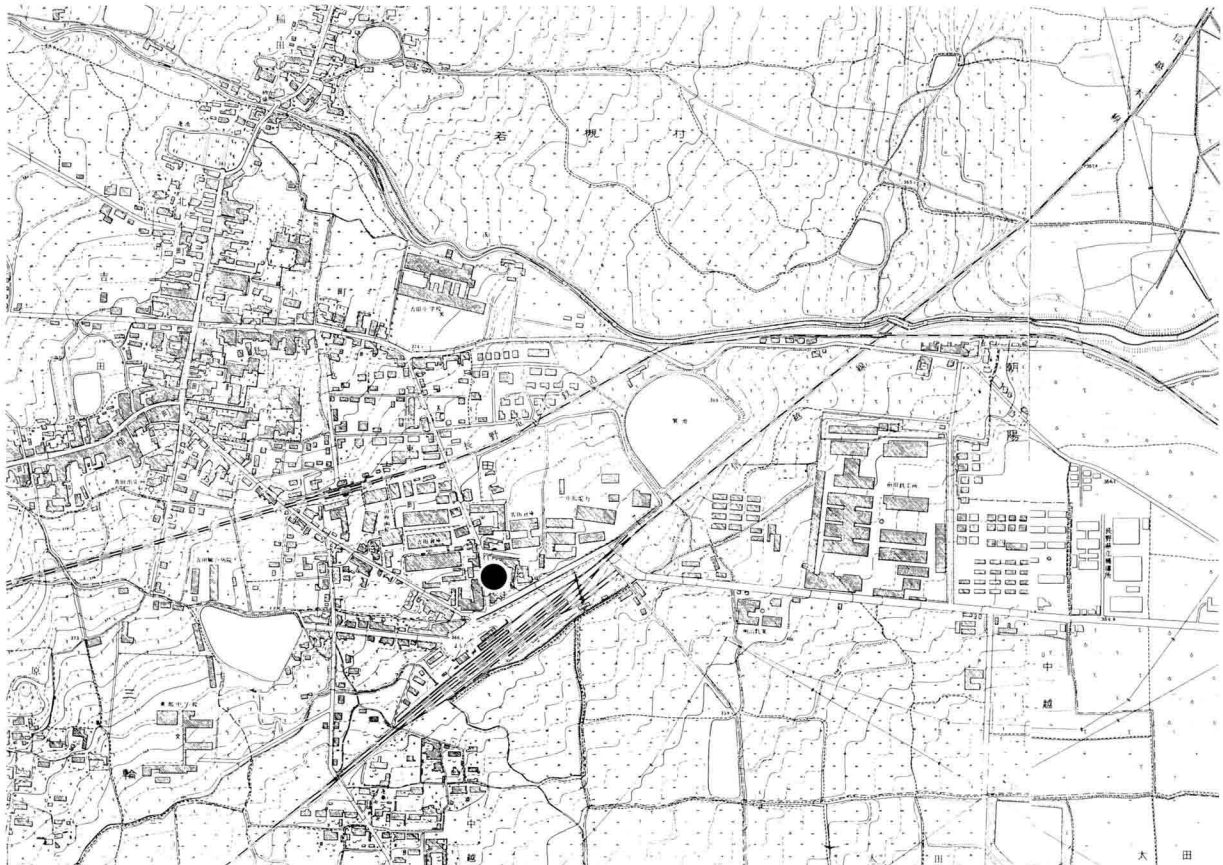


図1 調査地周辺地形図（1：10,000、大正15年測量・昭和27年修正）

第3節 調査体制

埋蔵文化財の保護措置については、史跡等整備事業にかかわる学術調査を長野市教育委員会文化財課が担当し、各種開発行為に伴う緊急調査は埋蔵文化財センターが担当している。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩 陸秀
総括管理者	長野市教育委員会文化財課長	塩澤 一郎
総括責任者	局主幹兼埋蔵文化財センター所長	矢口 忠良
庶務担当	係 長	山岸 恒雄
	事務員	吉村 久江
調査担当	係 長	青木 和明（調査員）
	主 査	飯島 哲也
	主 査	風間 栄一
	主 事	小林 和子（調査員）
	専門員	堀内 健次
		清水 竜太
		遠藤恵実子（調査員、編集・執筆）
		長瀬 出
		山野井智子
		石丸 敦史
		小出 泰弘
		森田 利枝
		宮澤 浩司
		山岸 千晃
発掘作業員	伊藤八重子・上原律江・後藤雄一・塩入洋子・清水昭光・田中純子・田村秀之・寺島直利 宮澤周子・宮下美代子・山口勝己	
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子	
遺構測量委託	株式会社写真測図研究所	

2・3号土坑内埋土の自然科学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した（第Ⅲ章 第4節）。

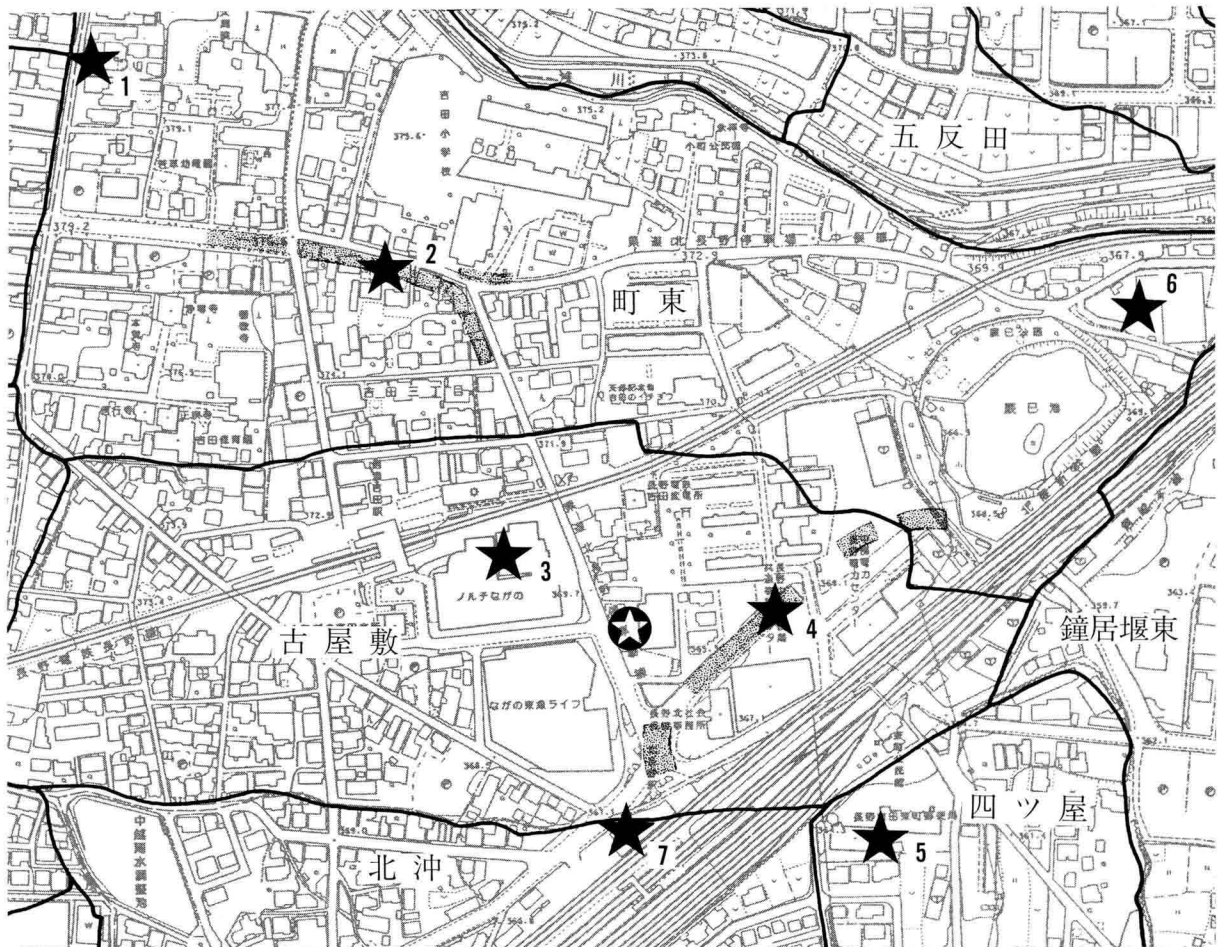
第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 立地と周辺遺跡の環境

吉田古屋敷遺跡のある浅川扇状地は、長野市の北西に位置する標高1917.4mの飯綱山を水源とする東南に流下する浅川による堆積作用により形成された、浅川東条を扇頂として東南方向に広がる広大な扇状地である。この扇状地には数多くの遺跡が点在し、「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。

その中の吉田地区は、浅川上流右岸に位置し、南への緩やかな傾斜が認められる扇状地形となっている。現在、この地区内の浅川は扇頂部より2.5kmに位置し、東南方向に流下し、吉田小学校の西側の手力橋以下から天井川となっている。JR信越本線と交差する所では高架となっている。

また、この地域では近年市街地再開発事業が実施され、宅地造成や道路改良などの工事に伴う発掘調査が行われてきた。それにより、縄文時代から平安時代までの各遺構・遺物が確認された。その中でJR北長野駅・長野電鉄吉田駅付近で行われた発掘調査について、遺跡概要を述べる。



1 吉田町東遺跡(宅地造成地点) 2 吉田町東遺跡(北長野通り道路改良地点) 3 吉田古屋敷遺跡(B-1市街地再開発地点)
4 吉田古屋敷遺跡(JR吉田踏切地点) 5 吉田四ツ屋遺跡 6 辰巳池遺跡 7 浅川扇状地遺跡群 白抜き：調査地点

図2 調査遺跡分布図(1:1,500)

縄文時代

縄文時代の遺物についてはほとんどの遺跡で確認されている。中でも吉田古屋敷遺跡（3）・四ツ屋遺跡では後期の敷石住居が確認されている。特に吉田古屋敷遺跡（3）のものは円形の竪穴住居跡で敷石とその間に4枚のスノコ状の板材が想定されている。また浅川扇状地遺跡群では中期の埋甕（屋外埋葬）がみられる。

それに対して、その他の遺跡では土器片が覆土中などから出土するのみで、明確な遺構の確認はなされていない。遺構が確認され、この時期に生活していたことが伺える場所は南側の地域に集中しており、これについて浅川扇状地遺跡群では、縄文が調査区内でみられるのは段丘状の高まり部で、この部分が浅川の氾濫の影響を受けなかった為と報告されている。縄文後期以降浅川の影響を強く受けた場所で、その影響は次に遺構がみられる生時代中期まで続いていたものと考えられる。

弥生時代

弥生時代では中期から後期にかけての住居址がみられる。この時期では、辰巳池遺跡以外の調査遺跡で集落遺構が確認されている。また、吉田古屋敷遺跡（4）では後期の環濠とみられる大溝が確認されており、有る程度の集落の規模が示唆される。しかし、各遺跡の検出状況からみると住居跡の展開は疎らな状態であり、この地域での集落は小規模なものであったことが考えられる。

後期には埋葬遺構がみられる。四ツ屋敷遺跡と浅川扇状地遺跡では壺を合わせた土器棺墓が、吉田古屋敷遺跡（3）（4）、浅川扇状地遺跡群で木棺墓が確認されている。いずれも副葬品としてガラス小玉や管玉・白玉が出土している。また、吉田古屋敷遺跡（3）例では供献行為が想定される状態での土器の出土がみられる。

古墳時代

古墳時代は前期からの集落跡がみられ、弥生時代に続き居住域であった。しかし、前期は四ツ屋敷遺跡・辰巳池遺跡にまばらな存在で、集落としての形成は中期以降である。この時期の住居址は全体的にみられ、吉田町東遺跡・吉田古屋敷遺跡においては調査区内で比較的密に存在している。

尚、前期には吉田四ツ屋敷遺跡と浅川扇状地遺跡内において墳丘墓が確認されている。吉田四ツ屋敷遺跡例は前方後方形の周溝墓が想定されており、多量の土器の出土から時間差のある葬送儀礼の可能性も示唆されている。また、形状は不明ながら壺形埴輪が出土した周溝も確認されている。浅川扇状地遺跡群例では、布留式系の二重口縁壺などが出土した方形周溝墓がある。

以上のことから、前期の集落はこの範囲内では僅かなものと言わざるを得ないが、南西側に周溝墓が複数造られていることを考慮すると、前期の集落の中心はここよりも南西の方向に広がっていたものとも考えられる。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は住居址を中心とした集落跡である。全体に北側の遺跡に多くみられ、特に吉田町東遺跡では住居の重複関係にあるものが多く、規模的、時間的にも大きなものであったことが伺える。また、建て替えやカマドの破壊行為の様子が伺えるものなどがある。

<参考文献>

- ・長野市教育委員会 1995『二ツ宮遺跡（2）・吉田町東遺跡』 1996『吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡（6）・棗河原遺跡』 1997『吉田古屋敷遺跡』 1997『埋蔵文化財センター所報No.8』 2004『篠ノ井南条遺跡・辰巳池遺跡・本郷前遺跡』
- ・（財）長野県埋蔵文化財センター 1998『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告5』 1994『埋蔵文化財センター年報No.11』

第3章 調査の成果

第1節 基本土層と調査の概要

基本土層は第1層が旧建物建設に伴い盛られた砂利層、第2層：黒褐色土層、第3層：暗褐色土層となり、第2層と第3層が遺物包含層に該当する。この層序はA・B両方のトレンチではほぼ同じであることから、本調査区内での検出面は一様のものである。調査対象範囲は200㎡であるが、このうち東側は旧建物の建設解体除去に伴う掘削により、遺物包含層まで破壊を受けている状態であった為、西側を中心とした約73㎡が実質調査範囲となった。

調査区は全体に攪乱が数ヶ所あったが、遺構に影響するものはなかった。遺構は弥生時代住居跡3軒、土坑7基、小穴、溝状遺構2条を検出した。住居跡はすべて調査区外にかかっていた為、半分のみの調査となった。住居跡SB1では、比較的形の残る土器と炭化木材が床面上から検出された。また、床面下からは縄文土器を含む掘り込みがあり、調査区東側への遺構の広がりを示すものであった。土坑SK2は土壌内に置かれた甕の上に上半を欠いた甕を2重に重ね蓋として被せた弥生時代中期の埋甕である。SK3は3つの甕を使った平安時代の土器棺墓であった。溝状遺構は北側と南側での検出であったが、これらは一連のものであると考えられる。弥生時代中期には集落跡の、平安時代は主に墓域としての展開が考えられる。

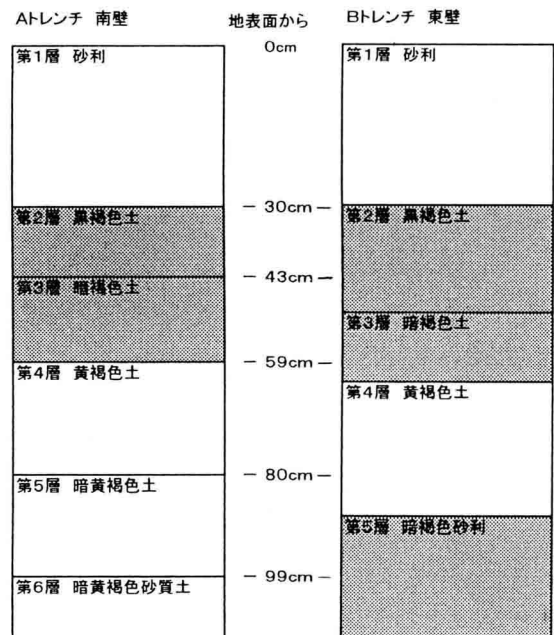


図3 基本土層柱状図



図4 調査区位置図

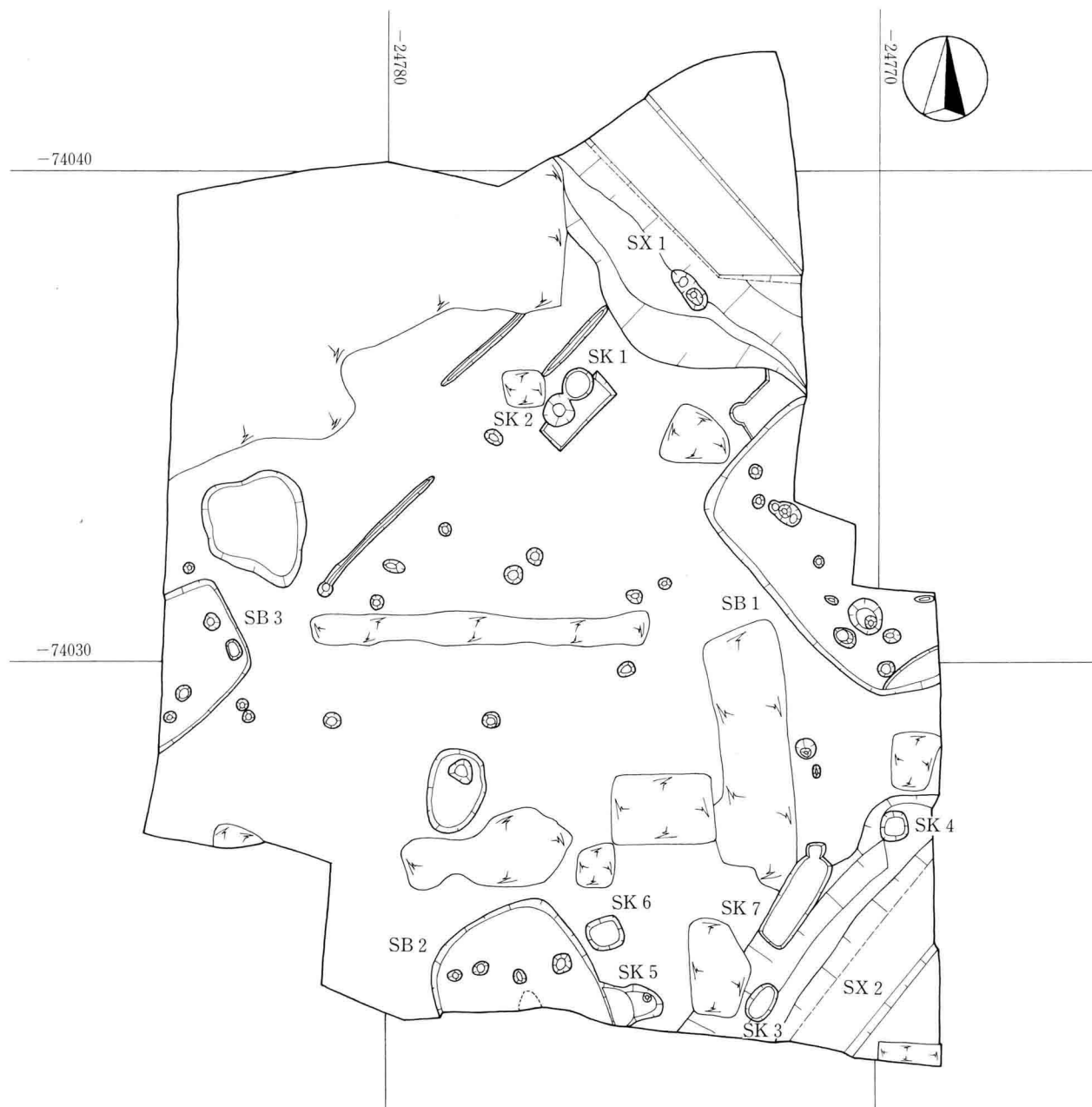


図5 調査区全体図 (1 : 150)



写真4 調査区全景 (西から)



写真5 調査区全景 (南東から)

第2節 遺構

SB1

北西方向に主軸をとる。調査区外にかかっているため、全体の約半分程の検出であった。長辺6.2m・短辺が推定で約3.8mの隅丸長方形の住居跡である。

検出面からの掘り込みは30cm前後と深く、残りの良い状態であった。床面は、張り床は認められなかったが全体的に堅緻である。支柱穴は長辺方向に2.9mの間隔で2個（P-2、P-5）認められた。その他の小穴については住居施設と断定できるものはなかったが、P-4には直径24cmほどのピットの中に2個体分（図21-9・10）の土器が割れた状態で出土しており、意図的に埋められたものと考えられる。尚、炉は住居の調査範囲の中では確認されなかった。

土器は覆土を中心に数多く出土し、住居全体での総量は13,780gである。中でも、破片のものを中心とした上層とほぼ原形を保っている状況であった下層とに分けられる。上層と下層との土器量の比率は6：4で、上層のものについては住居の埋没時に何らか



写真6 SB1（覆土下層）



写真7 SB1

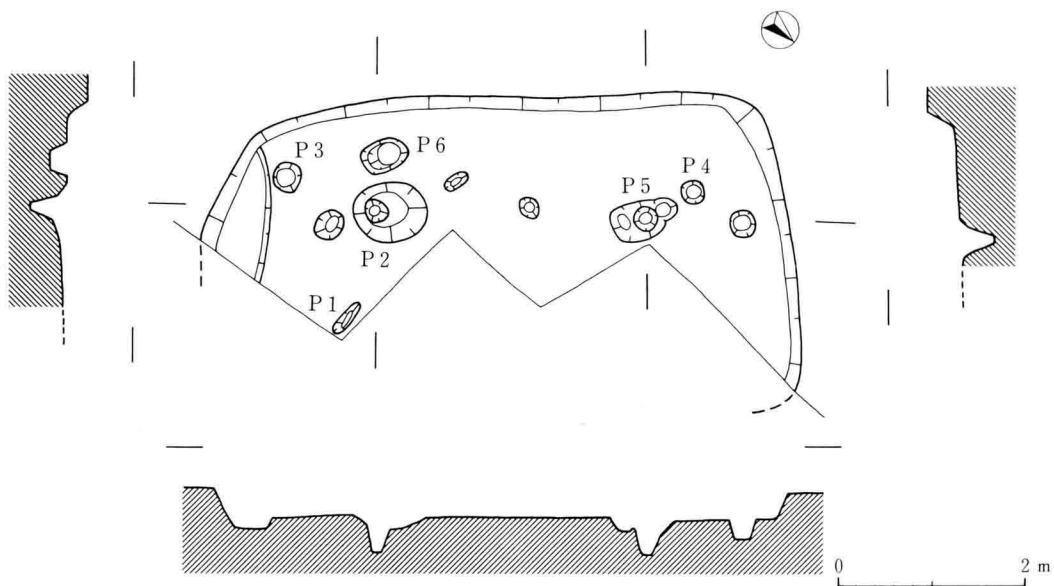


図6 SB1実測図（1：80）

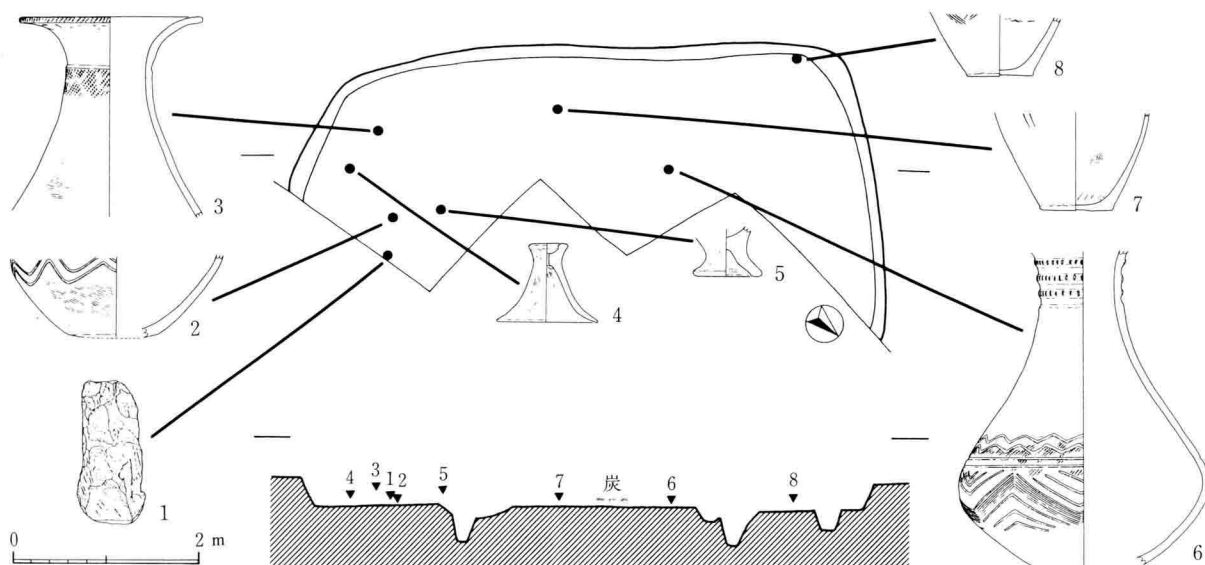


図7 SB1 覆土下層遺物位置図 (1 : 80) (土器 : 8、石器 1 : 6)

の形で一度に投棄されたものであると思われる。下層では床面より6~10cm上の面で土器と共に炭化した板状の木材を全体的に検出した。炭化木材は住居の壁面から中央に向かって倒れている状態で確認され、炭化材自体は大変脆く、ある程度形のわかるものもみられたが、薄く残存しているものが多かった。これらは下層の比較的原形を留めている土器のレベルと若干上下するが、ほぼ同時のものとして捉えられる。

尚、この土器と炭化木材が住居跡埋没過程な中での位置付けについて、特に炭化木材の倒れている方向などから住居焼失によるものとも考えられた。しかし検出面からの掘り込みが深く、他の土器の残りが良い事と比べると炭化木材の残りが少ない感がある事、炭化木材より下のレベル、床面直上での土器の出土は破片のみが少量あるのみで、主立ったものがみられない事とを考慮すると、住居の使用を止めた段階後に土器と共に住居の中に入れられたものであることが考えられる。

住居南東隅では、床面検出時にまた別の掘り込みがある事を確認した。掘り下げた所、深さは住居床面より9cmほどの深さがあり、覆土中からは縄文土器(図20-1~9)が破片のみで出土した。

SB1住居にかかる一部分のみの検出であったので、遺構としての性格は不明と言わざるを得ないが、調査区外となっている東側に向かって縄文時代の遺構または住居域が広がって行くものであることが考えられる。



写真8 SB1 覆土下層遺物出土状況



写真9 SB1 下面検出状況

SB 2

北西方向に主軸をとる。南側が調査区外にかかっており、全体の半分ほどの検出であった。長辺の規模は不明で、短辺が3.2mを測る隅丸長方形の住居跡である。

検出面からの掘り込みは17cmほどである。床面はレキがほぼ一面に広がっており、軟弱な状態である。住居跡南側のほぼ中央にあたる所に炉跡がある。直径48cmほどの楕円形を呈する地床炉で、焼土の上に薄く炭がのっている程度と残りは良くない状態である。

住居内の小穴は、わずかに土器があるものもあったが、柱穴など住居内施設と考えられるものは検出されなかった。

土器は床面に接して出土しているものは、鉢(図22-5)を含め少量であった、覆土中には多く含まれていたが、ほとんどが破片で原形をとどめていたものは見られなかった。この住居跡全体での土器の総量は4,823g、内9割以上にあたる4,660gが覆土中のものである。その中で復元が可能であったのはごくわずかであり、これらは住居が埋没する中で破棄されたものであると考えられる。

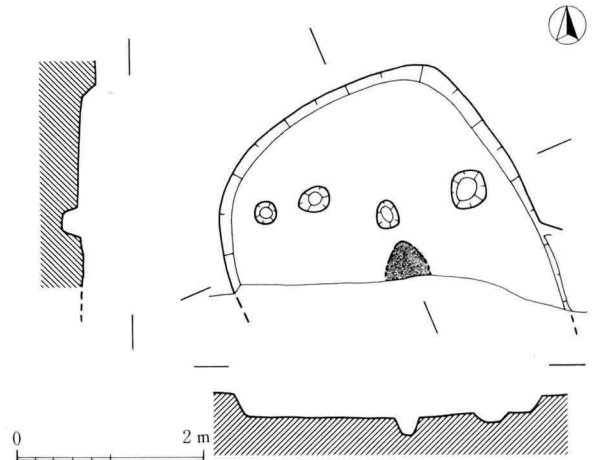


図8 SB 2実測図(1:80)

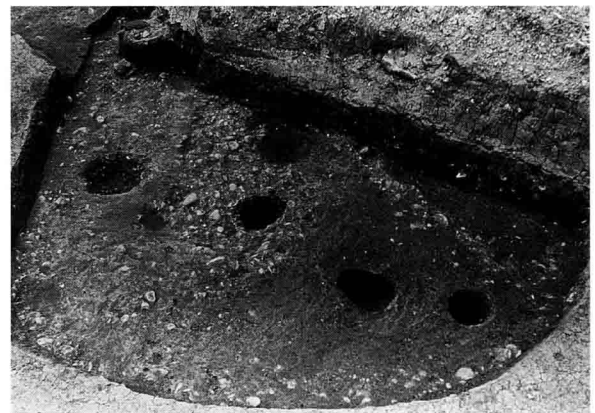


写真10 SB 2

SB 3

北東方向に主軸をとる。南側が調査区外にかかるため、約半分の検出であった。そのため長辺の規模は不明、短辺が2.5mを測る隅丸長方形の住居跡である。

検出面からの掘り込みは4~6cmと大変浅い。床面はあまり明瞭でなく軟弱である。住居内小穴も位置からみて、柱穴と断定できるものはない。

土器は破片のみで、住居跡全体で389gと少ない。

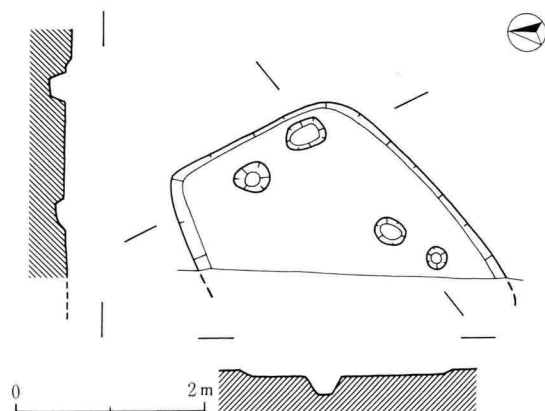


図9 SB 3実測図(1:80)



写真11 SB 3

SK 1

直径67cm、検出面からの深さ12cmを測るやや楕円形の土坑である。

土器は底面よりも上部、検出面から確認できる位置からあり、内面を上に向けた状態の破片を中心に破片の土器が散らばっていたもの(図23-2・3)、その下に破片が入っており(図23-1)いずれも部分的なもので3個体分である。

土器が検出面とほぼ同じレベルで、また内側を上にして出土したことから、実際に埋納した時の面よりも下での検出であったことが考えられる。土器以外の遺物等はなく、性格については不明である。



写真12 SK 1・2土器出土状況

SK 2

直径63cm、検出面からの深さ34cmの円形を呈する、すり鉢状の土坑である。

検出面から土器が見えはじめ、9cmほど掘り下げた時点で、甕に甕を被せた埋甕であることを確認した。断面から(写真13)垂直に立てた甕の上に上半を打ち欠いた甕を2重に被せたものであった。蓋として使われたものの底部は上部に乗っていた他、身の甕の中央部分に落ち込んでいた。埋甕の中には土器の他に目視で確認できるものはなかった。その為身の甕の中の土を検出からそのままの状態に取り上げ、自然科学分析(第3章4節)を行った。

SK 1とは接してはいたものの、切り合っている感はなく時期も含めて考えると、互いの土坑を意識して造られた可能性も考えられる。

SK 2 土器埋納状態復元 (図11)

SK 2の土器はいずれもほぼ完全な形で復元できた。これにより埋納時の状態を考えると、検出面よりも大幅に高い位置にまで土器があったことが窺える。同じく検出面よりも高い位置から掘りこまれたSK 1では、土器の残りが半分程であったことから、上部は後世に削られたものと思われる。これに対してSK 2では一番上にある蓋の底部まで残っていたことからこれよりも早い段階、後世の削平の前には全体が押し潰された状態となっていたことが考えられる。

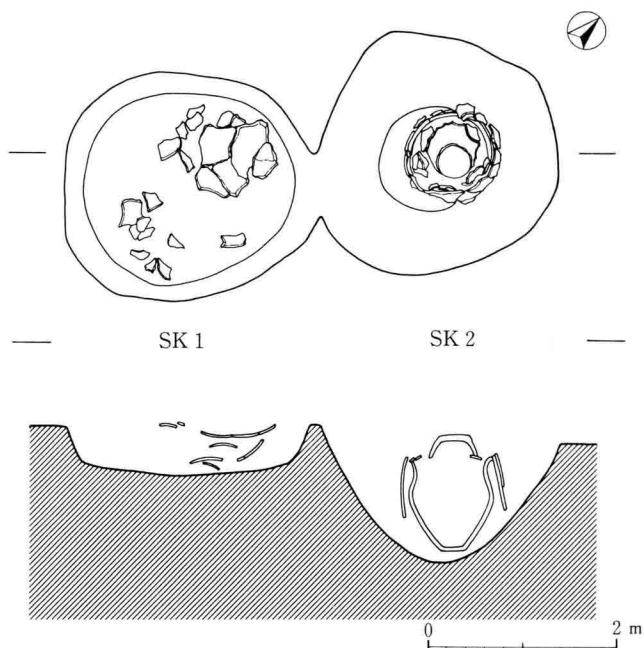


図10 SK 1・2土器出土状態図(1:20)

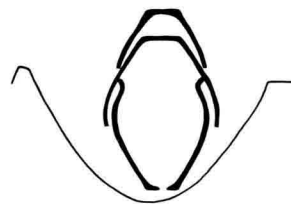


図11 SK 2土器埋納状態復元図(1:20)



① 埋甕検出時 (左：上面から 右：断面から)

SK 1 を含め、中心から南東側に168cm×60cmのトレンチを設定。

上部蓋の土器 (図23-5) は底部が上部に乗っており、断面左にも僅かに見られる。



② 上部蓋土器 取り外し後

上部蓋の底部と同個体の土器までを取り上げる。

断面に見えるのが下部蓋の土器 (図23-6)、この土器の底部は身土器の中に埋没している。



③ 下部蓋土器 取り外し後

下部蓋の土器を上面に乗っていたものと断面の半分を取り上げる。

上部蓋のものよりも大型の土器が身の土器の半分以上まで被っている。身の土器 (図23-4) は口縁部が割れているものの完形であった。

写真 13 SK 2 土器取り上げ状況

SK 3

主軸を北東方向にとる。SX 2 の中に掘り込まれている85cm×50cmの楕円形を呈する土壌である。

検出面からの深さは15cmを測るが、SX 2 の掘り下げの際土器が確認されたことによるもので、実際の土壌の深さはそれ以上であったものと思われる。覆土はレキを多く含み、またSX 2 自体もレキを多く含んでいる為、土壌の範囲をはっきりと掴むことは難しかった。

土器は横に倒した状態で3個体分検出した。両端の土器が口を内側に向け、中央の土器(図12-2)と南側とが口を合わせている。北側(図12-1)の土器では、取上げの際、覆土中からヒトのものと思われる歯を確認した。よって、この土壌は土器棺墓であると判断した。その為、歯を確認した土器の中の土を取り上げ、自然科学分析(第3章4節)を行った。尚、他2個の土器からは確認されなかった。

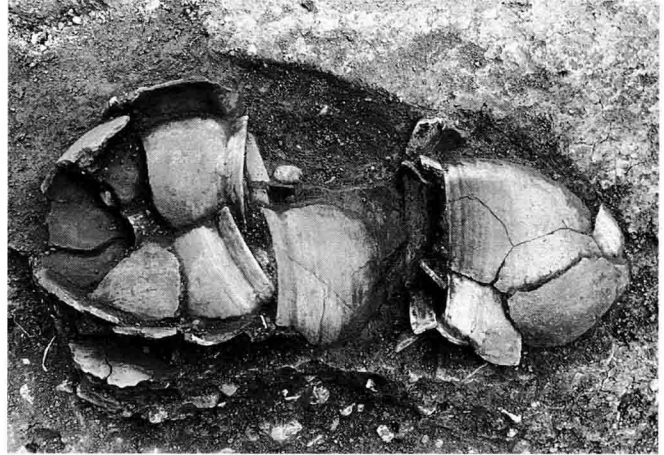


写真14 SK 3 土器出土状況



写真15 同上(南西から)

SK 4

SX 2 の縁辺部に位置する。直径60cm。弥生土器を主体とし、縄文土器(図20-10~14)を含む。

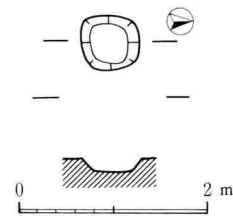


図14 SK 4 実測図(1:80)

SK 6

SB 2 横に単独で位置する。直径76cmで土器は弥生の土器片が少量みられるのみである。

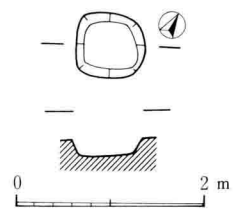


図15 SK 6 実測図(1:80)



写真16 SX 2 と周辺土壌

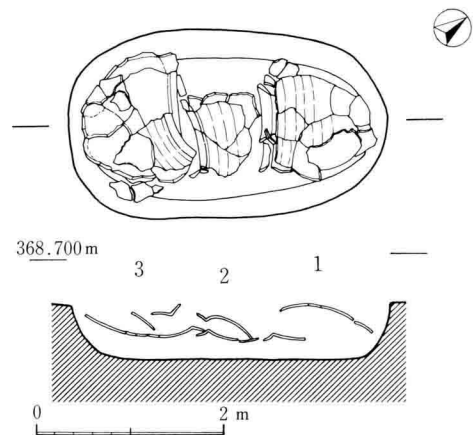


図12 SK 3 土器出土状態図(1:20)

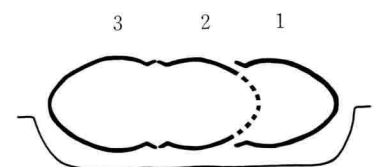


図13 SK 3 土器埋納状態復元図(1:20)

SK 5

SB 2 東側に接する。検出面からの深さはないものの2段に掘り込まれてる。土器は弥生土器の破片のみである。SB 2 を切って造られた土壌である。

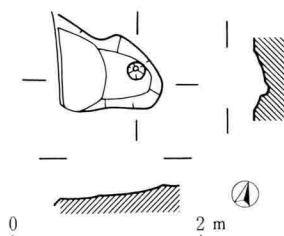


図 16 SK 5 実測図 (1 : 80)



写真 17 SK 5

SK 7

主軸を北東方向にとる。208cm×76cm規模の隅丸長方形を呈する。SX 2 の縁辺部に位置する。覆土はレキを多く含む黒色土で、土器は小破片が出土したのみであった。北側の壁面に付くようにして灰釉手付瓶が出土した。

検出面の深さは13~18cmであるが、掘られた当時よりも上部が削られているものと思われる。規模や形から、この土壌が埋葬の為に墓坑である可能性が高い。尚、頭位は灰釉手付瓶が置かれていることから、北東方向が考えられる。

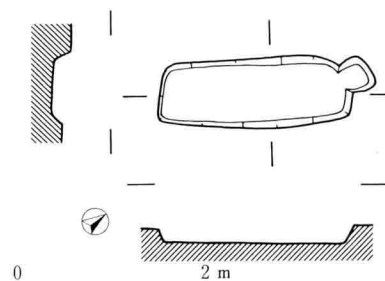


図 17 SK 7 実測図 (1 : 80)



写真 18 SK 7



写真 19 SK 7 内土器

ピット 他

ピットは、40cm前後のものが全体に散在していた。その内土器が出土したものが8個あったが、いずれも平安時代のものを中心とした破片があるのみであり、中には弥生土器・縄文土器を含んでいたが、僅かな量であり、これらは混入したものであると判断される。

調査区の北側を中心に溝状の掘り込みが3条みられた。長さは2~3m、幅は概ね16cm位のごく浅いものである。土器は1ヶ所で破片が3点程あったが、掘り込みに伴うものではない。人為的な遺構であると思われるが、性格は不明である。

SB 3 北隣に最大径2.4mの不整形な掘り込みがある。検出面からの深さは5~10cmであるが底面は凹凸がある。土器などの出土は一切なかったが、このような掘り込みはこの部分だけであり、性格は不明であるが、自然のものではないと思われる。

SX1

長軸が北西方向を向く、溝状の遺構である。底面は検出できず南東に一部検出したのみとなった。

遺構の全体からみると一部のみの検出である為、規模などは不明である。検出面から底面まで大きく2段に掘られている、上段（検出面から）は距離が最大で160cm、比高差が約40cmとなだらかなのに対し、下段（底面まで）は距離86cmに対して比高差は約60cmと急な勾配になる。また、掘り込みは上下一連のものと考えられるが、掘り込み方が下段は平らに掘られているのに対し、上段には凹凸がある事、上段と下段の境に小穴が掘りこまれていることから、機能などの面から違いを持たせて造られたものであると思われる。

覆土中から出土した土器の総量は6,508gを量る。すべて破片で、土器の6割程は下段からのものである。時期がわかるものでは弥生時代中期のものが主体を占め、上段からは須恵器も僅かに出土したが、遺構に伴うものではない。覆土は堆積の状況からみて、特に下段部では時間を置かず埋没した可能性が高い。



写真20 SX1（北西から）



写真21 SX1（南から）

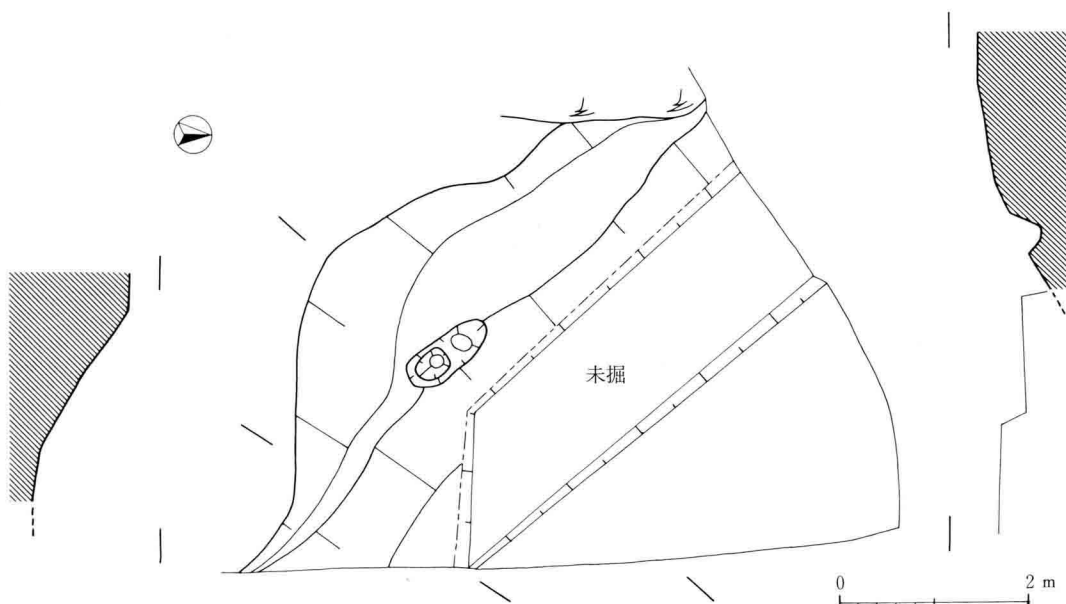


図18 SX1実測図（1：80）

SX 2

南西方向に掘られた溝状の遺構である。検出が一部である上、底面までを全て検出するには至らなかった。

検出面からは、全体的になだらかな傾斜を有している様に見えるが、端から150cmの所で一段下がっていることを確認した。これより先は僅かしか掘れていないため明確に出すことはできなかったが2段に掘られている。

覆土出土の土器の総量は3,609gで上面と下面との割合は6：4である。破片のみの出土で弥生時代中期の土器を主体とし、遺構が縄文時代の面を掘り抜いていることから、縄文土器が若干みられる。

上面と下面では高さに大きな差がみられず、覆土中の土器もほぼ同じ様な内容であることから、遺構の埋没はSX 1と同様一度に行われたものと考えられる。

上部に造られた土坑については時期が異なるものと考えられるが、位置からみるとこの遺構の特に上面部分を意識して造られたように思われる。

SX 1・SX 2については、別の遺構として調査を行ったが、この2つの下面の掘り込みのラインを東側へ延長すると直角に交わる事、また、下面検出面の標高がいずれも368.280mを僅かに前後する所にあることなどの事からX1.2は一連の遺構である可能性も考えられる。



写真 22 SX 2 (南から)

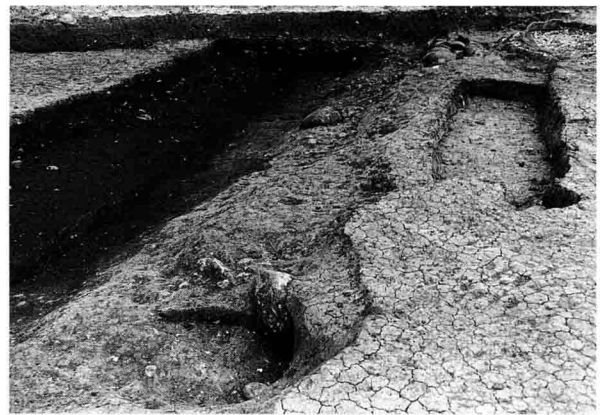


写真 23 SX 2 (北西から)

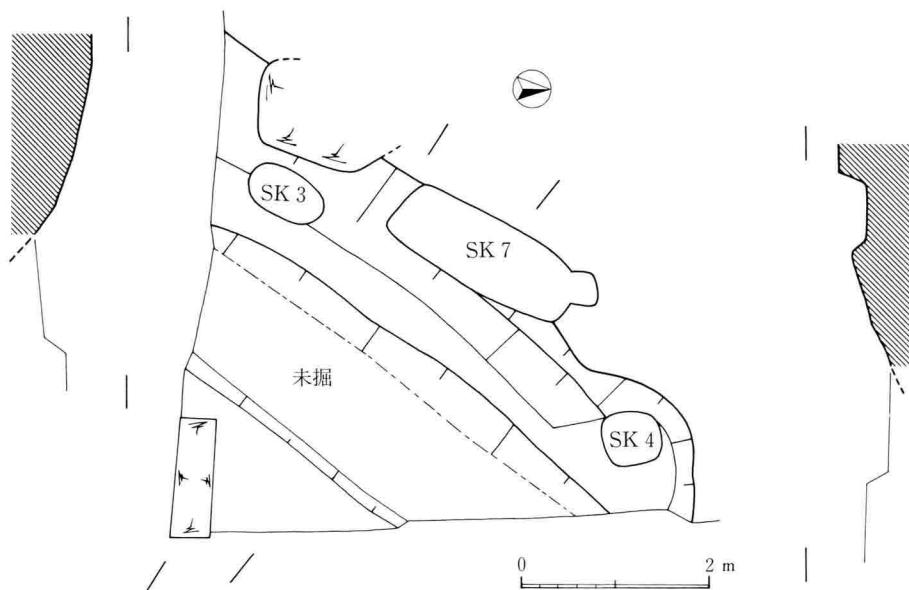


図 19 SX 2 実測図 (1 : 80)

第3節 遺物

1 縄文土器 (図20)

縄文土器は、当該期の遺構から出土したものはなく、弥生・平安時代遺構面から、混入したものとしての出土がほとんどある。また、全て破片の状態である。

1・9は注口土器である。1は3本単位の櫛状工具による連続渦巻き文が施されている。

2～6は内面模様のある浅鉢である。2・6には貼付凸帯文と、棒状工具による刺突文がみられる。3は楕円文が、4は口辺部に沈線文1条とその直上から上に向かって複数の斜行沈線文が施されている。5では口辺部に貼付凸帯以下胴部にかけて円形文・鍵の手文風の文様がみられる。

7は口縁部に8字状貼付文が、8は穴の開いた貼り付突起が口縁部にある、いずれも深鉢形土器である。

10・12・19は深鉢。10は口縁内側に2条の太い沈線文がみられる。外面は連鎖状沈線文が施されている。12・19も同様のものであり、いずれも薄手のものである。

11・13・14・17は縄文(単節LR)を地文としたものである。11・13・14は沈線文が巡らされ、17には胴部中程まで縄文を地文とし、沈線文が施され、磨り消し技法もみられる。

15は貼付凸帯文と沈線文が、16には刺突が施された貼付凸帯文がみられる。18は口縁部に8字状貼付文が施されている。

以上のものは、縄文時代後期のものが主体である。土器の数は少ないが、時期を窺えるものから、後期中葉(加曾利B1式)に比定される。

尚、20は晩期後半氷式土器である。この時期のものは1点のみであった。

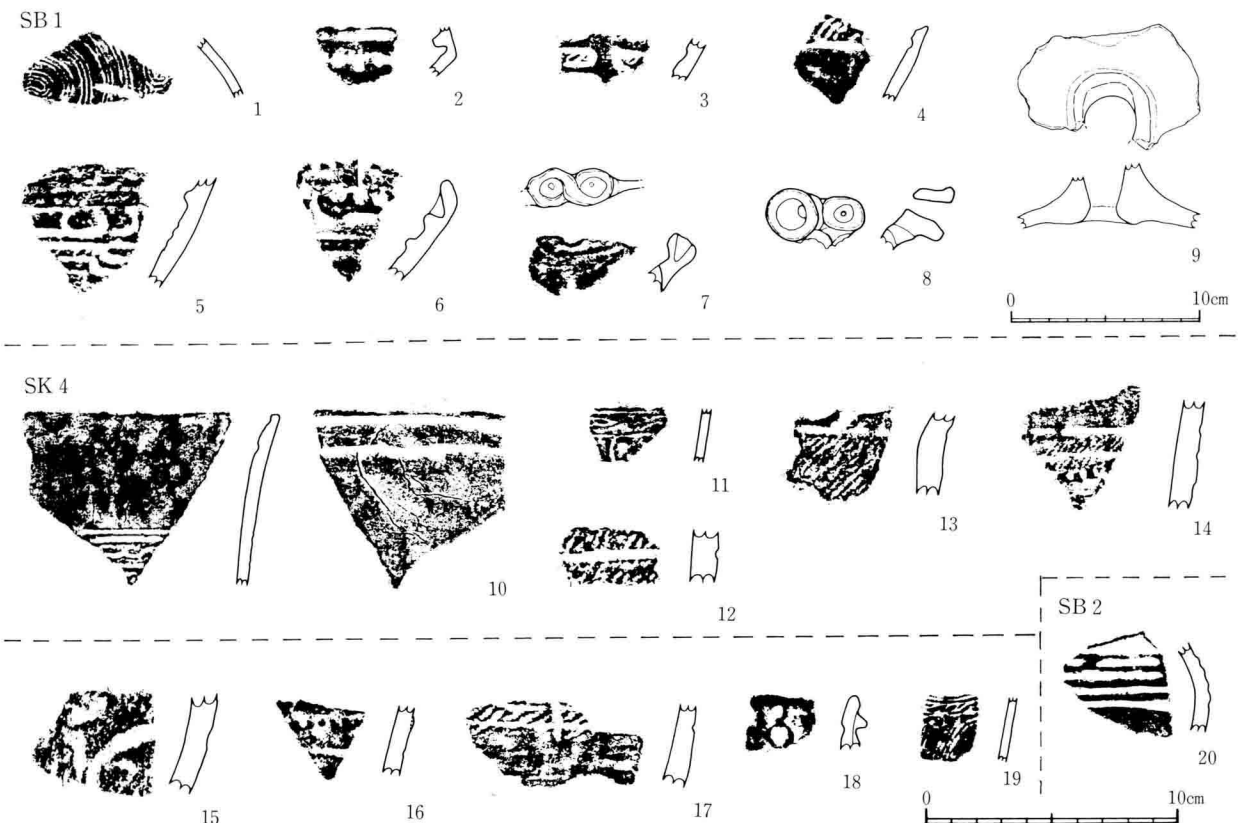


図20 縄文土器 (実測1:4、拓本1:3)

2 弥生土器

SB 1 出土 (図21)

1、頸部にキザミ凸帯3条、胴部ヘラ描文に縄文を充填し、下半は櫛描き山形文を施す。外面に黒斑が明瞭にみられる。2、口縁部に縄文、頸部にも縄文を充填する。3、胴部下半にヘラ描き山形文。以上は壺である。

4・5は甕。6は天井部に焼成前の穿孔を有する蓋。7・8は台付き甕の脚部。9は蓋で、山形を呈するものである。

10~12は台付き甕、10はヘラ描きによるが、文様は様式外のものである。11、コの字重ね文。12はヘラ描きの斜線文に刺突のある円形浮文が付く。

13、胴部下半に山形文。14、垂下文。15、ヘラ描き沈線と斜線文による区画内に刺突の施されるもの。16、頸部にキザミのある浮線文。以上が壺で、17、櫛状工具による刺突が巡るもの。18は縄文が充填され斜めの沈線と刺突が巡る甕である。

SB 2・3、他出土 (図22)

1、口縁部は受口を呈し鋸歯文に縄文を充填、胴部はT字文と波状文。2、口唇部にキザミ、胴部は3条の横線文の間に斜短線文(施文右回り)が施され、下部に刺突と沈線が巡る。3、口唇部にキザミ、櫛状工具による斜線文。以上は甕である。

4は壺、口唇部に縄文、頸部にヘラ沈線が3条巡るが磨耗が激しい状態。5は底部、焼成後穿孔のある鉢。

7は櫛状工具による斜線文、下部に刺突と沈線がある。8は懸垂文、弧線に沿って刺突が巡る。9は縄文充填に沈線区画、その間を一段おきに櫛状工具による刺突(右回り)がある。10は下部縄文充填がみられる。11は懸垂文。以上は壺である。

12は口縁部に縄文とおさえ、頸部に波状文がある。13は胴部に細かな刺突のある浮線文。14は櫛状工具による沈線と縦方向のハケがある。以上は甕。13は小型甕と思われる。

15は縄文と下部に沈線。16は波状文、以下に刺突。17は押し引きによる刺突。18は波状文。19は口縁部に縄文と押さえ。20は口縁部に刺突、胴部に波状文。21は沈線の間を交互に縄文充填がなされている。22は懸垂文。16~20が甕、15・21・22は壺である。23は受口口縁の甕、24は壺である。

SK 1・2 出土 (図23)

1、口縁部、頸部篋描き沈線区画内を縄文充填、直下に鋸歯文。2、胴部下半に篋描き直線文と下に連弧文、いずれも3条ある。以上は壺である。3、胴部上半にささら状工具に近い櫛描羽状文がみられる甕。

4~6はSK 2出土の甕。4、口縁部に棒状工具によるキザミ、胴部は櫛状工具による縦羽状文(右回り)。胴部には明瞭な黒斑があり、底部は焼成後穿孔がある。内面ハケメ調整は3段階に確認できる。5、櫛状工具によると思われる不明瞭な縦羽状文。胴部下半より上を意図的に打ち欠いている。6、櫛状工具による縦羽状文(右回り)。外面にススの付着がみられる。胴部半分よりやや上の位置から上を意図的に打ち欠いている。

この他、住居跡または土壌の覆土中から、赤彩のある破片が全体で780g出土している。弥生土器出土総量35,513g、内2.2%を占める。

以上の出土土器から、器種は壺・甕(小型・台付き)・鉢・蓋がみられる。壺は縄文(LR)が充填され、文様は篋描きを主とした直線文・鋸歯文・山形文・連弧文・懸垂文がみられる。甕では櫛描きによる縦羽状文・斜線文・波状文が多く、コの字重ね文のものがある。また無文と思われる赤彩の破片がみられることから、全体として弥生時代中期後半、栗林土器に比定されるものである。

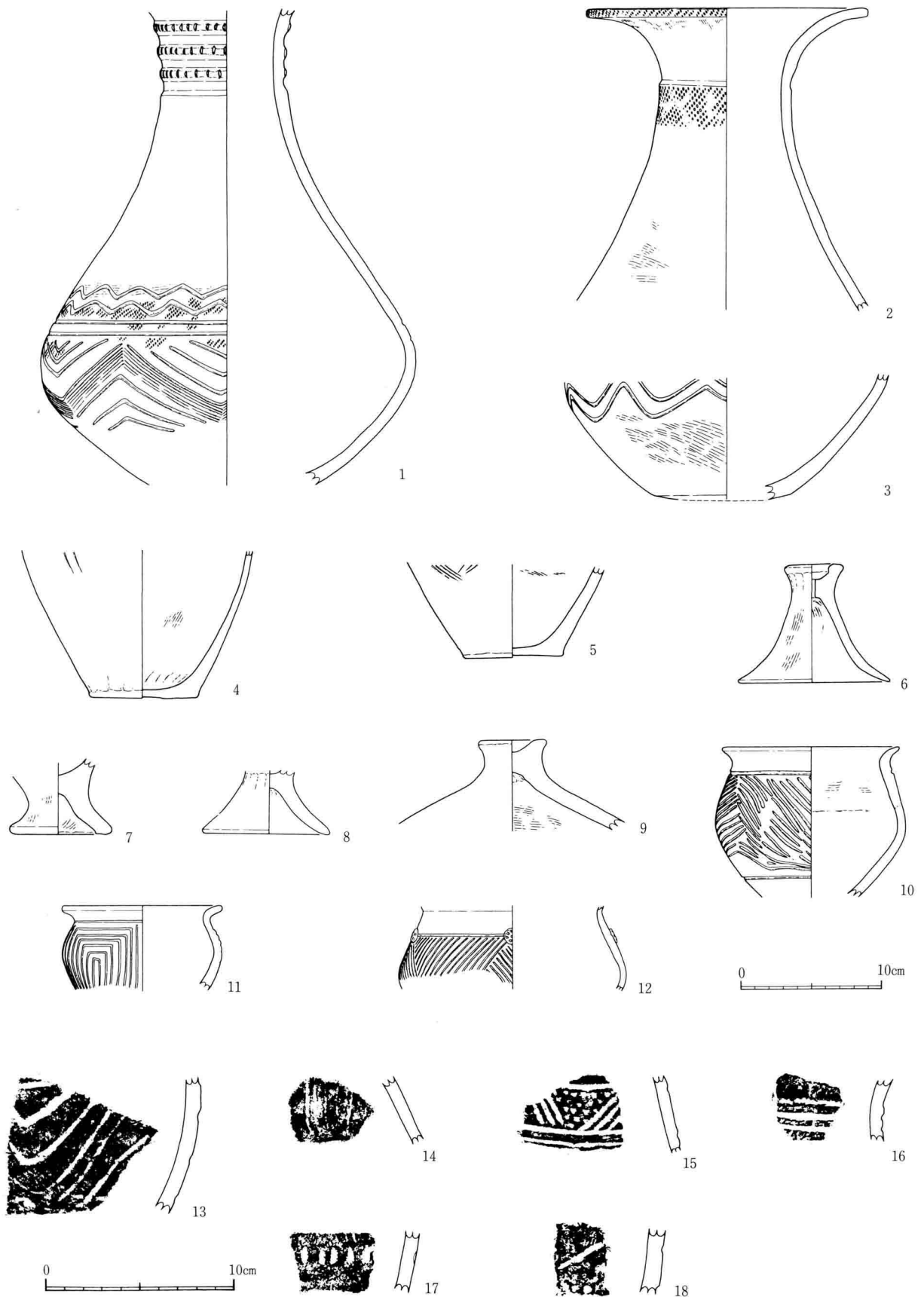


图 21 弥生土器① (实测 1 : 4、拓本 1 : 3)

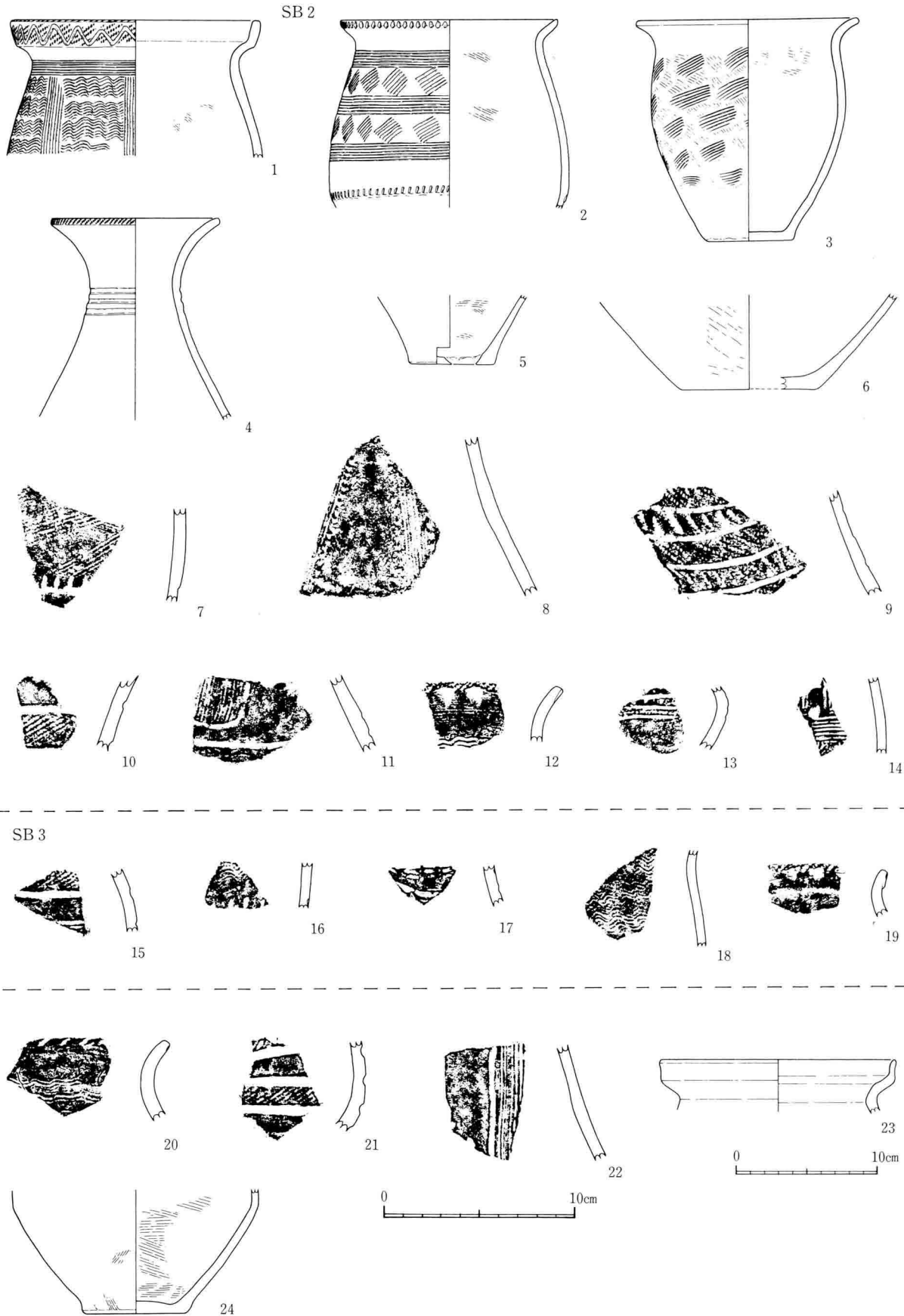
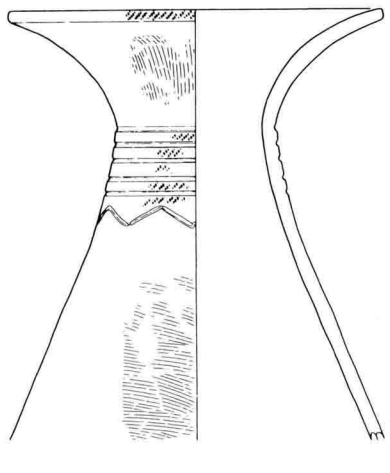
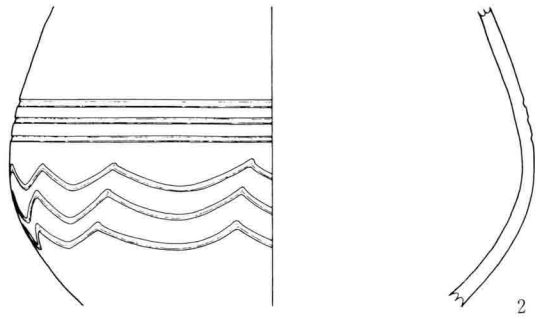


图 22 弥生土器② (实测 1 : 4、拓本 1 : 3)

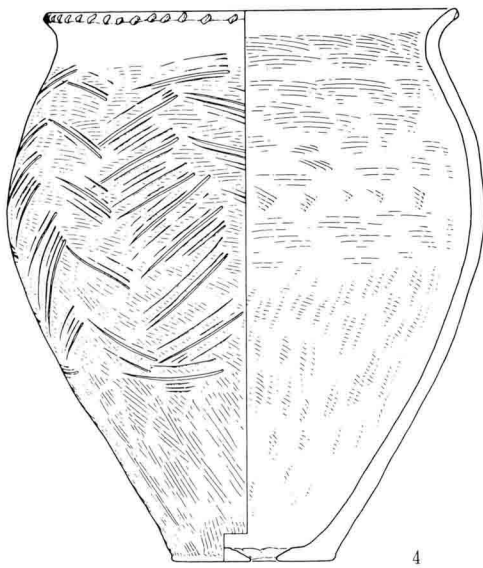


SK 1

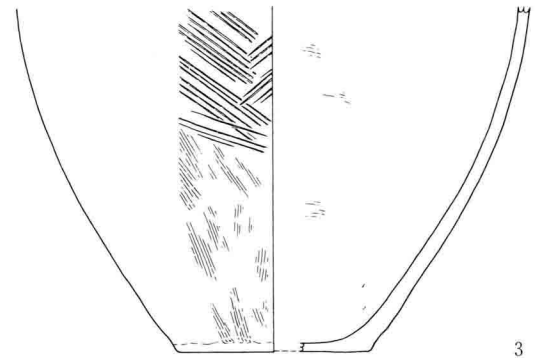


2

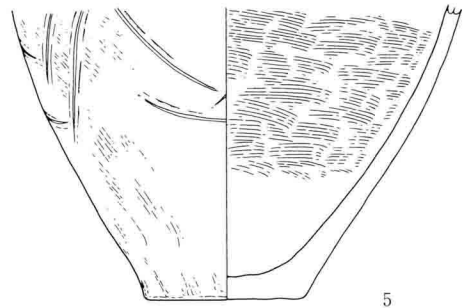
SK 2



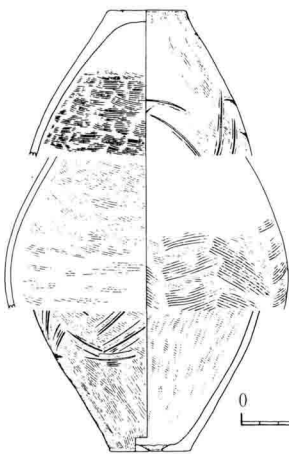
4



3

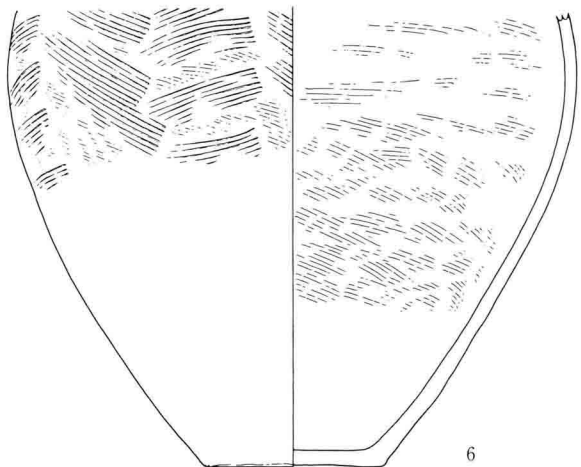


5



0 20cm

参考図 SK 2 土器組み合わせ (1 : 8)



6

0 10cm

图 23 弥生土器③ (1 : 4)

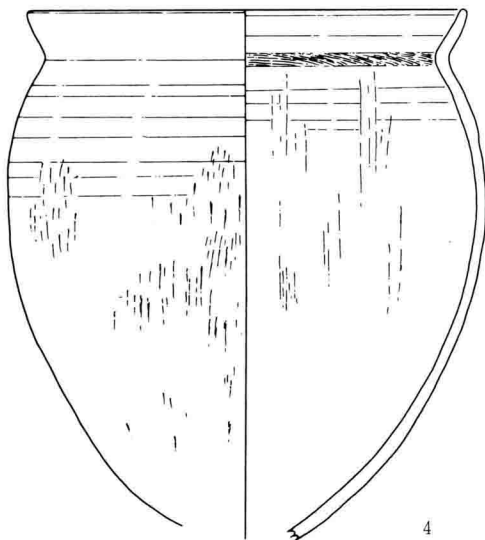
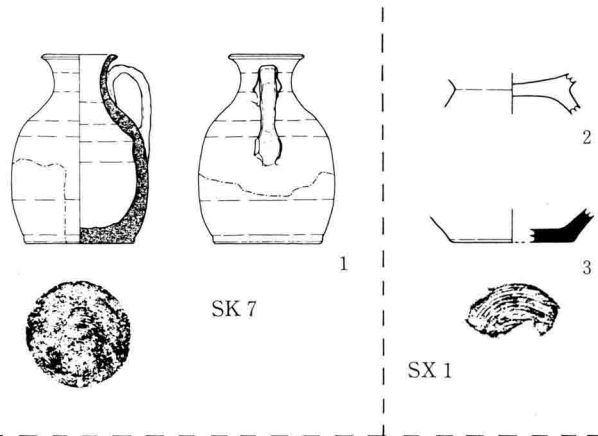
3 土師器・須恵器 (図24)

1、灰釉手付瓶。口縁部を多少欠いている完形の状態である。器高10cm、胎土は灰白色を呈する。釉は刷毛ぬりによって施されており、底部は糸きり技法によるものである。以上のことから、東濃窯産・光ヶ丘1号窯式のものに比定される。

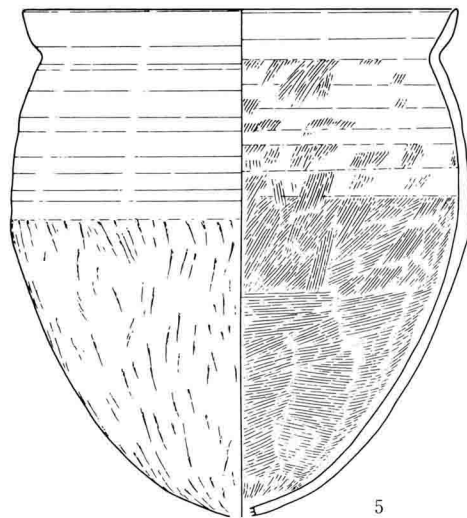
2、土師器椀、内面黒色処理がされてる。

3、須恵器坏。底面は糸きり技法によるものである。

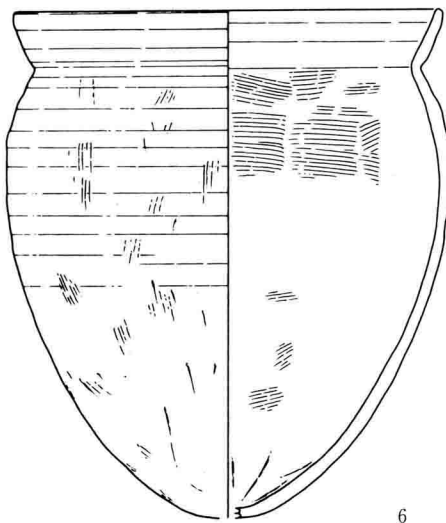
4～6、土師器甕。器高27cm～28.5cm、口径22.7cm～23.2cmと、3個共ほぼ同じ大きさでつくられている。外面は胴部上半にロクロナデ、中位以下にタテケズリが施され、内面は胴部上半にロクロナデまたはカキメ、下半部はハケが施されている。時期は9世紀後半～10世紀初頭に比定されるものと思われる。



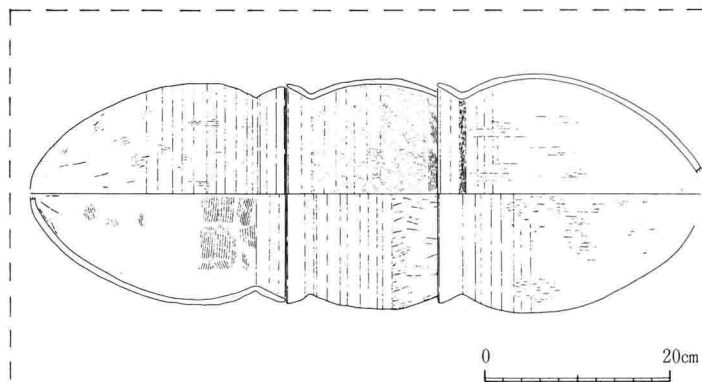
SK 3



0 10cm



6



0 20cm

参考図 SK 3 組み合せ (1 : 8)

図24 土師器・須恵器 (1 : 4)

4 石器 (図25)

1、打製石斧。欠損はなく完形。背面では1次調整時に縦方向の亀裂が入るなど調整以外で欠けているヶ所がみられ石材自体が比較的脆い感がある。刃部には磨いた跡がみられる。長さ5.9cm、幅6.5cm、厚さ1cm、重量98g、安山岩製。

2、みがき石。断面三角形を呈する、内1面が特に平らな状態である。長さ9cm、幅2.5cm、厚さ2.3cm、重量75.5g、黒色頁岩製。

3、剥片。腹面の一部に自然面がみられる、内側が鋭利な状態となっているが1次調整以外の調整はみられない。長さ7cm、幅5.8cm、厚さ1.1cm、重量32.7g、頁岩製。

4、刃器。背面は自然面である、調整は3辺に施されている。長さ5.9cm、幅6.5cm、厚さ1cm、重量44g、頁岩製。

剥片・その他(写真)。上記のほか、住居跡内覆などから土剥片が全部で19点(総量173.6g)出土した。チップの様なごく小さなものから、2次調整が確認できるものまで、最大のもので6cm程度である。石材は頁岩・黒曜石・チャートがある。

5 土製品 (図26)

1、紡錘車。土器破片を転用したものである。

2、土器破片を転用し、円形に磨いたものと思われる。用途不明、表面に4条の沈線がみられる。

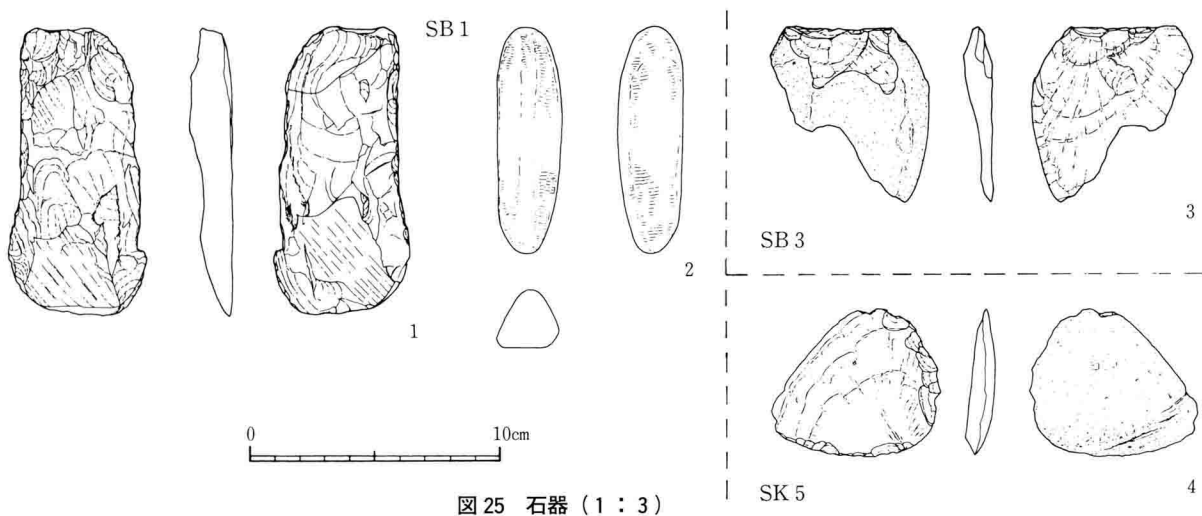


図25 石器 (1:3)

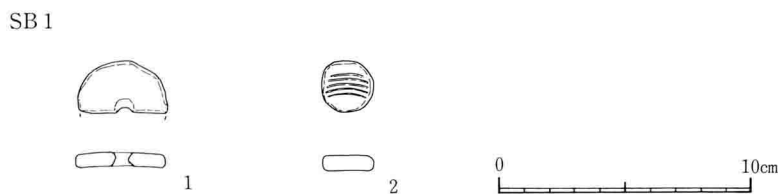


図26 土製品 (1:3)

第4節 吉田古屋敷遺跡の自然科学分析

<SK2・SK3土器内の土壌分析>

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに	2 SK3出土歯牙片等の鑑定
1 土器の内容物検証	(1)試料
(1)試料	(2)分析方法
(2)分析方法	(3)結果および考察
①腐植含量	参考文献
②リン酸・カルシウム含量	
③微細物分析	<図表・図版>
(3)結果	表1 土壌理化学分析結果
①土壌理化学分析	表2 微細物分析結果
②微細物分析	表3 残存菌の菌式および計測値
(4)考察	図版1 種実遺体
	図版2 検出歯牙

はじめに

長野市北部の浅川扇状地上に立地する浅川扇状地遺跡群吉田古屋敷遺跡では、発掘調査の結果、弥生時代中期後半の埋甕及び平安時代の土器棺が検出されている。これらは検出状況や考古学的所見により遺体等を埋納した土器の可能性が示唆されている。

本報告では、これらの土器内の内容物から遺構の用途を検証することを目的とし、土器内覆土を対象として動植物に由来する微細遺物の抽出と同定、土壌の理化学成分の分析を行う。

1 土器の内容物検証

(1) 試料

試料は、SK2（弥生時代中期後半の埋甕）とSK3（平安時代の土器棺）の各土器内より採取された土壌である。

これらの土壌は、SK2では埋甕上部（7.5kg）、底（1.0kg）から採取され、SK3では土器棺内より一括で1.5kgの土壌が採取されている。後者の土壌中には白色物質が認められており、肉眼観察の結果、非常に脆弱であり、後述する微細物分析の洗出しの段階で破損するおそれがあったため、事前に肉眼観察により分離・抽出を行っている。

これらの試料について、土壌の理化学性を調査（リン・カルシウム含量・腐植含量）、さらに、動物遺存体や種実遺体の有無に着目した分析（微細物分析）を実施する。また、SK3に含まれる白色物質については、微細物分析により得られた試料とともに、これら種類や部位等についての情報を得るため骨同定を行う。

(2) 分析方法

①腐植含量

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmの篩を全通させる（粉砕土試料）。粉砕土試料0.100～0.500 gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

②リン酸・カルシウム含量

粉砕土試料1.00 gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5 mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

③微細物分析

土壌試料を、30～40℃で3昼夜乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、目に付いた炭化物、土器などの遺物を拾い出す。水を満たした容器に試料を投入し、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。

容器内の残土を30～40℃で3昼夜乾燥後、前述の作業を繰り返すことによって炭化物の回収率を上げる。水を満たした容器に乾燥後の残土を投入し、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌した後、容器を傾斜させ、浮いた炭化物を0.5mmの篩に回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す。

容器内の残土を0.5mmの篩を通して水洗し、径0.5mm未満の砂泥を破棄する。回収した炭化物と分析後の残渣を、4 mm, 2 mm, 1 mm, 0.5mmの粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な果実、種子や1 mm角以上の炭化材、動物遺存体、土器などの遺物を抽出する。種実の形態の特徴を、所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川，1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか，2000）等と比較し、種類を同定し個数を求める。

分析後の種実等は、30～40℃で3昼夜乾燥後、種類毎にビンに入れ、乾燥剤を入れ保管する。

(3) 結果

①土壌理化学分析

結果を表1に示す。SK 2 上部・底と SK 3 覆土は、いずれも粘質土であり、国際法区分における野外土性（ペドロジスト懇談会編，1984）はLiC（軽植土）に分類される。土色はSK 2 上部・底は10YR 3 / 2、SK 3 は10 YR 3 / 1とSK 3 においてやや黒色味が強く、若干腐植集積量が多いことが窺われる。

分析の結果、腐植含量は土色と良く対応した関係を示し、SK 2 上部・底は1.44～1.47%、SK 3 は1.87%とやや腐植含量が高い傾向にある。一方、リン酸含量はSK 2 上部・底は1.92～2.20P₂O₅mg/g程度であるのに対し、SK

表1 土壌理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量(%)	P2O5(mg/g)	CaO(mg/g)	
SK2	上部	LiC 10YR3/2	黒褐	1.44	1.92	9.00
	底の方	LiC 10YR3/2	黒褐	1.47	2.20	8.73
SK3	LiC	10YR3/1	黒褐	1.87	3.62	9.86

(1)土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

(2)土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

LiC…軽植土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

表2 微細物分析結果

試料名	分析量	種類名	学名	部位	状態	個数または重量	備考	
SK 2	上部	7.5kg	イネ	Oryza sativa L.	胚乳	炭化	3個	
			アワーヒエ	Setaria itarica (L.) P. Beauv. - Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno	穎	炭化	4個	
			コムギ	Triticum aestivum L.	胚乳	炭化	2個	
			アカザ科	Chenopodiaceae	種子		2個	
			ザクロソウ科	Aizoaceae	種子		14個	
			炭化材		炭化		0.2g	
	底の方	1kg	不明炭化物		炭化		0.1g 未満	
			動物遺存体				4個	
			土器				12個	須恵器, 土師器など
			炭化材		炭化		0.1g 未満	
			不明炭化物		炭化		0.1g 未満	
			動物遺存体				5個	
			不明炭化物		炭化		0.1g 未満	
SK 3	1.5kg	不明炭化物		炭化		0.1g 未満		
		動物遺存体				5個		
		不明炭化物		炭化		0.1g 未満		

3では $3.62P_2O_5mg/g$ と若干高い特徴を示す。また、カルシウム含量もSK 2上部・底では $8.73\sim 9.00CaOmg/g$ 程度であるのに対し、SK 3では $9.86CaOmg/g$ と僅かに高い傾向が認められる。ただし、土壤中のカルシウム含量はリン酸含量と比べる変動幅が比較的大きいことから、有意差を指摘するには至らない。

②微細物分析

結果を表2に示す。表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、実体顕微鏡下の観察による種類間の区別が困難なものを示す。また、微細片を含み個数推定が困難な種類は、乾燥後の重量を表示した。

SK 2上部からは、栽培植物のイネ、アワーヒエ、コムギの炭化種実と、草本のアカザ科、ザクロソウ科の未炭化の種実が検出されたが、SK 2底・SK 3からは、同定可能な種実は確認されなかった。この他に、SK 2上部からは土器片が、全3試料からは、5mm角未満の炭化材や木材組織が認められない部位・種類共に不明の炭化物、動物遺存体とみられる微細片が確認された。以下に、本分析によって得られた種実の形態的特徴などを記述する。

・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

胚乳の破片と穎(果)の破片が検出された。炭化しており黒色を呈す。完形ならば長楕円形でやや偏平、長さ5mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。破片の大きさ2~3mm程度。胚乳は、一端に胚が脱落した凹部があり、表面はやや平滑で、2~3本の縦溝がみられる。穎は、基部に特徴的な円柱状の果実序柄がある。穎は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。

・アワーヒエ (Setaria itarica (L.) P. Beauv. - Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno) イネ科

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。広楕円形でやや偏平。径1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。基部には胚の凹みがある。アワ、ヒエなどの区別は、走査型電子顕微鏡下による内外穎の観察により可能である(松谷, 1980; 2000など)が、今回の試料は、穎の付着は認められなかった。

・コムギ (Triticum aestivum L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色を呈す。楕円体。長さ4.5mm、径3mm程度。腹面には1本のやや深く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径0.9mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢が強い。

・ザクロソウ科 (Aizoaceae)

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径0.6mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く、表面には微細なドーム状突起が臍を取り囲むように同心円状に配列する。

(4) 考察

弥生時代中期後半の埋甕（SK 2 上部、底）と、平安時代の土器棺（SK 3）の2遺構の覆土土壌の理化学性は、両遺構で覆土土壌の性質が若干異なり、歯牙片や骨片が検出されたSK 3において腐植含量、リン酸含量ともに若干高い傾向にある。一般的に土壌に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983、Bolt・Bruggenwert, 1980、川崎ほか, 1991、天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ （川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える場合が多い。今回分析を行ったSK 3では天然賦存量を超えるリン酸含量であることが確認されたこと、さらに、SK 2を基準とし腐植含量から推量される以上のリン酸が富化されていることから、SK 3には骨などの遺体成分が残留していると考えられる。このことから、本分析結果は当土壌内から歯牙片や骨片などが抽出されている結果と調和的と言える。一方、SK 2は、リン酸含量は天然賦存量を下回り、微細物分析では、動物遺存体と考えられる微細片が検出されているが、種類・部位等が不明であること、後述するように周囲から流れこんだ土壌の影響も考えられる。そのため、今回の分析結果からは遺体等に由来する土壌の理化学成分及び微細物の存在を支持することはできない。

ところで、弥生時代中期後半の埋甕であるSK 2上部からは、栽培植物のイネ、アワ・ヒエ、コムギの炭化種実が検出された。イネ、アワ、コムギは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種で、胚乳が食用される。また、未炭化のアカザ科、ザクロソウ科などの草本類の種実も検出されており、これらは人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類である。これらの種実遺体が埋甕内から検出された状況を考慮すると、栽培植物に由来する炭化種実は、当該期の本遺跡で利用された植物質食糧と考えられるが、未炭化の種実も含まれることから、これらを含む遺構周囲の土壌が混在している可能性がある。また、種実遺体の検出量が少量であることや、SK 2上部のみでこれらの種実遺体が検出されていることから同様の可能性が示唆される。沖縄県伊江島ナガラ原東貝塚の貝塚時代後期（6世紀）とされる遺物包含層から検出された、琉球最古とされたイネの穎果の年代測定結果が「現代」の値を示した（木下, 2003；高宮, 2003）事例などもあることから、栽培植物の炭化した種実遺体の由来については慎重に検討する必要がある。

2 SK 3 出土歯牙片等の鑑定

(1) 試料

試料は、平安時代と考えられる土器棺内の土壌中より抽出された白色物質である。これらは形態等の観察から歯牙片及び種類・部位不明の骨片と考えられる。なお、微細物分析においても同様の試料が抽出されたが、いずれも微細片であったため鑑定は不可能であった。ここでは、肉眼観察により抽出された白色物質について鑑定を行う。

(2) 分析方法

試料に付着した砂分や泥分を乾いた筆・竹串、あるいは水に浸した筆で静かに除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合する。試料を肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定・解析は、金子浩昌氏の協力を得ている。

(3) 結果および考察

結果を表3に示す。土器棺内の土壌中から検出された白色物質は、ヒトの歯牙片及び少量の骨片からなる。歯牙は、かなり破損した状態であったが、乳歯・永久歯が確認された。これらの遺存状況は、破損するものが多

表3 残存歯の歯式および計測値

SK 3		右											左					
上顎	計測箇所	M ²	M ¹	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	
		歯冠長	×	×	—	×	×	6.08	×	×	×	×	5.99	×	×	11.93	×	×
	歯冠幅			11.53			—								11.50			
下顎	計測箇所	X			dm ²	dm ¹	dc	di ²	di ¹	di ¹	di ²	dc	dm ¹	dm ²	X			
	歯冠長				×	×	○	×	×	×	×	×	6.00	×				9.42
	歯冠幅												4.98					9.70
	計測箇所				dm ₂	dm ₁	dc	di ₂	di ₁	di ₁	di ₂	dc	dm ₁	dm ₂				
	歯冠長	10.85	8.75	5.79	×	×	×	×	×	×	×	×	×					
	歯冠幅	10.79	7.21	4.42														
その他	計測箇所	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
	歯冠長	×	×	12.40	×	×	×	6.06	5.33	5.79	×	×	×	×	13.16	×	×	
	歯冠幅			11.56				3.81	3.41	4.42					11.60			
	下顎 dc 片5																	
	歯牙片37																	
	骨片5.9g (土塊状)																	

凡例 ○: 検出(計測不可) ×: 未検出
 乳歯 di: 切歯 永久歯 I: 切歯
 dc: 犬歯 C: 犬歯
 dm: 臼歯 P: 小臼歯
 M: 大臼歯

く、修復しても不完全な状態の歯牙も多い。完存もしくは修復できたものは、全歯のごく一部であり、破損歯を含めても多くが既に失われた状態であった。また、骨片は小片であるために、顎骨であるか判断は不可能であった。なお、歯牙および骨片に被熱の痕跡が認められないことから、火葬されない状態で埋納された可能性がある。

検出された歯牙のうち完存、あるいはそれに近い歯牙の計測値によれば、本人骨は男性と推定される。また、乳歯が萌出し、永久歯が未萌出の段階と推定されることから、4 - 6歳児の幼児 - 小児とみられる。特に第1大臼歯が萌出直前の状態であったと思われることから、6歳に近い年齢であった可能性がある。

引用文献

Bowen, H. J. M., 1979, Environmental Chemistry of Elements. [浅見 輝男・茅野 充男 (訳), 1983, 環境無機化学, 元素の循環と生化学, 博友社, 297p.]

Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M., 1976, SOILCHEMISTRY. [岩田 進午・三輪 睿太郎・井上 隆弘・陽 捷行 (訳), 1980, 土壌の化学. 学会出版センター, 309p.]

天野 洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発. 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 28 - 36.

石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

川崎 弘・吉田 滂・井上 恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発. 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 23 - 27.

木下 尚子, 2003, 遺物包含層における現代イネ混入の検討. 考古学研究室報告 第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 55 - 62.

高宮 広土, 2003, ナガラ原東貝塚出土の植物遺体 (2002年度). 考古学研究室報告 第38集, 熊本大学文学部考古学研究室, 49 - 54.

土壌標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壌標準分析・測定法. 博友社, 354p.

土壌養分測定法委員会編, 1981, 土壌養分分析法. 養賢堂, 440p.

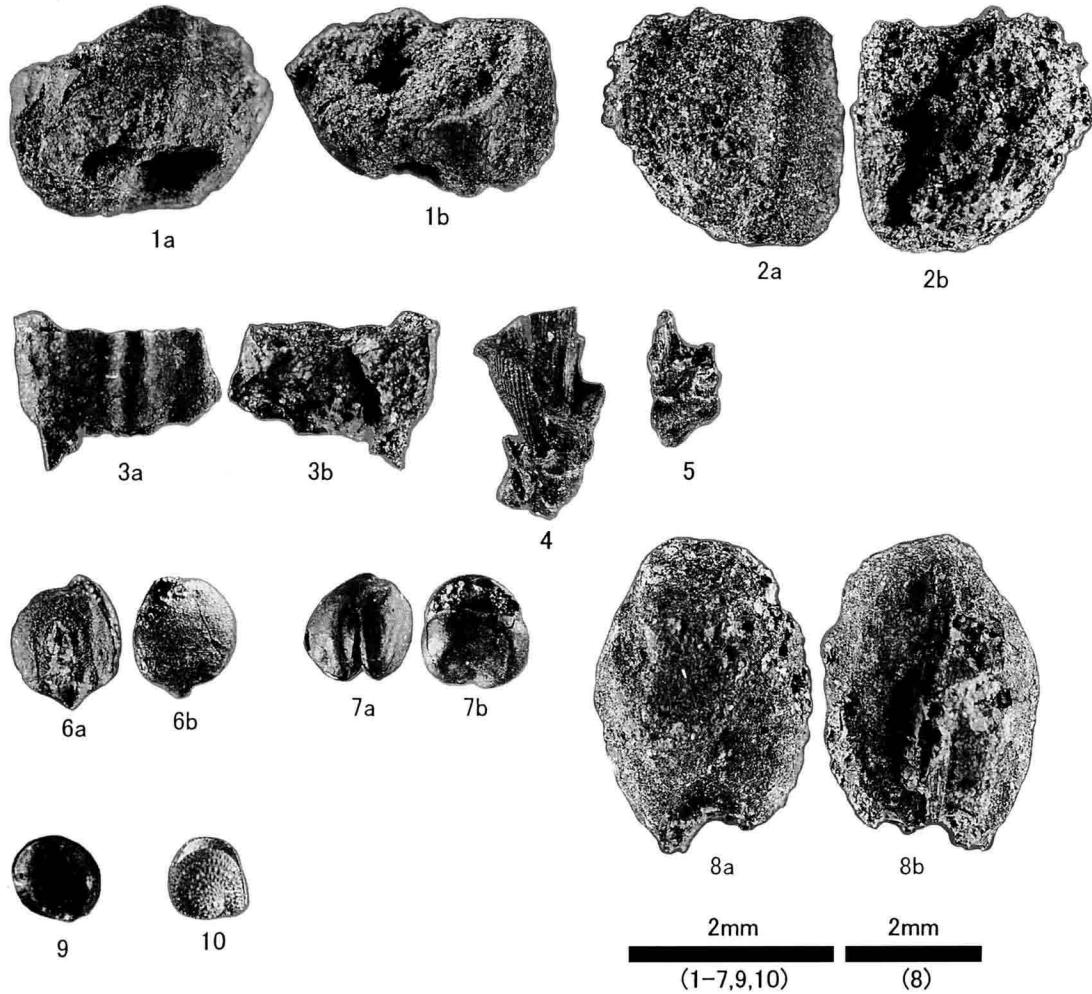
中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.

農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会編, 1984, 土壌調査ハンドブック. 博友社, 156p.

松谷 暁子, 1980, 十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について. 浦幌町郷土博物館報告, 第16号, 203 - 211.

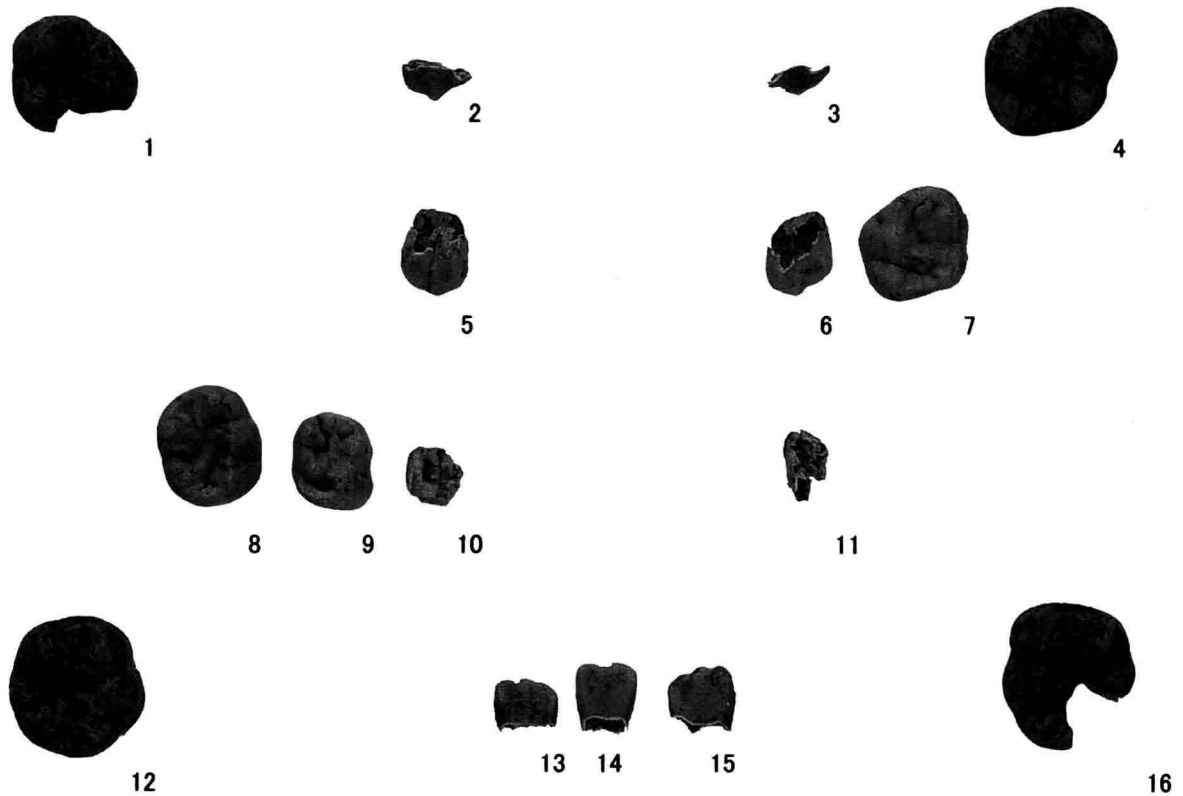
図版1 種実遺体



- 1. イネ 胚乳(SK2 上部)
- 3. イネ 胚乳(SK2 上部)
- 5. イネ 穎(SK2 上部)
- 7. アワーヒエ 胚乳(SK2 上部)
- 9. アカザ科 種子(SK2 上部)

- 2. イネ 胚乳(SK2 上部)
- 4. イネ 穎(SK2 上部)
- 6. アワーヒエ 胚乳(SK2 上部)
- 8. コムギ 胚乳(SK2 上部)
- 10. ザクロソウ科 種子(SK2 上部)

図版 2 検出歯牙



0 1cm

- | | |
|---------------|----------------|
| 1. 右上顎第 1 大臼齒 | 2. 右上顎犬齒 |
| 3. 左上顎犬齒 | 4. 左上顎第 1 大臼齒 |
| 5. 右上顎乳犬齒 | 6. 左上顎乳犬齒 |
| 7. 左上顎第 2 乳臼齒 | 8. 右下顎第 2 乳臼齒 |
| 9. 右下顎第 1 乳臼齒 | 10. 右下顎乳犬齒 |
| 11. 左下顎乳犬齒 | 12. 右下顎第 1 大臼齒 |
| 13. 右下顎側切齒 | 14. 右下顎中切齒 |
| 15. 左下顎中切齒 | 16. 左下顎第 1 大臼齒 |

第Ⅳ章 結語

今回の調査においては、縄文後期・弥生中期・平安の各時代の遺物・遺構を確認した。また、各時期によって住居域や墓域といった土地利用の展開に違いがみられるものであった。

住居跡は全部で3軒、調査区内でそれぞれが離れて位置している。住居内出土土器からいずれも弥生時代中期後半のものであった。住居の平面形態は隅丸長方形である。周辺の遺跡においても同時期のものは確認されているが、形態は円形もしくは楕円形であり、弥生時代後期においては長方形となっている。住居の平面形態については、北信地域（千曲川水系）では中期後半までは円形が主流で、後期初頭から長方形の住居が大半を占めるようになっていく。その中で中期後半・栗林式土器の段階において円形住居から長方形住居への変化が行われたものと考えられる。尚、この地域での弥生時代中期から後期にかけての住居域のありかたは、住居が密集するということはみられず疎らに存在する傾向があるが、中期から後期にかけて、住居形態を変化させながら集落が続いていたことが窺える。また、大型住居のSB1に遺物出土の様相に特異性がみられた。住居床面より6～10cm上の位置で炭化木材と原形を残す土器が多く出土したものである。住居廃棄が意図的に行われていた事も考えられ、集落の中での特別な建物、または存在であったことも想定される。

弥生時代中期の遺構で注目されるものとして埋甕（SK2）が挙げられる。直径63cmの円形の掘り込みの中に甕完形個体を直立に据え置き、意識的に上半部を意識的に打ち欠いた可能性のある甕2個体を蓋として重ね、埋置したものである。出土状況からは、当地を含む東日本各地において弥生中期前半までにみられる再葬墓に類似した様相がみられ、調査時点では埋葬施設としての可能性を考えた。しかし、弥生中期後半段階での出土例が見当たらないことから、用途に関して慎重な判断が必要であると考え、甕の内容物を明らかにするため自然科学分析（第Ⅲ章第4節）を行った。これにより、土壌中のリン酸含有量の比較から「遺体等に由来する土壌の理化学成分及び微細物の存在を支持することはできない」との結果を得た。出土状況からは埋葬施設の可能性が示唆されたが、土壌分析の結果からはその可能性は薄く、本例を弥生中期前半までの再葬墓の系譜上で理解することには無理が生じるものと判断せざるを得ない。以上のことを踏まえ、現段階では本例の用途について明確にすることは困難であり、今後検討を重ねる必要がある。よって以下に調査での遺構の特長・所見を述べるものとする。甕は直立の状態で埋められている。甕は煤の付着が認められることから煮沸用品からの転用品であり、身の甕の底部には焼成後の穿孔が認められる。蓋は二重に、隙間なく被せられていたことが想定される。遺構がほぼ同時期の住居址の近くに位置している。特に土器が立てた状態であることから、何らかの物を収納・保管する施設であったことが考慮される。

平安時代の遺構では、埋葬施設2基（SK3・SK7）を確認した。注目されるものとして甕3個体を組み合わせた土器棺（SK3）が挙げられる。甕の中からヒトのものと思われる歯を確認し、鑑定（第Ⅲ章第4節）を行ったところ、被葬者は4～6歳の男子であること、牙齒や骨は熱を受けていない状態であるとの結果を得た。甕を3個合わせた長さが75cm程であることも踏まえ、屈葬による幼児の埋葬施設であると判断した。歯が残っていた甕の方向から頭位は北東が推定され、土坑の形態から成人の埋葬施設と考えられるSK7でも副葬品（灰釉手付瓶）の位置から頭位は同じく北東方向が考えられる。SK3・SK7共に出土した土器の年代から9世紀後半～10世紀初頭とほぼ同じ時期のものと判断され、主軸・頭位が同じ方向であること、隣接した位置関係にあることから、一連の埋葬習慣のもと営まれた埋葬施設であるものと思われる。

遺構・遺物一覧表

遺構名 (略式番号)	時 期 (遺 構)	土 器				他 遺物	
		注記番号	遺構内属性	種 別	総重量 (内 訳)		実測・拓本個体 (図版番号)
1号住居 (SB1)	弥生 中期	SB1-1	覆土 上層		13,780 g	打製石斧 1 (図25-1) みがき石 1 (図25-2) 紡錘車 1 土製品 1 (図26-1・2)	
		SB1-2	覆土 中層	(縄文土器)	114 g		
		SB1-3	覆土 下層				
		SB1-4	覆土 下層	(弥生土器)	13,666 g		
		SB1-5	覆土 トレンチ				
		SB1-7	覆土 トレンチ				
SB1下面	縄文 後期	SB1(下)			190 g	剥片	
				(縄文土器)	190 g		実測：1(図20-9)
2号住居 (SB2)	弥生 中期	SB2-1	覆土 上層		4,823 g	剥片	
		SB2-2	覆土 下層	(縄文土器)	13 g		拓本：1(図20-20)
		SB2-3	覆土 床面	(弥生土器)	4,810 g		実測：5、拓本：8 (図22-1~14)
3号住居 (SB3)	弥生 中期	SB3-1	覆土		389 g	剥片(図25-3)	
				(弥生土器)	389 g		拓本：5 (図22-15~19)
1号土塚 (SK1)	弥生 中期	SK1	覆土		1,564 g		
				(弥生土器)	1,564 g		実測：3 (図23-1~3)
2号土塚 (SK2)	弥生 中期	SK2-1	覆土		5,395 g	実測：3 (図23-4~6)	
		SK2-2	埋甕-1	(弥生土器)	5,395 g		
		SK2-3	埋甕-2				
		SK2-4	埋甕-3				
3号土塚 (SK3)	平安	SK3-1	覆土		3,695 g	実測：3 (図24-4~6)	
		SK3-2	甕棺-1	(土師器)	3,695 g		
		SK3-3	甕棺-2				
		SK3-4	甕棺-3				
4号土塚 (SK4)	弥生 中期	SK4	覆土		564 g	拓本：5 (図20-10~14)	
				(縄文土器)	102 g		
				(弥生土器)	462 g		
5号土塚 (SK5)	弥生 中期	SK5	覆土		270 g	刃器(図25-4)	
				(弥生土器)	270 g		
6号土塚 (SK6)	弥生 中期	SK6	覆土		122 g	剥片	
				(弥生土器)	122 g		
7号土塚 (SK7)	平安	SK7	覆土		231 g	剥片	
				(土師器)	16 g		
				(灰釉土器)	215 g		実測：1(図24-1)
溝 1 (SX1)	(不明)	SX1-1	覆土 上層		6,508 g	剥片	
		SX1-2	覆土 中層	(縄文土器)	527 g		拓本：1(図20-19)
		SX1-3	覆土 下層	(弥生土器)	5,826 g		拓本：1 (図22-20)
				(土師器)	30 g		実測：1(図24-2)
				(須恵器)	125 g		実測：1(図24-3)
溝 2 (SX2)	(不明)	SX2-1	覆土 上層		3,609 g	拓本：4 (図20-15~18) 実測 1：(図22-23)	
		SX2-2	覆土 下層	(縄文土器)	600 g		
				(弥生土器)	3,009 g		

